
つまらない仕事

bunz0u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つまらない仕事

【Nコード】

N8077C

【作者名】

bunzou

【あらすじ】

自称私立探偵の須田正人に、いかにもつまらなそうな依頼が持ち込まれた。一言もなく別れた彼女の新しい男を調べて欲しい。しょうもない男のしょうもない依頼に思ったが・・・。

「彼女は、突然他の男とつき合い始めたんです」

前田吉男、24歳くらいは、首をひねりながら、肩を落としてそう言った。

「おかしいと思いませんか？ 僕と彼女はいい感じだったのに、それなのに、ある日を境にまるで僕のことを忘れてしまったかのように、他の男とつき合い始めたんですよ。別れの言葉もなしに。こんなこと信じられますか？」

暗いトーンで熱弁を振るう前田を、須田正人はいかにも熱心そうな様子で眺めていた。

「もちろん、彼女が本当に僕のことを忘れたわけじゃありませんよ。ただ、電話をしても出てくれないし、メールを送っても返事をくれないだけです」

「彼女に直接会いに行つてはいないんですか？」

「それはもちろん会いに行きましたよ」前田は大きく溜息をついた。

「彼女は、帰ってくれと言うだけで、会つてはくれませんでした」

「なるほど、ご事情はよくわかりました。それで、ご依頼の内容はどのようなことでしょうか？」

「ええ、ええ、それはですね」前田は一枚の写真を取り出した。「この左側の男を徹底的に調べて欲しいんですよ」

須田は写真を受け取った。道を歩いている二人の男が写っている。前田が言った左側の男は、おそらく30を越えていて、それなりに二枚目だった。

「これは、あなたのお相手ですか？」

「そう、その通りです。とにかくそいつのアラを探して欲しいんですよ」

「わかりました。差し支えなければ、理由を教えてくださいませんか？」

前田はニヤリと笑って答えた。

「思い知らせてやるんです」

須田は黙ってうなずいた。

「概算の見積を出しますので、少々お待ちください」

前田は汗を拭きながら空を見上げた。今日は暑い。涼をとるために、ファミリーストランに入って、アイスコーヒーを注文した。上着を脱いで、煙草を取り出して火をつけようとした。

「よお、兄ちゃん。火遊びはよした方がいいぜ」

前田は突然の声に顔を上げた。いつの間にか、向側に小柄で筋肉質な男が座っていた。危ない、前田はそう感じて立ち上がるうとした。

「そうあせんなよ。まだ注文したもんもきてねえしな」

男の言葉で、前田は席に押さえつけられた。アイスコーヒーが運ばれてくると、男はビールを注文した。前田はアイスコーヒーに手をつけずに、男をよく観察しようとした。

「まあ遠慮するなよ。それとも、俺の顔に何かついてるのか？」

再び男の言葉で前田の行動は押さえつけられた。男は一段低い声で無表情にしゃべり始めた。

「貴様は何も知る必要はない。探偵を雇ったようだが、無駄なことだ。貴様は何も知ることはできないし、そうする意味もない。わかるよな、俺が何を言いたいかは？」

「いつたい、何の話だ？」

「わかってんだろ」男は運ばれてきたビールを一口飲んだ。「例の女の話だ。さつさと忘れちまえよ」

「何を言ってるのかわからないな」

「しらばっくれんなよ」男は芝居がかった口調でそう言った。前田は完全に気圧されていた。男の言葉ではなく、その凶暴な冷たい目に。しばらくして、男は口を開いた。

「もう行ってもいいぜ、勘定は俺が払つといてやるからよ」

前田は男の雰囲気を押されるようにして、店から出た。

小汚い喫茶店で、うまくもなにもないコーヒーを飲みながら、須田は依頼のことを考えていた。とりあえず、写真の男の身元を割り出す必要がある。女に張り付くのが一番手っ取り早いかもしれない。

「ここは空いてるかな？」

須田の思考は男の声に遮られた。顔を上げると、なじみのある顔、三山雄一がテーブルの向側に立っていた。

「これは驚きだ。飲み屋の経営者もこんなところに午前中から来るのか」

三山はそれを聞いて、今にも大笑いしそうになりながら、勢いよく椅子を引いて腰を下ろした。

「おいおい、もうほとんど昼だぞ？ それにな、俺が経営してるのはバー、パブ、スナック。どれも高級っていうのが頭につくんだ。そこの赤提灯みたいな言いかたはやめてくれよ」

三山は手をあげてウェイターを呼んだ。

「メロンソーダを頼むよ。おっと、アイスクリームを忘れないでくれよ」

「相変わらずそれか。成人病まっしぐらじゃないか？」

須田の嫌味を無視して、三山は須田の顔を凝視した。

「ところでな、さっきはずいぶん難しそうな顔をしていたようだけど、難しい依頼でもあったのか？」

「まあ、つまらなそうな仕事なんだがな。この男を調べるんだ」須田は財布から写真を取り出して、三山の前に置いた。「知ってるか？ この左側の男」

三山は写真を手にとって、しばらくそれを見つめてから、おもむろにうなずいて、それを須田に返した。

「知ってるよ。つまらん男だ」ウェイターがメロンソーダを持って

きたので、三山はそれを受け取って、一口飲んだ。「こいつはな、ヒモ気取りのアホだ。クスリも扱ってるらしいけどな。まあ、ろくでもない野郎だよ」

「ヒモにクスリか。思ったよりもやっかいな話かもな」須田は難しい顔をして、コーヒーを一口飲んでからもう一つの質問をした。「三島理恵って女は知ってるか？」

「いや、知らんな。その女がこのヒモ気取りに引っかけられたのか？」

「かもしれない」

二人の間に沈黙が流れた。三山はアイスクリームを一口ほど口に放り込んでから、須田の目を覗き込んだ。

「女に関しては、お前の元女房を頼るべきだな」

須田にとっては、ちょうどいい具合になった。とりあえず、前田の言った女、三島理恵

の家に行ってみると、写真で見た例の男が出てくるところに遭遇してきた。男を見失わないように、ゆっくりと後をつけた。男は振り向きもせず、悠然と歩いていった。

男が行き着いた先は、見るからに高級なマンションだった。須田は男の乗ったエレベーターが5階に止まったのを確認した。ポストを見てみると、五階には六部屋あり、そのうち三部屋は空室という紙が張られていた。

入居者が居る三部屋のうち、二部屋は家族で住んでいるようなので、話は簡単だった。残った一部屋、安田という表札が貼られている部屋が目的の男の住処に違いなかった。

須田は、安田の部屋に行ってみたい衝動にかられたが、なんとなく思いとどまった。気は進まなかったが、手っ取り早く安全な方法を取ることにして、電話をかけた。

「はい、木村興信所です」

「須田という者ですが、一人身で三十代の木村さんをお願いします」

「あなたは知らないだろうけど、いたずら電話を切っても文句を言われる筋合いはないのよ」

「ユーモアのセンスがないともてないぞ」

「充分もててるわよ」

「なら良かった。ついでにもう一ついい話だ」

須田は安田の住所を告げた。

「何それ？」

「今言った住所に住んでる奴の情報が欲しい」

受話器の向こうから溜息が聞こえた。

「それじゃ、いつもの店で二人分の予約ね」

「相手がいるのか？」

「作るのよ」

二人の間に、しばらく沈黙が流れた。

「まあ、しっかり頼む」

「安心しなさい、候補はたくさんいるから」

いつも候補止まりだろうが、と心の中でつぶやきながら、須田は電話を切った。初日には出来すぎと言っていい成果だった。

翌朝、やかましく電話が鳴っていた。須田は嫌々起き上がって受話器を取った。

「はい、須田探偵事務所です」

「もしもし、須田さんですか？　すぐに会ってください、緊急事態です」

「前田さん、落ち着いてください。何があったんです？」

「そうは言っても」

「とにかく少しの間でいいから落ち着いてください。深呼吸をするといいですよ。」

受話器から、前田が深呼吸をする音が聞こえた。30秒ほどして、だいぶ落ち着いたようだった。

「実は、脅されたんです」

「誰にですか？」

「知らない男です。でも、あの男が差し向けたに違いありません。

それに、あなたに依頼をしたことも知られてたんです。どうすればいいんでしょうか」

「そうですね。それで、依頼をキャンセルしますか？」

「いや、それは駄目です。調査はやめないでください」

「それでしたら、とりあえず普段通りに行動するようにしてください。今のところは警告だけのようですから、まだ多少の余裕はあるはずです。なんとかしますよ。仕事が終わったら連絡するようにしてください」

「え、ええ、わかりました」須田の冷静な態度に、前田もどうにか落ち着きを取り戻した。「それじゃ、仕事が終わったら必ず連絡します」

「ええ、くれぐれも気をつけてください」

須田は受話器を置いて、大きく息を吐き出した。できるだけ早く

片付ける必要がある。足を机の上に投げ出して、取るべき行動を考え始めた。しかし、それは激しいノックと、それに続いて乱暴にドアが開けられた音に遮られた。

「いるんでしょ？ さっさと出てきなさい」

木村は返事を待たずにドアを開けた。須田の顔をよく見ると、うなずいて口を開いた。

「景気悪そうね、あんた」

木村はバックから煙草を取り出した。

「俺は嫌煙派なんだがな」

須田の言葉を見殺して、木村は煙草を口にくわえた。しばらくバツクをあさっていたが、溜息をついて顔を上げた。

「火、貸してくんない？」

「ガスコンロでも使ってくれよ」

須田は面倒くさそうに給湯室を指差した。木村は何かつぶやきながら、給湯室に入っていた。煙草に火をつけると、盛大にふかしながら戻ってきて、椅子に座った。須田はいつの間にかウイスキーのビンを机の上に出していた。

「昼から飲もうなんて、いいご身分なこと」

「飲まないとやってられない時もあると思うけどな」

「ああ、そう」木村はタバコの煙を須田に吹きかけた。「くだらないおしゃべりをしにきたんじゃないのよ」

机の上に資料が投げ出された。須田はそれを手にとってざっと目を通した。木村はその間、コンパクトを取り出して化粧を直していた。

「なるほどね、確かにつまらん野郎だな」

「誰が？」

「このファイルの野郎のことだよ」

木村はタバコを机でもみ消すと、コンパクトをしまって立ち上がった。

「それじゃ、約束の件よろしくね」

「帰るのか？」

「用は終わったでしょ」

そう言って、木村はさっさと出て行った。須田はウイスキーのビンを手にとって、軽く振ってから机の中に戻した。

須田は気分転換のために、机の上に積んでおいた資料を片付け始めた。別に好きなわけではないのだが、なんとなく頭がスツキリする。机の上が半分ほど片付いたころ、ノックの音が響いた。

「どうぞ、開いてますよ」

「失礼します」

ドアを開けたのは若い女だった。女は落ち着きなく、事務所内を見回していた。須田は女を落ち着かせようと、穏やかな笑顔を浮かべた。

「そんなに緊張なさらなくても大丈夫ですよ。どうぞ、お掛けになってください」

女はまだ不安そうだったが、須田に言われるがまま、椅子に腰を下ろした。

「あの」女は少し口ごもったが、すぐに意を決したようにしゃべり始めた。「あの、私は三島理恵といいます」

表情には出さなかったが、須田は内心では少し驚いた。依頼人の彼女とやらが現れるとは思っていなかった。

「私のことをあなたが知っているかはわからないんですけど」

三島は言葉を切つて、須田の顔を凝視した。須田はうなずいた。

「存じあげてますよ。何故かは答えられません」

「それじゃあ、私がここに来た理由はわかりますよね」

「今ひとつわかりませんね。よろしかったら、詳しい事情を話していただけますか？」

三島は大きく溜息をついて、しばらく視線を宙にさまよわせた。

須田の顎のあたりで、それを止めた。

「そうですね、それが一番ですよね」

「もちろん、秘密は守ります。安心してください」

「はい、わかりました」

三島は力強くうなずいた。須田はボールペンと紙を用意した。

「私は、ある男と半年ほど前からつきあってたんです。最初はおかしいところは何もなかったし、うまくいったんですけど、少し前から妙な感じがするようになったんです」

「何かあったんですか？」

「彼は私の家に来ると、何かを探しているような感じがしたんです。最初は気のせいだと思ってたんですけど、違いました。彼は確かに何かを探していました。それで、友達に相談したら、安田さんという人を紹介してくれたんです。しばらくの間は安田さんの言う通りにしていたんですけど、一昨日安田さんの所に行ったとき、机の上に私の名前といっしょに、ここの住所が書いてるメモが置いてあったんです」

「それで、ここにいらっしゃったんですか」

「なんというか、その、ここに来れば悪いことにはならないんじゃないかって、そう思ったんです」

三島の言葉に、須田は軽くうなずいて、三島の目を覗き込んだ。
「なるほど。本当にそれだけですか？」

「いえ、実は」三島はバックから封筒を取り出した。「今朝こんな手紙が家にきていたんです」

その封筒には、三島理恵様とボールペンで書かれているだけだった。切手は貼っていない。

「読んでもかまいませんか？」

「どうぞ」

須田は封筒の中から、切り取られて三つに折られた大学ノートの切れ端を取り出した。広げてみると、あまりきれいとはいえない字で紙が埋めつくされていた。

ざっと読んでみると、この手紙に書いてある重要なことは二つ。安田を信用するなということと、須田正人、つまりここを頼るよう

にということだった。須田は紙をたたんで封筒に戻して、三島に差し出した。

「不思議な手紙ですね」

「ええ。でも、なんとなく無視できないような気がしたんです」三島は封筒を受け取って、バックにしまった。「それで、もし、仕事として頼んだら、いくらくらいかかるんでしょうか？」

「残念ですが、今の状況では依頼をお受けしたとしても、何も出来ないと思います。それに、依頼を受けたとしても、あなたからではなく、その手紙の送り主から代金を受け取るべきだと思いますね」須田は少し身乗り出した。「おそらくその男、あるいは女は、私の知っている人間でしょうからね。まあ、そういうことで納得していただけるのなら、この依頼、引き受けさせていただきます」

三島は驚いた顔で、しばらく黙っていた。気を取り直すと、頭を下げた。

「じゃあ、よろしくお願いします」

「契約完了ですね。それでは、連絡先を教えてくださいませんか。それから、このことは口外しないようお願いします」

須田は再び安田の住むマンションに向かった。最初に来たときに目をつけておいた、マンションの向側にある喫茶店の前に立った。なかなか洒落た店で、コーヒーにもいい値段がついていた。おかわり無料とのことだったので、たいして迷わずに店に入った。

三杯ほどコーヒーを飲んだころ、須田は背後から声をかけられた。「この暑い日に、よくそんなむさい格好で熱いものをすすってらるな」

気楽で涼しげな格好をした三山だった。

「それにしても、随分としけた面をしてるな。俺が最近聞いた話と関係ありかな？」

「どんな噂だ？」

「どつかのヒモがな、大分追い詰められてるらしいんだ。客が裏切ったか、弁護士が裏切ったか、それとも他の誰かが裏切ったのか。ま、大分ヤバイ状態らしい」

三山はオレンジジュースを一気に流し込んだ。

「一番最近の話だと、女にも逃げられたらしい。一人か二人しか残ってないんだそうだ」

「商売あがったりだな」

「いや、奴さんなかなかしぶといようでね。裏切り者探すと、新しい女の確保に走り回ってるらしい。何かと邪魔が入ってるようだけどな」

三山は意味ありげな目で須田を見た。

「まさか、思い当たるフシはないよな？」

「芝居はやめる。何が言いたいんだ？」

「わかったよ。お前が調べてる噂のヒモの関連でな、お前に合わせたい奴がいるんだよ」

「無駄足はごめんだぞ」

「依頼人になるかもしれないぜ。何時なら空いてるんだ？」

須田はコーヒーを一口飲んで、カップの中を見つめながら、軽く肩をすくめた。

「10時以降なら大丈夫だ」

「場所はいつものところだ。遅れないようにしてくれよ」

そう言つて、腰のベルトに挿してあつたサングラスをかけると、

三山は早足で店を出て行つた。須田は大きな溜息をついた。

「また厄介ごとが増えそうだ」

喫茶店ではかなり粘ったが、大した成果は得られなかった。須田は時間を確認すると、前田からの連絡を受けるために事務所に戻ろうと立ち上がったところに、携帯電話が鳴った。木村からだった。

「今は事務所？」

「いや、外だ」

「それはそれは、お仕事熱心で結構なことですね旦那さま」

「まさか、それを言うために電話をかけてきたんじゃないよな？」

「もちろん、あんたほど暇じゃないからそんなわけはないんだけど、例のヒモ野郎のことで面白いことがあってね」

「なんだ？」

「どうも警察が動いてるらしい、なんでかは知らないけどね。ま、薬物とかそういう線のおまけだとは思っけど」

「奴が元締めってことはないだろうからな、おまけがいいところだろう」

「その様子だと、あんたのお友達からも情報がいつてるみたいね。ところでこれは知ってる？ 警察は奴のバックにいる男をあぶりだしたいらしいってのは」

「初耳だな、個人事業主じゃなかったのか？」

「少なくとも、警察はそう考えてない。なんの証拠もなく動くとも思えないし、それなりの確証があるんでしょ」

「なるほどね」

「あんたのお友達の刑事にでも聞いてみたら？」

「的確なアドバイスを感謝するよ」

「どういたしまして。割増料金は請求させてもらうから、そこそこよろしく」

「わかったよ。貴重な情報をどうも」

須田は電話を切って溜息をついた。しかし、すぐに次の電話がか

かつてきた。事務所からの転送電話だった。

「はい、須田探偵事務所です」

「どうも、前田です」

前田の声は朝に較べると随分落ち着いていた。

「ああ、これはどうも。それで、なにかありましたか？」

「いや、平穏な一日でしたよ。やっぱりあれはただの脅しだけだったんですかね」

「いえ、おそらく様子を見ているんでしょう」須田は浮かれ気味の前田に釘を刺した。「しばらくしたら、また接触してくるかもしれません」

「それじゃあ、まだ安心できないんですか？」

「今日のように、あなたが何事もなかったように行動していれば大丈夫ですよ。当分はこのことは忘れているのが一番です」

「そうは言っても気になりますよ」

「安心してください。これ以上何かあれば私の方から警察に連絡しますし、進展があればきっちり報告しますから」

「そうですか、わかりました。もう少し様子を見てみることにします」

事務所に戻って、たまっていた事務処理を片付けていると、いつの間にか8時をまわっていた。その間、依頼人は一人も現れなかった。須田は早めに「いつものところ」に行くことにした。

「いらつしやいませ。ああ、須田さんですか」

バーテンダーは穏やかな笑顔で須田を迎えた。けっこうな高級感のある店だが、値段も雰囲気も気どったところがないバーなので、須田はそれなりの常連だった。ストウールに腰かけると、ハーフロックのライウイスキーが当たり前のように出てきた。須田は唇を湿らせる程度にそれを飲んだ。

「この店に似つかわしくないオーナーはまだ来てないよな」

「ええ、まだですよ。また何かやっかいごとがあつたんですか？」

「ああ、やっかいなことになるかもしれない。それはそうと、晩飯になるようなものを頼むよ」

「すぐに出せるのはフィッシュ&チップスくらいしかありませんけど、かまいませんか？」

「ちょうど揚げ物が食べたかつたんだ」

バーテンダーは厨房に声をかけた。

「それはそうと、何で今日は客があんまりいないんだい？ 場違いなオーナーが来るのが知れ渡ってるのかね」

「さあ、何ででしょうね。今日は常連さん以外は来てませんよ。ああ、いらつしやいませ」

新しい客が入ってきたので、バーテンダーはそっちの対応に行った。須田はゆったりとした気分で、ウイスキーをゆっくりと味わった。しばらくそうしていると、バーテンダーがフィッシュ&チップスを持ってきた。

「お待たせしました。ところで、今回はどんな事件なんです？ うちのオーナーが関わってる時は、けっこう入り組んだ話が多いよう

ですけど」

「まあ、それは言えてるかもしれない。今回も最初は単純そうだったんだけど、そう単純な話でもなくなってきた感じだよ」

「片がついたら教えてくださいよ」

「まあ、話せる範囲では話すよ」

「楽しみにしてますよ」

そうしてだらだらしていると、三山がドアを開けて入ってきた

「早いじゃないか」三山は店内を見回した。「もう一人はまだ来ないな」

「一緒じゃないのか」

「お互い暇じゃないんでね、お前は暇そうでいいな」

「そうでもないさ」

三山は須田の隣のstuhlに腰かけて、須田の前に置いてあるものを覗き込んだ。

「フィッシュ&チップスだけか、もう少し経営に寄与するようにしてくれとありがたいんだけどな」

「依頼人になるかもしれない人間の前では酔っ払わない主義でね」

「そうかいそうかい。それじゃあ、店の邪魔にならないように奥の事務所に行こうじゃないか」三山は立ち上がって、バーテンダーに声をかけた。「あの腐れ弁護士が来たら事務所に通してくれ」

「はい、わかりました」

30分ほどたったころ、事務所のドアが勢いよく開いて、長身で髪が薄い男が息を切らして入ってきた。

「どうもどうも、遅くなりました」

「いや、あんたにしては早いじゃないか、まあ座ってくれ」

三山がそう言うと、男は三山の隣に腰かけた。

「紹介しよう。弁護士まがいの吉田と、探偵まがいの須田だ」

吉田と須田は、どちらからということもなく握手をした。手を離すと、吉田は三山のほうを向いて口を開いた。

「三山さん、私は正規の資格を持ってるんですよ。まがいというのはないでしょ」

「俺も、まがいじゃない探偵だ」

「黙れよこの半端もんども」三山は二人を睨みつけた。「人の話は黙って聞くもんだ。特に金になりそうな話はな」

須田と吉田は軽く視線を交わして、心もち肩をすくめた。もちろん三山はそんなことは無視した。

「これから話すことは、お前ら二人とも良く知ってるはずだ。今話題のテンパツたヒモの話だからな。おっと、まだ何も言うなよ、口を開くのは俺の話が終わってからだ。須田、俺が話してやったから、事のあらましはわかってるよな、しかしまあ、あれは一部ではない。吉田、あんたの知ってることを話してもらおうか」

吉田は溜息をついた。

「私が話さないと、あなたも話してくれなんでしょうね」三山は早くしゃべるように、顎でうながした。「わかりました、話しますよ」「まあ、三山さんには話してるんですけどね、須田さんとは初めてですから、最初から話しましょうか」

須田は軽くうなずいた。

「事の起こりは一ヶ月ほどまえです。私の事務所に一人の男がやつ

てきましてね。アドバイスが欲しいと言って来たんですよ。それほど金回りの悪い男に見えなかったし、私の手がちょうど空いていたんでね、とりあえず話を聞くことにしたんです」

「早く本題に入れよ」三山が口をはさんだ。「それとな、くだらない嘘はつくなよ。お前の手はいつでも空いてるだろうが」

「痛いところをついてくれますね。まあ、そんなわけで、話を聞いたんですが、これがなかなか用心深い男で、本題に入ろうとしない。私をテストしてるつもりだったんでしょね」

「で、どうやら私はテストに合格したようで、こんなことを言い出したんですよ。先生、実は契約してる弁護士に裏切られちまったんだ。そこで、先生を見込んで相談なんだが、何かあったときは力を貸して欲しいんだ。うまくいったら、あんたを顧問にして契約してもいい」

「あんたを見込むとは、よほどの節穴だな」

「三山さんの言う通りでしょうね。あの男の目は節穴でしょう。テストの内容からして、私の倫理観がどの程度か量ってたんでしょ。が、なんと彼には私が悪徳弁護士に見えたようですから」

「依頼人の利益のために動くのがまともな弁護士で、悪徳弁護士というのは依頼人を裏切るものだから、かな？」

須田の言葉に吉田は大きくうなずいた。

「くだらない男でしょ。丁重に追い返してやりましたよ。まあ、私に断られたときの彼の顔はなかなかユニークでしたよ」

「よし」三山は須田の顔を見た。「次はお前の番だ」

須田は三山と吉田に交互に視線を送ってから、少しの間天井を見上げて、口を開いた。

「一昨日のことだ。吉田さんと同じで、一人の男が事務所にきたのが発端だ。そいつは自分をふった彼女の新しい男を調べて欲しいと言ってきた。それで動き始めてみると、翌日には依頼人が俺を雇ったことで脅されていた。いくらなんでも早すぎるし、こっちに対して何のアクションもないのも妙だ」

「なるほどね。お前を雇ったのはわかってるはずなのに、警告の一つもよこさない。確かに妙だな」

「その依頼人はどんな男なんですか？」

「一見したところでは、そう特殊な人間とは思えない。ところが、ただの単純な男ではなさそうだと思えることがあった」

「なんだ？」

須田は溜息をついた。

「依頼人の彼女とやらがやって来たんだ。その女は、謎の人物から俺を紹介されたらしい」

「それはお前の依頼人か？」

「確証はないが、その可能性は否定できない。女の周囲に俺を知ってる人間が居るとしたら、今の依頼人という線は十分にあり得る」

「それで、肝心のお前の捜査のほうはどうなんだ？」

「ヒモのねぐらを突き止めた。まあ、多分に偶然ではあるけどな」

「尾行か」三山は言葉を切って、少し考えるような素振りをした。

「それが気づかれて、依頼人が強請られたってことはないのか？」

「それはないだろうな。あれは真正銘、奴のねぐらだったようだし、つけられてるのに気づいていたのなら、俺に何も言っていけないのはおかしい」

「そいうことなら、ただ単にカマをかけたただけかもしれないね」

あるいは釘を刺しにきただけか。どちらにせよ、あなたが雇われたことにすぐ気づくような鋭い人間とは思えないですね」

「それは言えてるな」三山は頷いて、須田の顔を見た。「その男の写真かなんかあれば出してくれ」

須田は黙って前田から預かった写真を取り出した。

「ああ」吉田が特に驚いた様子もない声を出した。「この男ですよ、私のところに来たのも」

バーでのむさい会合から開放されたはずの須田は、なぜかちよつと気取ったレストランにいた。須田の向側では木村がサラダを突ついていた。

「それで、お友達との懇親会はどうだったの？」

「なかなかの収穫だった。例のヒモ野郎の件でわかったことがけっこうあつてな、どうも奴は新しい弁護士を探してるらしいんだ」

「そもそも、前の弁護士がいたかどうかが怪しいもんね。まあ、おかた弁護士が必要になりそうな事態に巻き込まれて慌ててるんではよ」

「近所の弁護士に聞けば、似たような話がいくつも聞けるかもな」

「まさか、それも頼むとかおっしゃる？」

「それはこつちでやる。他に頼みたいことがあるからな」

木村はあからさまな溜息をついた。ウェイター手招きして、空のワイングラスを渡した。ウェイターはすぐに新しいワインを注いで持ってきた。

「それで、今度はなに」

「三島理恵っていう女がいるんだが、なんでもいいからこの女に関する情報が欲しい」

「それは今回の件に関係あるわけ」

「大いにあるだろうな」

「そういうことなら、もっと早く言ってもらいたいもんね」

「三山にもそう言われた、お前を頼るべきだつてな。まあ、ちよつとしたことがあつたもんでね、今回の件の核心かもしれないんだよ」

「はいはい、わかりましたよ名探偵様」木村はワインをグツと飲み干した。「何か他にご希望はございまんせか、ご主人様？」

「とりあえずは無いな。女の詳しい情報は後で送る」

「そう、それじゃここはよろしくね」

木村は勢いよく立ち上がって、サッサと出て行ってしまった。

「うまくいってないみたいですね」

顔なじみのウェイターが心配そうな顔で須田に声をかけた。須田は軽く笑った。

「それでも昔に比べたら随分うまくいってるんだよ」

翌日、須田は早朝の電話で起こされた。

「はい、須田探偵事務所です」

「お前か、ちよつと変わったことがあつたぞ」

普段より声を低くした三山だった。須田は少し体を緊張させた。

「なんだ？」

「どつかのマンションでな、首に輪つかをひっかけてぶら下がってる野郎が見つかったんだつてよ」

「誰のだ」

「我らのヒモだよ。あわれでちんけなバカだよ」

須田はしばらくの間、黙って視線を宙にさまよわせていた。

「これでお前さんの仕事もなくなるんじゃないのか？ まあ、とり

あえずヒモ野郎のマンションまで来い。お前の同期はもう来てるぞ」

「ああ、すぐ行く」

須田は受話器を置いて、すぐに事務所を出た。いろいろ考えたかったが、何の材料もなく考え込むような無駄はしないことにして、とにかく現場に急いだ。

マンションの前には、少数の警官と多少の野次馬がいた。刑事らしき人間と話していた三山は、須田に気づくと手招きをした。

「早かったな」

「本当だ。お前は昔から耳と足が早いよな」

刑事、石村健三は三山の言葉に頷きながら、須田に笑顔を向けた。

「警察学校の時から変わらないな」

「もしその通りだったら、今頃は立派に出世してるだろうな」須田はにこりともせず首を振った。「それで、何がどうなってるんだ？」

石村は肩をすくめた。三山が頷いて口を開いた。

「刑事さんの口が軽いというのはちよつとまずいからな、俺から話

そう。それとも、質問を受け付けたほうがいいか？」

「これは自殺だったのか？ そうだとしたら随分発見が早いようだけれどな」

「発見が早かったのは、管理会社に匿名の連絡があったからだよ。それから、自殺か他殺かはまだわかってない」

「怪しいタレコミだな。どんな内容だったんだ？」

「おたくの管理してるマンションの、五階に住んでる安田という男と連絡がとれないから確認してみたい、っていう切迫した雰囲気の話だったそう」

「それで部屋に入ってみたら、感動のご対面というわけか」

「そういうことだ」

「まあ、そういうことだ」黙って話を聞いていた石村が口を開いた。「詳細はまだ全くわからない。俺としては、他殺の線が強いと思うけれど。現場検証も検死も終わってないから、ただの勘だけれどな」

結局、須田は一通りのことが終わるまで、石村と一緒に現場でねばっていた。三山はすでに帰っていた。石村は自分のPDAで、住民からの聞き込みと現場検証の内容を整理していた。

「いいのか？ 私物に捜査情報なんか入れといて」

須田の言葉に、石村は顔を上げてニヤリと笑った。

「お前みたいに手書きなんてごめんだね、俺はそんなアナログじゃない。それにな、たぶん近いうちにおまわりはみんなこういうのを持つようになるぜ」

「ご賢察だな」

「まあな。ところで、お前はまだこの件を追うのか？」

須田はちよつと首を傾げて、石村の目を覗き込んだ。

「依頼のことを知ってるのか？」

「三山さんから聞いたんだ。男の嫉妬を満足させる依頼なんだろ」

「まあな、それだけじゃないんだが、つまらない仕事さ。ただ、ちよつと複雑になっててな」

「依頼人の彼女とやらか。また持病らしいけど、商売よりも好奇心を優先するのはやめとけよ」

須田は首を横に振った。

「人の人生がかかっているかもしれないことをおろそかにはできない」

「硬いねお前は」石村は楽しそうな笑みを浮かべた。「ま、俺としてもそのほうが助かる。事情がわかってて信頼できる人間がいるのは大いに助けになるからな」

「警察も大変らしいな」

「出費は抑えろ、実績は残せ、人間が足りないぶんは時間で補え。上からも世間からも風当たりが強くてな、宮仕えも楽じゃない」

二人は顔を見合わせて、心の中で溜息をついた。

「それで、聞き込みの成果は？」

「予想通りだ。住民は誰も管理会社に連絡なんてしてない。仏さんの生業を考えれば、近所とのつきあいがあったとは思えないし、当然だろ」

「なるほどな。俺の線のほうが有力そうだ」

「そういうことだ。こっちが動けるだけのものをつかんでくれると助かる」

「ああ、わかった」

「依頼人の著しい不利益にならない限りは、だろ」

石村は苦笑いで付け足した。須田は目をそらして空を見上げた。
「かもな」

「はい、木村興信所です」

「最近電話にはりついてるのか？」

「おかげさまでね。それで、例の件？」

「ああ、なんかおもしろいことはあったか？」

「まあまあつてとこでしょ」

「そうか、それじゃあ今からそっちに向かう」

「はいはい。その様子だと何か進展があったようだけど、ま、こっちに着いてから聞かせてもらいましょうか」

須田は何も言わずに電話を切った。木村興信所に足を向けて、とりあえずは何も考えないで先を急いだ。

木村興信所に到着した須田は、顔見知りの社員と一言二言言葉を交わしながら、木村のデスクにたどり着いた。木村はパソコンのモニタから目を離さないで口を開いた。

「潔白というのはほど遠いみたいね」木村はちよつと首をかしげた。「まあ、うちのデータベースに載ってるんだから、それはそうなんだけど」

「どういうことだ？」

「学生時代は色々あったんじゃない？ 親が素行調査の依頼を出してきたくらいだったようだから」

「どんな理由だ？」

「どうも、不自然に金を持っている、と親は考えたらしいけど」

「何かやばいことでもしてるんじゃないかと、そう考えたわけか」

「実際のところは、考えていたよりも重症だったようだけど」

木村はうなずいた。過去の依頼のファイルを開いて、三島理恵の情報を表示した。須田はそれを覗き込んで、ため息をついた。

「これは、ドラッグだな」

「そう、でも当時は違法ではなかった」

「なるほどね。足を洗ってれば問題はないわけだ」

「逮捕されたということはないようだから、大丈夫だったんじゃないの」

「そう願いたいね」

木村は振り向いて、皮肉っぽい微笑を浮かべた。

「もちろん、違法になって希少性が生じたものの商権は手放したくはないだろうけどね。おいしいものをどうして手放さなくちゃならない？ そんな感じで」

「リスクが大きすぎるということはあるさ」

「あの、もしもし、前田ですが」

事務所に戻った須田を待っていたのは、前田からの電話だった。

「どうしました？」

「いえ、実は警察から連絡があったんです」

「どんな用件でしたか？」

「いえ、別に、ちよつと聞きたいことがあるから時間をあけておいてほしいっていう話でした」

「そうですか」

「あの、どうすればいいんでしょうか？」

「ああ、そういうときは隠し事をしないで、聞かれたことには正直に答えたほうがいいですよ。聞かれてないことと、自分に不利になるようなことに答える必要はありませんが」須田は少し間をあけて続けた。「何があつたかは、警察が教えてくれますよ。とりあえず、警察との話が終わったら、連絡を頂けますか？」

「あ、はい、わかりました。よろしく願います」

前田は電話を切った。須田は受話器を置くと、すぐに石村の携帯電話に電話をかけた。

「ああ、俺だ」

「何だ？ 面白い情報でも出てきたか？」

「いや、ちよつと確認したいことがあつてな。例のヒモの件なんだが、どれくらい進展してる？」

「馬鹿言つなよ、今資料の整理と書類の作成中だ。検死だって済んじやいない。大して動けるわけがないだろ」

「だろうな」

「お前のほうで何か進展があつたのか？」

「まだわからない。ひよつとしたら、進展があるかもしれないな」

「聞いたところで、何も言わないんだろお前は。まあ、こつちで扱

えるような情報があったら言ってくれ、こんな事件はさつさと片付けたいんでね」

「そっちこそ、俺になら扱える情報があったら頼むよ」

「憶測やらあてずっぽうやらで動けるのがうらやましいよ」

「個人で仕事をしてる特権だ。それほどいいものだとも思えないがね」

「それはわかってるけどな。それでもやっぱり、時々はうらやましくもなるさ。それじゃあな」

石村が電話を切ってから、須田は受話器を置いた。机の上のメモ用紙に、前田 要調査、とだけ書いた。

須田は三島の家の前に来ていた。前田が警察のことに關して、嘘をついているのか本当のことを言っているのかどうかは氣になつていたが、今は三島のほうが、より重要に思えたからだ。

しばらくすると、三島が家から出たきた。須田は声をかけようと足を踏み出そうとした。しかし、見たことのない男が三島に近づいていったのに気づいて、須田は足を止めた。小柄で筋肉質な男だった。男が声をかけると、三島は立ち止まった。二言三言しゃべると、二人は三島の家に入つていった。

須田は踏み出した足を戻さずに、家に近づいていった。ドアの前まで来ると、中から何かが壁にぶつかったような低い音が聞こえた。須田は嫌な予感にとらわれて、ドアをノックした。

「三島さん、三島さん。いらっしゃいますか？」さらにドアを強くノックした。「警察です」

家の中は静まりかえつていた。須田は家の裏側に回った。居間の窓だと思われる窓があつたが、カーテンがしまつていて中の様子は見えなかった。須田は手近な石を拾つて、窓に叩きつけた。

ガラスが割れる音が響いた。家の中からは、あわてた足音が響いた。須田は窓の割れ目から手をつ突っ込んで、鍵を開けた。一瞬だけ、逃げていく男の背中が見えたが、三島が倒れているのに気づいた須田は、すぐに彼女に歩み寄った。

三島の首には手の跡がついていた。頭も打っているようだったが、弱々しくせきこんでいる以外は特に異常は見られなかった。

「間一髪だったようですね」

三島はまだ苦しそうにしながら、須田の顔をぼんやりと見て、口を開こうとした。須田は首を横に振った。

「無理をしてはいけませんよ。すぐに救急車を呼びますから、安静にしてください」

須田の言葉に、三島は力なくうなずいた。

病室の前で須田がうろついていると、中年の男が病室の番号を確認しながら、不安げな表情で歩いてきた。男は須田の前で立ち止まると、病室の番号を何度か確認した。

「失礼ですが」

須田が声をかけると、男は必要以上に驚いた様子で振り向いた。

「三島さんのご家族の方ですか？」

「え、ええ。父親ですが。あの、あなたは？」

「私立探偵をやってる須田というものです。偶然娘さんの危ないところに居合わせたもので」

「ああ、そ、そうですね」私立探偵という言葉に、三島の父親はあからさまに動揺した。「あの、ひよつとして娘がなにか問題を起こしたんでしょうか？ いや、それよりも娘を助けていただいたように、ありがとうございます」

「運がよかったですよ。医者は何の問題もなく回復するだろうと言ってますしね。すぐに退院できるようになりますよ」須田は微笑を浮かべた。「そうなら少々聞きたいことがありますよ」須田は「いえ、それは娘が決めることですから・・・」三島の父親は自嘲気味の笑みを浮かべた。「それに、そもそも私は何も知らないんですよ。娘とは二十年以上一緒に居たはずなのに。あなたが何を聞こうとしているのかはわかりませんが、私が話すよりはずっと役に立つと思いますよ」

須田は特に何の反応もせず、三島の父親の顔をしげしげと見た。「許可してくださって、ありがとうございます。それと、そんなに卑下する必要はありませんよ。あなたはわかっているからこそ、自分で動かないんでしょうから」

「いえ、そんなことすらわからないんです」

「わからないということがわかつているのは重要なことです。お役

に立てるように努力します」

「正式に仕事として依頼すべきですか？」

「依頼ならすでに受けています。とりあえず連絡先を教えてくださいませんか？ 何かあったら連絡します」

三島の面会許可が出たので、須田は三島の父親の面会が済んでから、病室に入った。三島は多少青ざめた顔をしていたが、それほどひどい状況ではなかった。須田は自分の椅子を持ってきて、それに腰掛けた。

「さつきはありがとうございました」

三島はそう言って頭を下げた。須田はうなずいて、微笑を浮かべた。

「あなたは依頼人ですからね。あれくらいは通常の業務の範疇ですよ」

「そうですか」三島は影のある表情でうなずいた。「ところで、私に聞きたいこと、ありますよね」

須田はしばらくの間、黙って三島の顔を見つめた。

「そうですね、まずはあなたの部屋に隠しているものについて教えてもらえますか？」

三島の顔が歪んだ。

「三島さん、答えたくないのはわかります。しかし、今あなたが答えてくれれば、面倒が減ることになります。私のだけでなく、あなたのもです」

須田の言葉に、三島は観念したかのように顔を上げた。その顔は歪んではいなかった。

「そのうち、こういうことになるとは思ってました。でも、想像していたより、ずっとましですね」

三島の顔には微笑が浮かんでいた。須田は黙ってうなずいた。

「薬です。麻薬です。押入れの奥の柱に見せかけた場所に隠してあります」三島の目から涙がこぼれた。「あんな物、捨ててしまえばよかった。でも、私はそれを置いておいたんです。わかりますか？　こういう気持ち」

「それなりにはわかります。そういったことから足を洗うのは簡単なことではありませんから。それでも、無理ということはありませ
ん」

「今まで何度も決心したんです。今度こそ抜け出そうって」

「今度はできるかもしれませんよ。あなたはすでに一歩踏み出して
いるんですから。そうでなければ私のところには来ていないでしょ
う」

須田は腕を組んで、三島の顔を凝視した。

「あなたを襲った男が誰だか教えてもらえますか？」

「知らない男でした」

「そうですか。では質問を変えましょう。そもそも、あなたを安田
に紹介したのは誰ですか？」

三島はあからさまに動揺して、いまにもヒステリーを起こしそう
になった。

「落ち着いて。少しも怖がったりする必要はありませんよ。私は依
頼人の安全を何よりも優先しますし、あなたの知っていることが重
要なことであれば、警察に保護を要請することもできます」

三島は自分を落ち着けようと、ゆっくりと深呼吸をした。しばらく
くそうしているうちに、だいぶ落ち着いてきたようだった。

「話せますか？」

須田の言葉に三島はうなずいた。

「これこそがあなたのチャンスです」

三島が話したのは奥という男だった。病院の待合室で落ち合った石村によると、以前から目をつけている黒幕のような男だということだった。

「でもな、こいつがただのチンピラじゃないのは周知の事実だ。薬やらなんやらを扱ってるのは間違いなさそうなんだが、賢いやつでな、つまらない罪状でちよつとばかりぶちこんだことはあるんだが、本筋のガードは固いから決定打にはならない」

「で、今回の件は使えそうか？」

「そうだな、その三島って女は、薬のほうで昔から関わってるようだから、ひよつとしたら使えるかもな。雑魚なら消そうとはしないだろう」石村は溜息をついた。「しかし、このチンピラ野郎が突然出てきたのは驚きだな。いつも影に隠れてコソコソしてるのに」

「確かに。今まで影も形もなかった。ただ、俺はそいつのことは全然知らないから、はつきりしたことは言えないな」

「なるほど。野郎が我が警察に居候したときの写真が必要だな。ちよつと待つてろ」

石村は電話とタバコのために、病院の外に出て行った。5分ほどしてからわずかに顔をしかめて戻ってきた。

「すぐに渡したいところなんだが、急用ができた。今晚署に来れるか？」

「多分大丈夫だ。それから彼女のことなんだが」須田は三島の病室がある上階に目をやった。「警官をつけてやれるか？」

「いや、すぐには無理だ。このあたりを重点的にパトロールさせるくらいはできるだろうが」

「それで十分だろう、家族もついてるし。病院には俺から言うておこう」

「お前、病院にもコネがあるのか」

「まあ、婦長と知り合いだ」

石村は微笑を浮かべた。

「それなら安心だ。それじゃ、こっちの件は任せたぞ」
須田は深くうなずいた。

須田は事務所に戻ると、手帳を開いて、今回の件の整理を始めた。最初はつまらない仕事だと思えたものが、事態が進展すればするほど、複雑で根が深いものであるのが明らかになっていった。手帳に乱雑にメモする手を止めて、須田は腕を組んで天井を見上げた。

こうなると、前田が額面通りの人物であるとは到底考えられないことだった。偶然から始まったとは考えられないほど、色々なことが立て続けに起きすぎる。前田の依頼が引き金になっていると考えるのも、それほど荒唐無稽とも思えなかった。

そうして、須田が物思いに沈んでいると、ドアをノックする音が響いた。

「どうぞ、開いてますよ」

ドアを開けたのは小柄で筋肉質な男だった。男は不安氣に後ろを振り返ってから、ドアを勢いよく閉めて、すぐような目つきで須田を見た。

「あんた、探偵だよな」

「ええ、そうです」

「あんた、最近死んだヒモのことを調べてただろ」

須田は黙ったまま、特に何の反応もしなかった。男はそれにはかまわずにしゃべり続けた。

「実はさ、俺はそのヒモに使われてたんだよ」

一瞬、間があった。須田は男の目をちらつと覗き込んだ。

「どこかでお会いしましたかね？」

「いやいや、あんたとは初対面だよ。俺の方では知ってたけどさ。ほら、一応雇い主の敵というか、まー、そーいんもんだからよ」

「なるほど。それで、どういったご用件です？」

「わかってんだろ。俺はあいつのネタを持ってる。あんたはそれが必要な依頼人を抱えてんだろ？ だからよ、俺があんたにネタを渡

す、あんたはそれを依頼人に渡して報酬を手に入れる。で、それを俺にちよつとまわしてくれる」

「何の話がよくわかりませんが」

「なあ、そうとぼけんなよ。俺はあんたの依頼人にも会ってんだぜ」

「飯にそうだとしても、調査対象がなくなってしまうては、依頼は取り消されるでしょうね。あなたの期待するような報酬とやらは手には入りませんよ」

須田の愛想の無い物言いに、男はにやりと笑った。

「そりゃ、あんたが受けた痴話げんかみたいな依頼だったらそうだろうけどな。実際のところ、裏があるかもしれないんだぜ？ この件は」

自信満々な表情を浮かべる男に、須田は真剣な表情になった。

「それでは、聞かせてもらいましょうか」

安いだけが取柄のビジネスホテルの一室で、前田は手提げかばんに色々な物を詰め込んでいた。写真やメモ用紙。異常な分量と言える資料の山だった。

ノックの音が部屋に響いた。前田はドアに近づいて、鍵が掛かっているのを確認したが、さらにドアをしっかりと押さえた。

「あなたに話があります。開けてもらいたんですが」
詳しくは思いだせないが、前田にはなんとなく聞き覚えのある男の声だった。しばらく沈黙があった。

「連絡先は置いていきますから、後で連絡をいれるようお願いしますよ、前田さん」

声の主が去っていったあとも、前田は用心して、なかなかドアを押さえた手を放さなかった。ずっとそうしているわけにもいかない。前田は手を放して、荷物の整理を再開した。

荷物を大体詰め終わると、前田は胸の内ポケットから紙に包まれた何かを取り出した。妙に慎重な手つきでそれを確認すると、かばんの中に詰めた書類の中に無造作に突っ込んだ。

前田は電話を取り出して、須田の事務所の番号をダイヤルした。

「はい、須田探偵事務所です」

「あの、前田です」

「ああ、警察のほうはもう済んだんですか？」

「いえ、まだなんですが、ちょっとそのことも含めて、相談、したいんですが？ 今からそっちに行っても大丈夫ですか？」

須田は一呼吸おいた。

「ええ、大丈夫です。お待ちしていますよ」

「それじゃ、2時間後くらいに行きます」

前田は電話を切った。かばんをしっかりと閉じてから、ドアを開けてフロントに向かった。

須田は木村興信所に向かっていた。前田と会う時間には、まだ1時間半ほど時間があつた。

「お世話様。木村はいるかな？」

「ああ、須田さん。木村さんならいますよ」

入り口付近の若い事務員が顔を上げて答えた。須田はうなずいて、間仕切りボードで仕切つてある、事務所の奥の木村の机に向かった。木村は顔をしかめて、書類の束とにらめっこしていた。

「税金対策か？」

「うちは不明朗な個人営業とは違うもんでしてね」木村は顔を上げずに続けた。「それで、あんたの事件はどうなつたの？」

「これから本格的に動きだしそうだ」

「やつとね。まあ、相変わらずゆつたりとした仕事ぶりなこと」

「一人で仕事をする最大の利点だ。ところで、油を売りに来たわけでもないんだけどな」

「ああそう。それじゃあ、割り増し料金を請求しないとね」木村は書類から目を離さずに、自分のパソコンのキーボードを叩いた。「で？ なにを調べるの？」

「警察がマークしてる、奥つていう男がいるらしいんだが、わかるか？」

「どんな分野」

「表向きはただのチンピラで、裏ではドラッグを扱っているらしい。要領のいい奴だ」

「警察にも人気のアイドルさんね。その類だったら、うちにもなんかありそうなもんだけど」木村は何度かキーを叩いた。「ああ、こいつね。あの件はあんまり、というかほとんど実にならなかったんで忘れてた」

須田は黙つたまま、先をうながした。

「3年前の話でね、依頼主は老齡の女性。内容は息子の態度が妙だから、何を隠してるのか調べてほしい、といった感じ」

「その息子が奥か」

「違う。その奥つてのは、調査してるうちに浮かんできた謎多き人物というもんだったわけ。これが嫌になるくらい正体がつかめなくつてね」木村はキーボードから手を放して、マグカップのコーヒーを一口飲んだ。「結局、ろくな成果はあげられなかったってわけ」

「なるほどね。ところで、その依頼人の息子っていうのは？」

「ああ、それね。吉田っていう中年の弁護士」

須田が事務所に戻ると、まだ時間には早かったが、前田が事務所の前で待ちかまえていた。今までの前田とは雰囲気違った。

「早かったですね」

「ええ、どうしても話しておきたいことがあったので」

須田は前田の目を見てから、事務所の鍵を取り出した。ドアを開けて前田を先に事務所に入れた。前田は依頼人用の椅子に座って、かばんを膝の上に大事そうに乗せた。須田は自分の椅子に腰掛けてから、おもむろに口を開いた。

「特別な話があるようですね」

「ええ、依頼した件の補足です」

「それはちょうどよかった。私のほうからも話しておきたいことがありますから」

「話しておきたいこと、ですか」前田は微笑を浮かべた。「見当はつきますね」

「あなたが調査依頼をされた男は死にました。自殺か他殺かはわかりません。警察は動きだしてますが、今はまだ本格的には捜査を開始していません。」

「あなたは警察から連絡を受けたと言っていました、仮にそれが本当だとしても、少なくともこの件であることはありえませんか。だからといって、それ以外のことでそういった連絡があるというのも考えにくいことです。もし何かあるなら、直接あなたのところに行くでしょうからね」

「その通りです」

「なぜ私にかまをかけるようなことを聞いたんですか？ どうしてかは知りませんが、あなたはすでに調査対象の男の死を知っていた。それだけの情報を得られるのなら、私があなたの知らない何かを知っていると考える理由はないと思いますが」

須田は前田を観察するように凝視した。前田は顔を床に向けて、目をそらした。

「もちろん、依頼人であるあなたがこんな質問に答える義務はありません。しかし、率直に申し上げますと、今回の件は妙なところがありますし、仮にあなたが依頼をキャンセルしたとしても、私は最後まで関わる気でいます。隠していることがあるなら、教えていただけるとありがたいですね」

「いや、参りましたね」前田は頭をかいてから、顔を上げた。「今は何も聞かずに最初に依頼した通りにしてもらえませんか？」

少しの間、沈黙が流れた。須田はゆっくりとうなずいた。

前田が事務所から帰った後、須田は三山に連絡をとった。

「ああ、お前か。あのヒモの件はどうなった？」

「そのことなんだが、色々やつかいそうなのが出てきてな」

「やつかいねえ。なんかあんまり聞きたくないな」

「お前にも関係があることだからな、聞いてもらうぞ」

「どうも嫌な感じがしてたんだ。どうぞどうぞ、話せよ」

「それなら、奥っていう男を知ってるか」

「それは話の核心ってやつか？ だとしたら、思ったよりもつまらん話だな。そんな、ちよつと要領がいいだけの小賢しい奴が核心じゃ」

「そんなに小者なのか」

「小者も小者だな。素人だまくらかして、ちんけな薬をつかませてるだけの奴だよ。まあ、そういう野郎だから、今まで大して目立ちもせずに、うまいこと立ちまわってこれたわけだ」

「なるほどな。ところで、お前にも関係があることだと言ったと思うんだけどな、心当たりはないか？」

「心当たりね」少しの間、考え込んだような沈黙が流れた。「いや、俺自身は関わったことはないな」

「この間の弁護士だよ、関係あるのは」

「へえ、あのおっさんがか。きもったまの小さい三流弁護士だと思ってたけど、意外とやることやってんだな」

「内容知ってるのか？」

「知るわけないだろ。大体、その話は初耳だ」

「お前が足を洗う前につてを使つてなにか探れないか？ 3年前に探偵事務所に依頼が持ち込まれてるし、何も出てこないってことはないだろ」

須田の言葉に、三山は顔をしかめた。

「あんまりそっちの方の裏のつては使いたくないんだけどな」

「そんなにいい子ぶることもないだろ」

「ああ、わかったよ」受話器の向こう側から、大きな溜息が聞こえた。「よほどこの件にご執心なんだなお前は」

「人命がかかっているようなんだ」

「まったく、いい子ぶってんのはどっちだよ」

前田は須田の事務所を出た後、てきとうなラブホテルに入って、かばんの中の資料をベツトに広げて、にらめっこをしていた。

噂通り、須田という探偵はなかなか鋭い男だったようで、これまでのところは期待以上の働きをしているようだった。安田が死んだのは、おそらく殺されたのは誤算だったが、それはつまり、相手もあせってきているということだ。

前田はにやりと笑った。しかし、すぐに顔をしかめると、財布から一枚の紙を取り出した。さっきのビジネスホテルで、聞き覚えのある声の男が置いていった連絡先だった。いくらかためらいながら、前田は携帯電話を取り出して、その番号に電話をかけた。

「おや、前田さんですか？ 思ったよりお早い連絡をありがとうございませう」

「私のことをずいぶんとご存知のようですね。この電話も私の名義ではないんですけど、まあ、そんなことはどうでもいいんですけど、ホテルでの話の続きを聞かせてもらえますかね？」

「そうあせらないで。お互い協力できると思ったから、あなたに接触したんですよ」

多少いらついた感じの前田に、電話の向こうの男は、含み笑いを浮かべたような雰囲気を漂わせていた。

「まあ、あなたの気持ちもわかりますから、単刀直入に言わせてもらいますが、事態はあなたが考えているよりも切迫しているようですよ」

「どういうことです」

「ある女性が狙われたんですよ。あやういところだったようですけどね、大事にはならなかったようです。誰だかは言う必要はありませんよね」

前田は黙って唇を噛んだ。

「とりあえずはそういうことです。それでは、何かあったら連絡を入れてくださいよ」

「ちよつと待て」前田は電話を切ろうとした男を制止した。「彼女の安全は？」

「それは大丈夫でしょう。あの男がそこまでマヌケだということもないでしょうね。それでは、健闘を祈ってますよ」

電話は一方的に切られた。前田は乱暴にベットのの上に携帯電話を放り出した。

夜遅く、須田は警察署の石村を訪ねていた。石村の課は人影がまばらで、須田にとつては都合がよかった。石村は須田の姿をみとめると、書類から顔を上げた。

「よお、あれから何か進展はあったか？」

「いや、ちよつと外せない用事が入ったりしてな、大した進展はしてない」

「そうか。これで一気に進展してくれるといいんだけどな」

石村は机の隅のファイルを手にとって、須田に差し出した。須田はそのファイルを受け取って、ざつと目を通した。

「どうだ？」

「いや」須田は首を横にふった。「しかし、こいつはずいぶん放浪癖があるらしいな」

「ああ、そういえば言ってたかったな。まあ、それがこの野郎をしつかりおさえられない原因の一つではある。確認できてるだけでもこの5年で10回はねぐらを変えてやがんだよ」

「それだけ居場所をしょつちゅう変えて、しかも警察にやる気を起こさせないように行動してるんじゃ、しつかり捕捉するのは難しいだろう」須田はもう一度ファイルを開いた。「これだけの情報があるのは驚きだな」

「まあ、それはな。善良な市民の協力というやつらしいんだが。いよいよ実を結ぶ、か？」

「そう願いたい。面白そうな線がいくつかあるしな」

「面白そうな線ねえ。当然教えてはくれんわけだよな」

「いや、依頼人以外に義理立てすることはそれほどない」須田はにやりと笑った。「吉田っていう中年の弁護士は知ってるか？」

「いや、初耳だ。どんな弁護士だ？」

「それなりにまっとうに仕事をしてきたらしい。傷がないわけじゃ、

なさそうだが」

「どうも面倒くさそうだな。手っ取り早く、その弁護士先生をゆさぶって何か吐かせられないのか？」

「それは三山に頼んだ」

「ああ、それなら安心だ。あの人はもともとあっち側だもんな」

「それは本人には言わないよ」須田はファイルから奥の写真を抜き取った。「コピーさせてもらうぞ」

「ああ、俺たちが動けるような材料を頼むわ」

須田は家に戻らず、事務所向かった。寝る時間を削るだけの価値はある事件に思えた。事務所の鍵を開けようとしたとき、鍵穴の周りに、見慣れない傷があるのに気がついた。須田は鍵を引っ込めて、用心深く一歩後ろに下がった。耳を澄ましてみたが、中に誰かいる気配は無かった。須田はもう一度鍵を開けて、慎重に事務所に足を踏み入れた。

事務所の中は一見したところ、荒らされた様子もなく、いつも通り適度に散らかっているように見えた。しかし、散らかした本人には、わずかな違いもよくわかる。今までの依頼をまとめたファイルを収めた棚が、物色されたようだった。明らかに、ただの空き巣ではなかった。

須田は受話器を取り上げて、石村の携帯をダイヤルした。

「あー、なんだよこんな時間に」

「どうも、俺の事務所に来客があったらしい。ご丁寧に、自力で資料を調べて行ったみたいだ」

「それは面白い話だな。何か盗られたか？」

「いや、多分何も盗ってはいないな。なにを漁っていったかがわかるといいんだが」

「今回の件と関係があると思ってるのか？」

「その確率が高そうだ」

「そうか。とりあえず届けは出しといてくれよ」

「ああ、わかった」

須田は受話器を置いた。棚の前に立って、ファイルをじっくりと眺めた。物色された形跡があるのは、最近の部分と、5年前の部分だった。最近の部分はとかく、5年前というのは不可解だった。須田は慎重に5年前のファイルを手に取った。ざっと見たところ、ページが抜き取られているようなことはないようだった。

とにかく、記憶をたどりながら、ファイルされている資料をよく読むことにした。

椅子で寝ていた須田はドアを叩く音で眼を覚ました。事務所に泊まっただけのは珍しいことではなかったが、こうして起こされるのは珍しいことだった。ドアを開けると、筋肉男が立っていた。

「あんた、仕事熱心なんだな」

「そうでもありませんよ。そういうあなたこそ、ずいぶんと熱心なようですね」

「え、ああ。元雇い主が薬関連で死んだかもしれなつてことになりやあな、とばかりがくるかもしれねえし、熱心にもならあね」

「それはそうですね。それで、何か情報でもあつたんですか？」

「ああ、それはな。あんたのほうで何かないかと思つてな」

「残念ですが、進展は何もありません」

「いやまあ、そうだよな、昨日の今日じゃな」筋肉男は一瞬言葉を切つて目を泳がせてから、一歩後ろに下がった。「悪かつたな、朝早くから」

「いえ、いつでもどうぞ」

男が背中を向けると、須田はゆつくりドアを閉めて溜息をついた。昨晚調べたファイルが積み上げられている机を見て、さらに溜息をついた。積み上げられているのは、物色されていた形跡があつた5年前と最近のファイルだけではなかった。もう一度ファイルを調べようと机に近づくと電話が鳴った。

「はい、須田探偵事務所です」

「これはこれは、お早い出勤で何より」

三山だった。

「何か急を要することでもあつたか？」

「急かどうかは知らないけど、ちよつとしたことがあつてな。三流弁護士の場合で」

「何だ？」

「まあ俺がつかつたんだが、ちょっと知り合いにあたってみたら、嫌な昔話を聞かされたよ」

須田は黙って話の続きを待った。

「要点だけ言うんだ。あのおっさんは若い頃にドラッグに手を出したんだ。ほとんど表沙汰にはならなかったようだし、今ではなんとか抜け出してるようだけどな。もし、お前の考えてるように、今回の件に関わってるなら、奥っていう小者がこのおっさんの昔話に出てくるかもしれないわけだ」

「それじゃ、そっちの線を頼む」

「ああ、何かわかってても表では使えないだろうけどな。まあ、たまにはこういうのもいいだろ」

前田はファミレスで、コーヒを片手に電話をかけていた。

「ああ、あなたですか。早速の連絡ですねえ」

さつきラブホテルに居る時に電話をかけてきた男がでた。

「それで？ 何かありましたか？」

「何もありませんよ、それより、あんたが言ってた女がこの病院にいるか知りたくなっただけですがね」

「あまり関係あることとも思えませんがね」男のふくみ笑いが聞こえたような気がした。「それに、さつきも言いましたが、大丈夫ですよ。むしろ、あなた自身のことを心配すべきですね」

「ご忠告ありがとうございます」

今度は前田のほうから一方的に電話を切った。コーヒを一気に飲み干すと、須田の事務所に電話をかけた。

「はい、須田探偵事務所です」

「どうも、前田です」

「これはどうも。何かあつたんですか？」

「いえ、僕のほうは特には。ただ、気になるので」

「今の段階では、気にしても重荷になるだけですよ。あなたは自分のことに集中していたほうがいい」

「自分のことですか」前田はしばらく黙り込んだ。「そうですね、そうします」

「まだ状況がはっきりしないので、気をつけて行動するようにしてください。あなたが何をしているのかは知りませんが、気をぬいていいことはないでしょうから」

須田は前田の返事を聞かずに電話を切った。前田は受話器を耳にあてたまま、須田が何を知っているのかを考えてみた。会話を思い返してみても、まだそれほどのことは知らないように思えた。しかし、色々感づいているようで、時間の問題とも考えられた。少なく

とも、前田にたいしていい印象はなさそうだった。

須田は前田からの電話を切って、腰を上げた。前田のことは色々気になるし、重要なことであるはずだが、目の前の問題は吉田と奥、それにあの筋肉男だ。須田は再び机の上のファイルとの格闘を再開した。

丁寧に整理をしていないので、手間がかかる作業だった。しかし、なんとかドラッグが絡んでいた事件を抜き出すのだけは終わっていた。雑にファイルを作っていた自分を責めながら、須田は一つ一つ、ファイルされた事件をじっくりと調べた。

そうして調べていくうちに、4年前のファイルに気になる事件を見つけた。珍しく少々遠くに出張した件だった。その時は、ヒモとくっついていた女を連れ戻すという依頼だったのだが、ヒモが殺されてややこしい事態になった。女が異常におびえて、警察に保護を要求したおかげで、動きづらくなってしまったのだった。細部はかなり違うが、大筋としては今回の件と非常に似ている事件だった。女にヒモ以外の男が居た点や、ドラッグ絡みであることも同じだった。

そこまで思い出してから、須田は給湯室に行ってコーヒーを入れた。結局あの時は、ドラッグに関しても、女のヒモ以外の男に関しても、ほとんど何もわからなかった。須田はコーヒーを一口飲んで、少し想像力を飛躍させてみた。

もしかすると、今回の件はこの4年前の件と関係があるのかもしれない。ドラッグは奥が絡んでいて、男は前田なのかもしれない。そして、この依頼は5年前に受けたのだが、4年前のファイルに納めてある。ファイルは依頼の完了日ベースで作っているからだ。この線で考えると、侵入者は須田のことを良く知っているというわけではないが、5年前の件を知っている、あるいは知った人間、という可能性がでてくる。

うまくいかなかった依頼を掘り返すのは気が進まなかったが、どうしてもやらなければいけないことのようにだった。

「5年前の事件ねえ」喫茶店で須田の話聞いた石村は、多少あきれたような顔をしてコーヒーを飲んだ。

「本当に関わりがあるのか？ 偶然が重なってそう見えるだけってことはないのか？」

「それを調べたいんだ」

「お前だけで調べられないのか」

「やろうとしたんだけどな、当時の依頼人と連絡がとれなかったんだ」

「それで、俺から警察に連絡をとれと、そういうことか」

「まあ、それだけでもないんだがな」須田はちよつと身乗り出すようにした。「仮に依頼人と連絡がとれたとしても、そつちはあてにならないはずだ」

「それは、どういうことだ」

「これは完全なチョンボでな。まあ、後からわかったことなんだが、この依頼人というのが、ただの窓口だったんだ。結局、元は最後までわからなかった」

「勘弁してくれよ、まったく」石村はうんざりした顔をしながら、PDAを取り出した。「それで、当時の担当は誰だかわかるか？」

「確か山崎っていったな。まあ、未解決の麻薬絡みの話だから、忘れられてるっていうこともないだろ」

「それはまあ、関連があると言ったら、あちらさんも喜ぶかもな」

「うまくいってくれば、それなりのお手柄だ」石村はPDAを閉じてコーヒーを飲み干した。「今の問題のほうは、どうするんだ」

「なんとかなるだろ」

須田の答えに、石村はかすかな微笑を浮かべて立ち上がった。

「結果を楽しみにしとくよ。それと、ここの勘定もよろしくな」

石村は須田の返事を聞かずに、店を出て行った。

須田は石村が帰った後も店に居座っていた。石村には言わなかったことだが、昔の依頼人というのは、須田にとってはかつての上得意で、県議会議員もやっていたことがある名士といえる人物だった。裏がありそうなことはわかっていたのだが、その名士からきつく止められたので、決着がつけられなかったのだった。

須田は携帯電話を取り出して、その名士の秘書をやっていた人物に電話をかけた。

「もしもし、大平です」

「どうも、ご無沙汰です」

「あ、ああ、須田君か、ずいぶん久しぶりじゃないか。どうしたんだい突然」

「単刀直入に言いますと、5年前の件についてお話を伺いたいんです」

しばらくの間、沈黙があった。

「電話で話すのは無理だよ、須田君。君にも事情があるんだろうが、そう簡単に話せることではないんだよ」

「それはわかっています」そう言って、須田もしばらくの間沈黙した。「では私がそちらに伺います。明日会って頂けますか？」

「午前中なら空いてる。ホテルを教えてください、私のほうから行くことにしよう」

「ありがとうございます。今晚遅くに着くと思うので、連絡は明日の朝にさせていただきます」

「そうか、私もあの件はあまり思い出したくないんだが、君のことだ、何か事情があるんだろう。できる限り協力はさせてもらおうよ。正直なところ、肩の荷を降ろしたいとも思っただよ」

「では明日、よろしく願います」

須田は電話を切った。空振りにならないことを祈った。

「前田さん、ちょっとお話がありましたね」

前田はスーパーの中を歩きながら例の謎の男からの電話を受けていた。

「やっと正体を明かしてくれるとでも？」

「残念ですが、それはできません」男は少し間をあけた。「今はまだ」

「それで、用件は」

「あなたに会ってもらいたい人物がいますね。悪い話ではありませんよ」

「誰だか教えてもらえるとありがたいんですがね」

「今は言えませんが、残念ながら。しかし、あなたにとって損な話ではないのは保証しますよ」

前田は少し間を置いた。答えは決まっていた。

「いいでしょう。場所と時間は？」

「時間は今晚8時。場所はラタンという喫茶店です。あなたが居たビジネスホテルから下りの電車で2駅目の駅の東口にあります。すぐにわかりますよ」

「どんなのと出くわすんですかね、私は」

「来て頂ければわかりますよ。では今晚8時に」

男は電話を切った。前田は携帯をしまつて、商品を適当に見ながらスーパーの中を歩きまわった。しばらくそうしてから、おもむろに携帯を取り出して、須田に電話をかけた。電話は転送されて、須田の携帯にかかったようだった。

「はい、須田探偵事務所です」

「どうも、前田です」

「ああ、どうしました？」

「あの、今晚時間は空いてますか？」

「すみませんが、あなたの依頼に関わる件で今晚から明日の午後までは手が放せないことがありますね。どうしても言うならお会いできますが」

「いえ、そういうことならいいんです。それでは明日の午後にまた連絡します」

「さきほども言いましたが、軽率な行動は控えてください。近いうちにいいご報告ができるかもしれませんから」

「わかりました。よろしく願います」

前田は電話を切った。須田がやろうとしていることは予想がつかなかったが、とりあえず今晚のことに関する最低限の保険をかけることができた。明日須田と会えないような事が起きれば、おそらく須田が何もしないということはないだろう。前田はそう考えて自分を納得させた。

須田はできるだけ急いで動き回っていた。この街に居ない間に事態が動いて、それに取り残されるようなことがないようにしておくためだった。

「ああ、お前か。一つ頼みがあるんだけどな」

「最近頼みが多くない？　うちは慈善事業じゃないんだから、頼みばっか持ち込まれても困るんだけど」

「現物支給か労働で返すから心配するなよ。それはそうとな、ちょっと明日の午後まで手を放せない用件が入ったんだ」

「その間の穴埋めが頼みごとね」

「それほど大したことじゃないさ。入院してる女性の様子を見といて欲しいってだけだ」

「愛人でしようかね。いや、何も言わなくていいから、事情なんて別に知りたくないし」

「それでいいさ、頼む。彼女には連絡済だから、お前が行ってくれ」

「はいはい。おみやげを楽しみにしてますよ」

木村は他に何か言われる前に、さっさと電話を切った。須田は続けて三山に電話をかけた。

「なんだ、例の件なら特に目新しいことはないぞ」

「いや、1日ほど遠出するんでな、その連絡だ」

「ああわかった。それじゃ、何かあったら連絡する。それとな、今回の件の決着がついたら全部話してもらうぞ」

「いつになるかはわからないけどな」

「遠出とやらはそれをわかるようにするためだろ。まあ、楽しみにしておこう」

「ご期待に添えるように努力するよ」

須田は電話を切って、必要なものを詰め込んだカバンを手に取りつた。三山には努力すると言ったが、どう努力したものかわからない

のも事実だった。しかし、5年間の件と今回の件につながりがあるなら、大きな動きが期待できるかもしれないという淡い期待は抱いていた。

前田は電話の指示通りに、ラタンという喫茶店に来ていた。時計は7時30分を指していた。外は熱帯夜だったが、店内は冷房がよく効いていて寒いくらいだった。客はまばらで、前田はアイステイラーに口をつけながら、客の様子を観察していた。特に怪しい様子はなかった。

時計の針が50分を指した頃に、筋肉質の男が静かに店に入ってきた。筋肉男は店内を見回して前田を見つけると、ゆっくりと近づいて、前田の向かい側の椅子に腰掛けた。

「よお、元気にしてたかい」

「メッセンジャーなら早く用件を言ってもらいたいな」

「そうつれなくするなよ。この間は雇い主が悪くてな、俺も感じ悪かったろうけどよ、今回の雇い主は紳士だし払いもいいから俺もそれなりの対応をするぜ」

前田は胡散臭そうな顔で黙ってうなずいてから口を開いた。

「それは安心だ。それで、話の内容は」

筋肉男は手で前田を制するような仕種をした。

「まずその前にこっちから聞いておくことがある。あんたが雇った探偵なんだがな、まだ依頼はキャンセルしてないのか？」

「ああ、そういえばまだキャンセルはしてない」

「そうかい、あのヒモはもう死んだんだぜ。あんたがこれ以上金をぶちこんでもしょうがないと思うけどな」

「まだ報告書をもらってないんでね」

「好奇心は危ないぜ」

筋肉男はにやりと笑った。前田は表情を変えずにアイステイラーを一口飲んだ。

「前金は払ってるから、そのぶんを働かせてやりたいと思ってるだけだ」

「ああ、それはそうだ。今はほんの冗談だからな、気にすんなよ」
2人の会話は白々しいものだった。しかし、その底にはかなりの緊張があつた。

ちょうど前田と筋肉男が会っている時に、須田は新幹線に乗っていた。5年前の事件をできるかぎり思い出そうと、カバンに入ってきた資料を改めてじっくりと読み始めた。

事件に関わることになったのは、大平からの連絡が最初だった。当時は例の名士の秘書をやっていた大平は、できるかぎり極秘で、という条件で、ある人物の依頼を引き受けて欲しいということを須田に言ってきた。上客の頼みだったので、とりあえずその依頼人会うことを承諾した須田は、今と同じように新幹線に乗り込んだのだった。

現地に到着して依頼人に会ってみると、案外くだらない話で、ある女にヒモがついてるので、それをなんとかして欲しいというものだった。

しかし、調査を始めみると、それほど簡単な話ではないのがわかってきた。まずはヒモがドラッグの売買に関わっている様子があること。女もそれに加担しているようだったこと。警察が動き出すべく準備をしているようだったこと。どうにもきな臭い感じだった。地元ではなかったので、使える人脈に不自由したこともあり、もたもたしているうちにヒモが殺されてしまい、女が警察に駆け込んだ。そして、警察が渡りに船と動き出したので、できるかぎり極秘、という条件ではほとんど動けなくなってしまった。

もちろん須田としてはできるだけのことではやろうとしたのだが、それは大平を通じて、例の名士から強く止められてしまった。なんとも消化不良な依頼だった。

結局その時はそれで終わってしまったのだが、帰ってから多少調べてみると、依頼人として会った人物はただの代理で、本当の依頼人は名士の後援者で女の母親だったこと、結局警察は大した収穫をあげられなかったこと、女にはヒモ以外の男がいたらしいこと

がわかったのだった。ドラッグの元締めに関しては、はっきりしたことはまるでわからなかった。

依頼はキャンセルされていたし、女も家に戻ったようだったので、この件は自然に解決してしまったということで、須田はそれ以上調べることがしなかった。警察も重要なことは何もつかめなかったようだった。

一言で言えば、ただの失敗ケースだった。

前田が喫茶店に入ってから1時間ほどが経過していた。これまでのところ、何も大したことはなかった。前田も筋肉男もお互いにはぐらかしているばかりだった。

「いいかげん、本題に入ってもらいたいな。聞かせたいのはそんな雑談じゃないだろ」

前田の唐突な言葉に、筋肉男はニヤリと笑った。

「そうだな、俺もこういうおしゃべりは苦手なんだ」筋肉男は身を乗り出した。「お前、あの探偵の邪魔をしてやれよ」

「理由は」

「俺は知らねえよ。ただのメッセンジャーだからな」
「なるほどな」

あの探偵は案外いいところを探り当てているのかもしれない。それならこいつらと目的は違っても当面の間は同じ行動をしたほうがいいかもしれない。前田は瞬時にそう考えてうなずいた。

「あんたのボスはだいが追い込まれてるみたいだな」

「用心深いんだよ俺のボスは」

「それで、具体的には何をして欲しいんだ？」

「勘違いすんなよ。お前が手を引くのが本当が一番いいんだ。ただ、手を引きたくないようだから、妥協してやってんだよ」

「ありがたい話だな」

「そうだよ。まあ、あることないこと吹き込んで、あの探偵を混乱させりゃそれでいいそうだな。せいぜい時間を稼げよ」

筋肉男は前田の返事を聞かずに立ち上がった。

「それじゃあな、うまくやってくれ」

前田は黙って筋肉男の後姿を見送った。あの連中は何も起きないのが望みのようだが、そううまくはいかない。すでにあいつらは一線を越えている。前田は筋肉男の言うことに従う気はなかった。そ

れに、今さら須田のことを止めるのは無理なように思えた。期待以上の働きをしてくれた。

ホテルにチェックインした須田は、早速大平に電話をかけた。

「須田です」

「ああ、もう着いたのかね」

「ええ、本当は明日の朝に連絡すべきだったんでしょけど、とりあえず到着したただけでもお知らせしておこうと思ひまして。それで、今ホテルにチェックインを済ませました。リバーサイドホテル楓という所です」

「駅前のホテルだね。明日は私がそっちに行つたほうがいいかな？」

「大平さんの都合のいいやりかたでお願いします」

「そうだな、それじゃ昼頃に私がホテルに迎えに行こう。こういう話をするのはうつつつけの場所があるからね」

「わかりました、ではお待ちしています。それから、時間を割いていただいてありがとうございます」

「いいんだよ、それほど忙しい身でもないからね。それに、私のほうこそ礼を言いたいくらいだ」

「それでは明日」

「ああ、頼むよ」

大平が電話を切つたのを確認してから、須田も電話を切つた。前田の依頼を受けてからは、あまり満足に休めなかつたので、今日のところはじっくり休みたい気もしていたが、今日のうちにやつておこうと思つていたことがあつた。須田は荷物を適当に整理してから部屋を出た。フロントに鍵を預けるついでに、夕食をとれる店を聞いてから、教えられた方向とは反対に向かつた。客観的に見ればあまり意味のないことだが、須田は以前の事件のヒモの住居に向かつていた。

到着してみると、5階建で当時としてはそれなりに新しかったマンションは、変わらずにそこにあつた。須田は何か新しい事実でも

出てきて欲しいというような様子で、マンションをじっと見つめた。
特別な洞察も、昔の鮮明な記憶も浮かんではこなかった。須田は
何気なくうなずきながら、夕食にありつけるほうに足を向けた。

翌日、須田は約束の時間がくるまで、食事以外は部屋に閉じこもっていた。11時頃に、大平が自分の車で須田を迎えに来た。

「すまんね、もう少し早く来られる予定だったんだが」

「いえ、問題ありませんよ」須田は助手席に乗り込んでシートベルトを締めた。「それで、どこに行くんですか」

「ああ、うちの先生の事務所だね。今は特に何もなし、この時間はちょうど誰も居ないんだよ」

「それはいいですね」

少し間をおいて、大平はなんとなくこちない感じで口を開いた。

「ところで、最近仕事のほうはどうなんだね？」

「ええ、おかげさまでなんとかやってます」

「君のように真剣に取り組んでれば、大丈夫なんだろうね」

須田は特に大平の言葉には反応しなかった。大平も特に答えは期待していなかったようで、それ以降は黙って車を運転した。

10分ほど経つと、車は目的地に到着した。大平は手早く車を駐車場に入れた。「行こうか」そう言つて車のドアを開けた。須田も黙って大平の後に続いた。

事務所の中はキッチンと整理されていた。大平は応接セットに須田を座らせて、冷蔵庫から缶のお茶を取り出してきた。それを須田と自分の前に置いて、口を開いた。

「面倒なことは抜きにしよう。君が知りたいことを、教えてくれ」

「そうですね、私もそのほうが助かります」須田はお茶を開けて一口飲んだ。「5年前、私が助けるように依頼された女性には、ヒモ以外に男が居ましたよね。依頼がキャンセルされたのは、その男と関係があるのでしょうか」

「そうだな、関係はあるよ。先生には、まあ妾といっていい人が何人かいてね、彼はその息子なんだよ」

「愛人の子どもが支援者の娘と交際したところで、大した問題ではないと思いますが。ところで、その息子さんは自分の出生に関することは知ってたんですかね」

「ああ、知ってたよ。公式に先生が父親だということにはなってなかったんだが、あの人の立場としては精一杯親子として関わっていた」

「しかし、それがああいった事件に伴って発覚するのは避けたかったわけですか」

「いや違う、それは違う」大平は強く首を横に振った。「彼だけであればそんなことはしなかった。問題は殺されたヒモのほうだったんだ」

「どういうことです」

「彼女、君の言うところの愛人の息子だったんだよ、あのヒモは。もちろん先生の息子じゃない、別の男だ。離婚して男のほうに引き取られていた息子だよ」大平は溜息をついた。「先生は彼女を守るうとしていたんだ」

「その関係は、今おっしゃった関係はどの程度の人間が知っていたんですか」

「当人達は、先生の2人の息子達は知っていたよ。彼らは兄弟として互いに認めていた」

しばらく沈黙が降りていた。須田は低い声で質問を發した。

「先生のご息は今どこにいるんですか」

「わからない。あれを境に姿を消してしまったよ」

「名前は、わかりますか」

「武志というんだ。前田武志」

須田は帰りの新幹線の中で、景色を見ながらこれからの事を考えていた。いよいよ5年前の事件とのつながりはハッキリしたように思えた。大平の言った前田と今の依頼人が同一人物だという明確な証拠は無いのだが、須田はすでに同一人物だろうという確信を持っていた。

そうであるならば、問題は前田が須田に依頼を持ち込んできたのはなぜか、ということだった。偶然であることはあまりありそうにない。須田の事務所は一般にはほとんど知られていなくて、飛び込みの依頼などはほとんどないからだ。何も知らずに依頼を持ち込んで、偶然にもそれが5年前の事件と深く関わっているというのは、確率的に低すぎる。

考えられるありそうな可能性は、前田が5年前の件の決着をつけようとしているということだった。自分の兄弟が死んだか殺されたかしたことの真実を探ろうとしているのかもしれない。そして、その関連に唯一気づくことができるのが、かつて失敗した探偵、須田正人なのかもしれない。それにしても、なぜ今なのか。それが一番わからない。

そこで須田は考えるのをやめた。理由などはどうでもいい、今は目の前の依頼を解決するのが重要だ。目の前の問題に取り組んでいけば、おそらく答えは見えてくる。

須田はそう考えて目を閉じたが、携帯電話が鳴った。

「はい、須田です」

「おい、お前今どこだ」

電話は石村からだった。少し切迫したような様子だった。

「出張帰り中だな、1時間半くらいで戻れる予定だ」

「そうか、それじゃあ戻ったらすぐに署に来てくれ」

「何があっただんだ」

「あの襲われた女、三島だったか。彼女がまた襲われた」

「彼女は無事か」

「ああ、それは大丈夫だ。彼女の病室に乱入しようとした男がいたんだが、病院の職員がなんとか押さえている間に、パトロールしてた警官が間に合った」

「そうか。それで、その男は何者なんだ」

「名前はまだわからん。チビの筋肉野郎らしいんだけどな、まあ目立つ男のようだからすぐにわかるだろ」

「わかった、戻ったらすぐにそっちに行く。その男の写真を用意してくれる、知ってる奴かもしれない」

「期待してるぜ」

「須田だ」

「ああ、用件はわかってるから」木村は電話の向こうで溜息をついた。「頼まれた通り彼女の所には行ってたんだけど、ちよつと部屋を空けた隙を狙われたというわけ。病院の職員に代わってもらってたからなんとか助かったけどね」

「そうか、怪我なんかは、大丈夫か」

「ええ、おかげさまで。それから、私は公式にはあそこにいないことになってるから、そこそこよろしく」

「わかった。迷惑はかけない」

「もう十分迷惑だから気にしないでいいから、それじゃ」

電話を切った須田に向かつて、石村がにやりと笑った。

「お前の手回しがいいおかげで助かったよ」

「それなりに危なかったようだけどな。それで、乱入した男の写真は」

石村は机の上に置いてあったデジタルカメラを手にとって電源を入れてから、須田に差し出した。

「ちよつと写りは悪いけどな、顔を確認するのはできるだろ」

カメラのモニタに写っているのは、間違いなくあの筋肉男だった。「こいつの詳しい情報はあるのか」

「もちろんだ。まあそれなりに悪だなこいつは。傷害やら脅迫やら不法侵入やら、なかなかのキャリアを持ってる」

「そいつが立派な個人事業主だとは思えないな」

「ご名答。この野郎は体のいい使いばしりでしかない。ただし馬鹿じゃない。口を割ったことはないようだし、元につながるような証拠も残していない」

「だが、今回は違いそうか」

「ああ、殺し絡みとなるとな、こつちとしてもただで終わらせる気

はない。引っ込んでる奴を燻りだしてやる」

「しかし、2回も失敗したとなると、あっちもおとなしくは引き下がらないかもしれないな」

「つまり、1回目も今回の野郎だったんだな」

「そうだ。泳がしておいて正解だったよ」

石村は須田の目をじつと覗き込んだ。

「それは危険だぞ。何を考えてるんだ？」

「対策はとっておいたし、実際大事には至らなかった。結果的には問題はないだろう。それに、しっかり根まで掘り下げる必要がある。それだけの深いものが今回の件にはあるはずだ、確証はないけどな」

「確証がないってことは、当然その事情をしゃべる気はないわけだよな。まあいい、こっちは手持ちの駒でなんとかするさ。しゃべれる状態になったらいつでも吐いてかまわんぜ」

「そうしよう」

気のせいかもしれないが、前田は電話の向こうの男に焦りがあるように感じられた。

「あの探偵とはもう会いましたか？」

「いいや、残念ながらまだですよ。どのみち今はこの街にはいないようですが」

「ほう、どんな用件なんでしょうかね」

「さあ、私の依頼よりも重要なことなんでしょう」

「所詮、ああいう犬は金の臭いに惹かれますよ。あなたにとっては残念なことでしょうが」

「さあね」

前田の素っ気ない返事の裏にある感情を読み取ろうとしているのか、男は不自然にしばらく沈黙した。

「それも含めて後ほどお教えいただけるとありがたいですね。では、失礼しますよ」

男は電話を切った。前田は携帯をしまってから時間を確認した。すでに午後4時をまわっていた。前田は須田に電話をかけた。

「前田ですが、もう戻ってますか？」

「ええ、連絡が遅れて申し訳ありません。ちょっと放っておけないことがあったので」

「それは、依頼したことと関係があるんですか？」

「そうですね、おそらくあなたはすでにご存知だと思いますが、あなたもよくご存知の三島理恵という女性が最近、殺されそうになりました。」

前田は何も言わなかった。

「1回ではありません。最初に襲われた後は入院していたんですが、昨夜また襲われたんです。犯人は同じ男で、今は警察が確保しています」

「昨夜襲われたというのは初耳です。犯人は、どんな男かわかりますか」

「小柄な筋肉男ですよ。それなりのチンピラのようなのですが、今回はこの男にも依頼人がいるようですね」

「その、依頼人というのは何者なんでしょうか」

「わかりませんね。前田さんの方こそ、ご存知じゃないんですか？」

「いえ、知っていたらいいと思いますけどね」

「そうですか。あなたは三島さんが最初に襲われたのはご存知のようなので、何か私とは別の情報源があると思ったんですか」

前田は返答に詰まった。昨夜襲われたというのは初耳です、と言ったのは、三島が1回は襲われたのを知っていると白状したようなものだった。それにしても、須田はなぜそのことを教えなかったのか。

「ああ、何もおっしゃらなくて結構です。できれば直接お会いしたいのですが、今はまだ私のほうも準備ができていませんから」須田は前田の反応をうかがうように一呼吸間を置いた。「申し訳ないのですが、それまでは私に任せて待っていて頂きたいのです。色々と動きたいこととは思いますが」

前田の頭の中は須田に対する疑念が渦巻いていた。いつたいこの探偵は何をどこまで知ってるのか？

まだ時間が早かったが、須田は三山の店の一つに足を運んだ。ちよつど顔なじみのバーテンダーが店の前を掃除しているところだった。バーテンダーはすぐに須田に気がついた。

「あれ、今日は早いですね」

「ああ、三山はいるかな」

「オーナーなら、中で帳簿と格闘してますよ」

「それなら、一足先に入らせてもらうよ」

須田はドアを開けて店内に入った。店内では三山が帳簿とにらめっこをしていた。三山は須田に気づくと、顔を上げて脇に置いてある帳簿を手にとって差し出した。

「まあちよつとこれでも見てろ、もうすぐ一段落するから」

須田は黙って帳簿を受け取って、三山の向かい側に腰かけると、なんとなくそれを眺めた。5分ほど経ってから、三山は帳簿を閉じて須田の顔をじつと見た。

「で、何かわかったのか？」

「まあ、わかりかけてきたところだ」

「悠長だな、こつちであつたことは知ってるんだろ。どこのどいつか知らん相手は焦ってる。逃げられるかもな」

「どうだろうな。ここまでやるからには、あちらさんにも何か事情があるんじゃないか？」

三山は須田の問いに笑みを浮かべて、テーブルの上の帳簿を軽く叩いた。

「本当は昨日話そうと思ってたんだが、出張の邪魔をしちゃ悪いと思つて黙つてたもんでな」

「なにかわかつたのか」

「被害者の三島って女な、あれは怪しいぞ」

「どこがだ」

「まず、最初に襲われたのは自宅だったな。あれは分譲の家なんだが、持ち主が転勤なんで貸家にしていたらしい。それが半年前の話で、契約者は清水裕仁っていう中年の男だったそうだな。同居人は娘が一人」

「それが三島理恵なのか」

「契約上は清水理恵ということになってる。何か必要があつてそんな面倒くさいことをやってるんだろつよ、何かから逃げてたのかな」三島は笑みを消して真顔になった。「問題はその理由だ。命まで狙われるってのはよほどのことだろう」

須田は黙り込んで、考え込んだ。三山はその様子を見て、帳簿を数冊抱えて立ち上がった。

「ま、せいぜい頑張つて考えてくれ。俺はちょっと出てくるから、その間店の売上げに貢献しておいてくれよ」

須田は目の前にあるウイスキーが注がれたショットグラスを眺めていた。三島が偽名で引越してきて、それ以外では本名を隠そうとしていないのはどうしてなのか。この街に来てからは、隠す必要がなくなったからなのかもしれない。静かに入ってきて、派手に動く。しかし、なんのために。

そして前田はこれにどう絡んでくるのか。あの2人は共謀しているのか、あるいは全く違う目的で、偶然関わることになったただけなのか。2人の目的がわからない今の状態では、何とも判断のしようがないことだった。

「だいぶお悩みのようですね」

バーテンダーがピーナッツの小皿を差し出しながら、須田に声をかけた。須田は軽くうなずいてそれを受け取った。

「この間からオーナーと話してることですか？」

「ああ、そうだ」須田はピーナッツを一つかじった。「ところで、計画的なものと偶発的なことはどっちが頻繁に起こるかわかるかい」「それは偶発的なことじゃないですかね。この店に計画的に来る人しかいなかったら、とくにつぶれてますよ。色んなお客様がフラツと来てくれるからやっていけるんです。常連さんだけだとけっこうつらいですよ、こういう商売は」

「世の中、偶然だけで動いてるんじゃないかと思いたくなる時もあるな」

「そうですね」バーテンダーはさわやかな笑顔を浮かべた。「案外そうかもしれませんよ」

「そうでないことを祈るよ」

「よお、儲かっているか」三山が勢いよく戻ってきて、店内の客に手を振りながら大声でしゃべった。「アル中にならない程度にたっぷり飲んでいってくださいよ」

三山はそのまま須田の隣のストウールに腰掛けた。

「それで、考えはまとまったのか？」

「いいや。問題が俺の依頼人と三島の接点だというのは予想できるんだけどな、それだけだ」

「おいおい、お前の依頼人の事情なんて聞いてないぞ。まあ、教えると言つても、しゃべりやしないよな」

「片付いたら話してもいい」

「そこまでもつたいぶられると、どうでもいい話でも聞きたくなつてくるな」

須田は一気にウイスキーをあおった。そして、空のグラスを見つめながら口を開いた。

「実際のところ、話せるだけの材料がないだけだ」

前田はどうするあてもなく、夜の街をぶらぶらと歩いていた。今は明らかに八方ふさがりの状況だ。あの探偵は何かをつかんでいるようだが、話す気は全くないようだし、それはあの電話の男も同様だった。

しかし、筋肉男が逮捕されたとなると、話は違ってくるのかもしれない。そこで、前田の携帯が鳴った。例の男からのようだった。

「あんたの連絡役がへまをやったらしいですね」

「おや、もうご存知でしたか。まさか、あなたが一枚かんでるんじゃないでしょうね」

「本当はそうさせてもらいたいくらいですよ」

「まあ、冗談はこれくらいにしておきましょう」そう言いつつも、男の声には笑っているような雰囲気があった。「あんなのなら何人でも用意できますからね、弾切れの心配はいりません」

「それで、何が言いたいんですかね？」

「さあ、それよりも、あなたに連絡役の件を教えたのはあの探偵ですよね、仕事熱心で結構なことです。ああ、それから、例の男がくだらないことを言ったと思います、忘れてもらってかまいませんよ。こうして電話に出て、知っていることを教えていただければ十分です」

「心境の変化ですか」

「どうとってもらってもかまいませんよ。それでは失礼します」

男は電話を切った。その内容を反芻しながら考え込んでいる前田の横を、石村が携帯電話を取り出しながらすれちがった。

「ああ、お前か。少しは溜め込んでるもの吐く気になったのか？」

「あいにく、まだ状況が許してくれそうにない」

「またそれか」石村は露骨にため息をついた。「それじゃ、この電話は何だ」

「まあ、その許してくれない状況をなんとかするためには、多少口をすべらせる必要があるそうなんだよ」

「なるほどね。それなら、2時間後くらいに署に来てくれ」

「また午前様か」

「そうだ、俺は立派な公僕なんだ」

須田は何も言わずに電話を切ったが、石村には須田が笑っているのがわかった。

「お前らまた何かやってるのか。ほどほどにしとけよ」

須田が石村のところに来ているのを見て、石村の上司の課長が上機嫌そうな様子で声をかけた。

「ええ、わかってますよ。でも今回はなかなか面白そうなことになりそうなんです」

「何なのかは知らんが、あまりやりすぎないようにな。特に石村、状況が整うまでは首を突っ込みすぎるんじゃないぞ。それから、仕事に支障が出ないように注意しろ」

「了解」石村は笑いながら課長に向かって手を振った。その笑いを引っ込めて須田のほうに向き直った。「それじゃあ、吐いてもらおうか」

「いや、これから話すことはただの独り言だ」

須田は紙コップのコーヒーを一口飲んでから、下を向いた。

「まずはあの三島理恵。偽名でこの街に越してきたんだが、なぜか今は本名を隠していない。この間死んだヒモの女だったということになってる。そのヒモが死ぬか殺されるかしたあと、自宅と病院で襲われた。おそらくドラッグ絡みでだ」

「あの女は口が堅くていけないな」

石村が口をはさんだが、須田はそれを無視して独り言を続けた。

「重要なのは引っ越してきた目的だ。偽名を使っただけということは、この街に来たことを知られなくなかったんだろ。だが、今回の舞台に登場した時には本名で出てきた。なぜ最初は偽名で、途中から本名にしたのか。どういった状況だと、こんな行動が都合がよくなるのか」

「そうだな、2回も襲われてるとなると、それ以前から狙われていたというのも、なさそうな話じゃない。そう考えると、最初は狙いを逸らすために偽名で行動していたのが、何らかの理由で自分の安

全が確保できたと考えて、狙っている相手に圧力をかけるためにわざと自分の存在を誇示した、なんて話もありかな」

「それとも、身の安全よりも、その相手に対する圧力というのが重要だったのかもしれないな。リスクを負うだけの価値はあると思うたのかもしれない」

「そう考えたきっかけは何だったんだろうな」石村は微笑を浮かべて、コーヒーを一口飲んだ。「焚きつけた奴がいるんじゃないか？」

「かもしれない」

「心当たりは、あるよな」

一瞬重い空気がその場を支配した。

「断定はできないが」

「それじゃあ、本格的に口を滑らせてもらいたいな」

個室タイプの居酒屋で、前田の向かい側には長身で頭の薄い男が座っていた。

「電話ではすっかりおなじみかと思いますが」男は名刺を前田に差し出した。「弁護士の前田と申します」

前田は無言で名刺を受け取った。名刺には吉田のにこやかな写真が印刷されていた。

「まるで、まともな弁護士みたいですね」

「いえいえ、まともな弁護士ですよ」

吉田は名刺の写真のような笑顔で前田の言葉に応じた。

「つまらない誤解や先入観はお互い捨てましょう。こうして直接顔を合わせたわけですから、今までの経緯は置いといて、建設的な話をするべきではないでしょうか？」

「そう、今まで隠していたことを話してもらいたいもんですね」

「それはお互い様じゃないでしょうかね、前田さん」

吉田は笑顔のまま前田の目をまっすぐに見た。前田は無表情に目を合わせた。

「そもそも、今回のことをややこしくしたのはあなたでしょう。穏やかにおさめる責任というものが少しばかりあるような気がしますね。これ以上何かが起きる前に」

「あんた方には色々面倒があっただけでしょうが、こちらには特別面倒なことはありませんよ。責任と言われても、意味がわかりませんね」

「とぼけますか。まあ、それもいいでしょう。こちらとしては、あなたが思い通りに動いていただければいいんですから。何を考えていようとね」

「何か考えていたところで無駄だと言いたいんですか」

「おや、何か考えていらつしやると。それは興味深いことですね」

「大したことはありませんよ」

「そう、平均寿命から考えれば、5年という時間などは短いものですからね。まあ、場合によりけりといったところかもしれませんが」

吉田は薄笑いを浮かべ、前田は無表情のまま、2人は黙っていた。吉田がその沈黙を破った。

「前田さん、ひょっとすると、我々とあなたの利害は競合しないかもしれませんよ」

「三島が今回の件に関わった動機は、個人的な恨みだろう。だがそれは一人で無謀なことをしようとするほどのものでもないはずだ」

「それはどうだろうな」

「その筋以外では知名度がないに等しい個人営業の探偵を訪ねてくる時点で、衝動的にヤケを起こしたとは思えないだろう。もっとわかりやすいところはいくらでもある。それに、本人としては準備万端で乗り込んできたんだろうから、ますますやけを起こしたとは考えられない」

「最初からお前と接触するつもりだったと、そう考えられそうか。で、問題はそれを考えた人間が別にいるってことだな」石村はボールペンを手にとって回し始めた。「例えばお前の依頼人とか」

「確証はない。それに直接に接触してるかどうかはわからない。しかし、その可能性は十分ある」

「結ぶ線はドラッグ、だな。それで、お前の依頼人はどうつながってくるんだ？」

「それなりに壮大な話だ」

須田は目を逸らして溜息をついた。

「なるほど、例の5年前の話か」

「そうだ。こんなところじゃ話すわけにはいかない事情があるんだが、まあ簡単に言っと、肉親の仇討ちだろう」

「なるほどな、あのクソツタレの奥がクソを撒き散らしてたわけだし、直接突っ込んでいらないで、つながりのありそうなヒモをマークしようとしたわけか。その上、奥のことも探り出してたとすると、なかなか大した依頼人だな」

「そうだな、いいセンスしてる」

「雇いたいくらいか？」

「いや、秘密が多い人間は駄目だ。ある程度は信頼してもらわない

と、できることもできなくなる」

「ああ、それはわかる。で、具体的には何を隠してるんだ？」

「まずはさっきの話せない事情だ。それから三島のことと、奥のことだ」

「その話せない事情とやらはどうにかなんないのか？ 昔の担当、山崎だったか、あれも同じこと言っつて、ほとんど内容ゼロだったんだぞ」

「それは仕方がない。相手は政治家だ」 須田はすぐに顔の前で手を振った。「今、何も言わなかったよな」

「ああ、何も聞いてない」

「それで、政治家といったら、古いタイプは妾なんかいたりするわけだ」

「まあ、何にもなけりゃ、公には認知しないよな。当事者は知ってるだろうが。きっと我々一般大衆には計り知れない事情がありなんだろうな」

「そうだな」 須田は窓の外の夜の街を見つめた。「例えばという話だけでも、けっこうなものだ」

吉田との会談を済ませた前田は、夜の街をホテルに向かって歩いていた。吉田の話聞いても心を動かされることは全くなかった。あの場では特に何の返事もなかった。つまりノーとも言わなかったのだが、吉田はそれに関しては何も言わなかった。

前田が何気なく顔を上げると、それなりに高級そうなバーが目に入った。前田はなんとなく引き寄せられるようにして、その扉を開けた。店内はジャズが流れている落ち着いた雰囲気だった。前田はカウンターのストウールに腰かけて店内をざっと見回した。

「いらつしゃいませ」

バーテンダーがすぐに近づいてきて、笑顔で前田に声をかけた。

「なにか適当なビールをハーフパイント頼みます」

バーテンダーは軽くうなずくと前田に背を向けて、グラス手にとった。前田はビールが出てくるまでのわずかな時間に客を観察し始めた。

カウンターとわずかなテーブル席があるだけの、広くもなく狭くもないような店内に、客は四人いた。二人は身なりのいい中年の男、一人は水商売をしているように見える、若いと言えなくもない女。もう一人の年齢のよくわからない派手な男は、いつの間にか前田の隣に来ていた。

「うちの店は初めてですか？」

男は愛想のよさそうな笑みを浮かべながら、前田の隣のストウールに腰かけた。

「ええ、そうです」

「それはありがとうございます。私はこのオーナーをやってましてね、初めてお見えになるお客様にはサービスさせてもらっているんですよ」

男は名刺を取り出して、前田に差し出した。名刺には三山雄一と

いう名前と、連絡先だけが印刷されていた。

「ビール半パイントじゃさみしいでしょう、高くないボトルの一本くらいはサービスさせてもらいますよ」

バーテンダーが穏やかな笑みを浮かべながらビールのグラスを前田の前に置いた。前田はバーテンダーの顔、ビールのグラス、三山の顔と視線を移してから、口を開いた。

「商売としてはまずいんじゃないですか？」

「いいえ、あなたが現在関わっている件に関して詳しいことが聞けるなら」前田はバーテンダーに目配せして、高級なウイスキーのボトルを自分の前に持ってこさせた。「大抵のボトルでは高いとは言えませんが」

前田は思わず立ち上がろうとしたが、すぐに思い直してその衝動をこらえた。

「どういうことですか？」

「どういうことか、といいますとね。私よりもあなたのほうがよくわかってるでしょうし、お互いに損はしないということですよ」

三山は笑顔でバーテンダーからショットグラスを二つ受け取った。ウイスキーを開けて、そのショットグラスに適当に注いだ。

「驚くのはわかりますよ。まあなんですかね、私はこの街ではちょっとしたものでして、色々と情報というか、噂が耳に入るんですよ。聞こえなかったフリをすればいいのかもしれませんがね、あいに、そういう性分ではないものでして」

前田は黙ってショットグラスを手を取った。しかし中身のウイスキーは飲まずに、ただグラスを振った。

「どこまでご存知かは知りませんが。私の目的と三山さんの利害は一致するかもしれませんね」

石村との話を済ませた須田は、事務所に向かっていた。石村相手にかなり口を滑らせた結果がどうなるかはわからなかったが、おそらくあいつなら何らかの動きをしてくれるだろう、と須田は予想していた。

たとえ個人的に動くだけだとしても、石村は警察に所属している。つまり、警察が動いていると錯覚させる可能性がある。何も得られなかったとしても、今回の件の当事者たちにプレッシャーだけはかけることができる。そうすれば何か出てくるかもしれない。

考えているうちに、須田は事務所に到着した。ドアを開けて暗い事務所に入ると、電話の留守番電話を知らせるランプが点滅していた。須田は明かりをつけてから再生ボタンを押した。

「ああ、俺だ」三山の声だった。「さっきまでお前の依頼人と飲んでたよ」

須田はメモ用の紙とボールペンを手元に引き寄せた。

「あれは相当切羽詰ってるな。初対面の俺に対して、自分のやってることに協力してくれと言ってきやがったよ。まあもともと、俺のことはある程度知っていたのかもしれないけどな」数秒沈黙があった。「そういうわけだから早めに連絡をよこせよ。どうにも妙な感じだ」

留守番電話はそこで終わった。須田はメモを一度見返すと、すぐに受話器を取って、三山に電話をかけた。すぐに三山がでた。

「ああ、遅かったな」

「真面目に仕事をしてたんだ」

「そりゃご苦労。俺の留守電よりもいい情報はあったか？」

「それはこれから出てくるかもな。偶然にも警察の人間が私的に動く見込みだ」

「なるほどなあ、それは期待できそうだ。でもこっちもなかなか面

白いぞ」三山はもったいぶるようにタメを作った。「嘘つきな愚か者の話だ」

「どこらへんが嘘だったんだ」

「どっかのへボ探偵に話したことは大体嘘だとさ」

「なるほど」

「おや、シヨックは受けないのか？」三山はいかにも笑いをこらえている雰囲気だった。「かませ犬にされたんだぞ」

「今となってはどうでもいいことだ。それに、最初の依頼通りの男の嫉妬を満足させるなんてものなら、今頃報告書を作って終わりにしてる」

「俺なら門前払いだけだな」

「それはそうと、早いところ内容を話してくれ」

「お前のほうでもシナリオは書けてるんだろうけどな、まあ、整理のためにも端折らずにおくぞ」

三山はおおげさに咳払いをした。

「まず、前田という男は、ある名士の息子だそうだな。もっとも、母親は公式な妻の立場じゃないんだけどな。それで、父親違いの兄弟が昔ドラッグ絡みで殺されたそうなんだな。まあそのドラッグの元締めが奥らしいんだが、なんとも泣けることに、その兄弟の敵を討とうとしてるらしい」

「感動的だな」

「そうだな。しかもただ感動的だけじゃなくて、なかなか大河ドラマ的なんだ、これが。前田は昔に失敗した探偵にもう一度チャンスをやるうとしてるんだそうだな」

三山は実に楽しそうだった。

「実にありがたい話だな」

「その探偵は今のところ、なかなかの働きをしてるようだな。それなりに満足してるらしい」

須田は黙って首をすくめた。

「ただな、どうもその探偵があまり協力的じゃないふしがあって、あるうことか依頼人の詮索をしているうえに、情報を隠していると、いうわけだ」

「それで街の名士たるお前を頼ったと」

「最初から頼ろうとしてたんじゃないか？ 俺のほうから先に接触したんで、多少不意をつかれたようだったけどな。でも素直だったぜ」

「嘘は無しか」

「それほど無かったんじゃないか？ 俺のことを下手な嘘が通用する相手だと舐めてるなら、わざわざ相談しようとも思わんだろ。ま

ああれだな、この野郎はかなり周到な奴だ。驚くほど良く調べてる。それになかなか用心深い」

「完全に足跡を消すことなんてできない。しつこくやってれば何か出てくる」

「そりゃ仕事の心得か？ まあこいつの場合当たってるんじゃないかね。お前、以前は表で動いてなかったんだろ」

「ああ、そうだ」

「それを調べて利用しようっていうんだからたいしたもんだ。怖いねえ、人間の執念は」

「で、お前のほうからは何を要求した」

「それは蓋を開けてみてのお楽しみってやつだ」

須田は激しいノックの音で目を覚ました。昨晚と同じ格好のまま多少うんざりしたような顔でドアを開けた。機嫌の悪そうな木村が立っていた。

「お客様を迎える状態には見えないんだけど」

「客っていうのは依頼人のことだ」

悪態をつきながらも、須田はドアを支えて木村を事務所の中に入れた。木村は煙草とライターを取り出して、早速煙を吐き出し始めた。

「それで、こんな朝早くから何の用なんだ」

「あんたに色々頼まれた例の三島って子なんだけど。今朝になってみると病室から消えてんの」

須田は表情を変えることなく、黙って木村の言葉を受け入れた。

「病院の職員に聞いてみたけど、目撃者は無し。抜け出した経路は不明」

「深夜だったら、正面から出て行っても、誰にも見られないのは難しくないだろうな。思いつきで成功するもんじゃないだろうが」

「まあ、計画的なのは間違いないでしょうね」

「問題は誰が絡んでるのかだ」

木村は煙草を盛大にふかしてから、口を開いた。

「あんたの依頼人じゃないでしょうね？」

「ありそうなことではあるけどな」須田は厳しい顔で天井を見上げた。「そんなことより彼女の身柄を確保することが重要だ。何しろ命を狙われてる」

「それなら、警察にはもう情報がいつてるから、街を出てなきゃ見つかるのは時間の問題と言えそうね」

「生きてればな」

須田はそれだけ言うと、すぐに受話器を取った。

「お前か、ああ俺だ。三島が病院から失踪した。なにか情報があったら頼む」慌しく電話を切って、また違うところに電話をかけた。
「急ぎの用事だ。三島が病院から失踪した。警察も動き出してるだろうが、お前のほうでも動いてみてくれ。頼むぞ」

須田は電話を切ると、上着を手にとって立ち上がった。

「頼りになるお友達がいて安心なこと」

「だいいいけどな。お前の方でも暇があるなら手を割いてくれ」

「はいはい。わかりましたよ」

木村の返事を聞きながら、須田は事務所の合鍵をそっちに放り投げた。

「鍵は閉めといてくれ」

須田はとにかく、三島の家ということになっていたところに向かっていた。この街で三島が立ち寄る可能性が高い場所といたら、まずあそこだった。

家の前にはすでに石村が来ていた。須田に気づくと、首を横に振った。

「ここには誰もいないぜ。とっくに立ち去ったのか、そもそも戻ってないのかはわからないな」

「家の中の状況はどうなんだ」

「特におかしなところはない、というのがおかしいな。キッチンと整理されていて、慌てて出て行ったような痕跡はない。それならなんで誰も家にいないんだ？」

「慌てて出て行ったのかもな」

「ああ、それも考えられるけどな。何かの事情で単に帰ってきてないだけという可能性もある」

石村と須田はしばらくの間、無言で無人の家を見つめた。石村がその沈黙を破った。

「三島が行きそうなところに、目星はついてるのか？」

「見当がつかないから、とりあえずここに来たんだ」

「そうだよな。それにしても、狙われて人間が好き勝手に行動するのは参るな。動き回ってたほうが安全だとも思ってたのかね。じつとしてくれてないと効率のいい警護なんてできやしないってのによ」

「いつだって、そういった苦労は理解されないもんだ」

「わかってるわかってる」石村は大きな溜息をついた。「理解してもらったためにも、さっさと三島をみつけないとな。俺のほうは組織力、お前はコネと勘だ」

それだけ言うと、石村は車に乗り込んだ。須田は黙ってそれを見

送ると、事務所に足を向けた。三島と前田がつながってるのなら、自分と接触する可能性がある。そのためには動くのを我慢して、確実に接触できると思われているところに居る必要があった。

朝の空いているファミレスで、多少緊張した表情の前田の前に、三島が座っていた。

「なぜこんな無茶をしたんですか？ 病院のほうがずっと安全でしように」

「でも居場所が知られてるのは不安なんです」

「それは逆ですよ。誰もが知ってるからこそ安全なんです。現に一度助かってるでしょう」

「でも」コーヒークップを持つ三島の手は震えていた。「3度目はダメかもしれません」

「確かに危険ですよ、でもそれはあいつが追い詰められてることなんです。そこまですないと駄目なんですよ」

三島の震えはおさまらなかった。前田はそれに大した反応を見せずに、朝食セットのスクランブルエッグをつついていた。

「とにかく病院に戻るのが最善です。それでしばらく時間は稼げるでしょうから、そこが勝負ですよ」

前田の言葉は三島には届いてないようだったが、前田は特に気にする様子もなく、朝食を消化していった。全て食べ終わると、前田は静かに立ち上がった。

「支払いはい済ませておきますから、とにかく病院にもどってください」

三島は前田が立ち去った後も、じっとして動かなかった。

どれくらい時間が経ったのかわからなかったが、三島は意を決して立ち上がると、須田の名刺を取り出して、店内の電話に向かった。

「はい、須田探偵事務所です」

須田の声に三島は言いようのない安堵を感じた。

「あの、三島です。三島理恵です」

「ああ、連絡をお待ちしてましたよ」

須田の声には、ホツとした雰囲気があった。三島は多少気分がほぐれるのを感じた。

「今はどちらにいらっしゃるんでしょうか」

「3丁目のファミレスにいます、店名は」

そこで誰かの手で電話が強制的に切られた。三島は振り返ることもできずに固まった。

「探しましたよ三島さん。色々聞きたいことはありますが、とりあえず私と一緒に来てもらいましょうか」

須田は突然切れた電話の内容を考えるよりも先に、すぐに三山に電話をかけた。

「三山から連絡があつた。どうもまずい状況らしい」

「どれくらいまずいんだよ」

「すぐに動かないと最悪のケースになりそうだ」

「ああ、それはそれは。で、俺にどうしろって？」

「3丁目のファミレスのあたりで人手が必要だ」

「あの小汚いところか。ファミレスで悶着があつて応援が必要ってわけじゃないよな？」

「確証はないが、それはないだろう。電話をかけてる時に連れ出された可能性が高い」

「それだと、近くに居るかどうかわからんぞ」

「それでも押さえておく必要があるから、とにかく人手が必要だ。聞き込みは俺がやる」

「そうか、ちよつと待ってる」

三山は電話を置いて、近くの誰かに人を集めるように指示を出した。須田はしばらくやりとりする声を落ち着いて聞いていた。

「とりあえず5人そっちにまわせそうだ。しかしこりゃ堅気の仕事じゃないな」

「警察はこの状況じゃまだ動けないからな。それと、お前のことを堅気だと思ってる奴はいないから安心しろ」

「嫌な話だな全く。ほとんど堅気だろうがよ俺は」

「それじゃ頼んだぞ」

須田は三山の愚痴は無視して電話を切った。そしてすぐに石村に電話をかけた。

「三島の件で動きがあつた」

「まずいことか」

すぐに本題に入った須田の緊迫した雰囲気、石村も声を緊張させた。

「3丁目のファミレスから俺に電話があったんだが、その途中で誰かにつかまった」

「そいつはまずいな。この状況じゃこっちはあまり動けないぞ」

「それならもう手配済みだから、すぐに動けるように準備だけしておいてくれ。最終的には絶対必要だ」

「了解。大物を見失わないでくれよ」

「できるだけやってみるつもりだ」

須田は電話を切って、ジャケットを手に取った。引き出しから作業用の厚手のグローブを取り出してポケットに突っ込みながら、勢いよくドアから外に出た。

「協力してもらえて助かりましたよ。手荒なことはしたくないものでしてね」

吉田は気味が悪いほどににこやかに笑いながら、椅子に沈み込んでいる三島に語りかけていた。車に乗せられて、目隠しをされていた三島は、とにかくここがどこかということを考えていた。どこにでもあるようなちいさな雑居ビルの一室ということと、さっきのファミレスからはそれほど遠くない場所らしい。カーテンで外が見えない状況ではそれくらいしかわからなかった。

「ここがどこかなんていうことは、考えても無駄なことですよ。わかったところで状況が変わる要素にはなりません」吉田は三島の向かいのソファーに勢いよく腰を下ろして足を組んだ。「助けなんて期待しないことですな。3回も偶然はありませんよ」

三島はそれでも口を開かず、吉田の話をもとに聞いている様子もなかった。吉田はそんなことは全くかまわないようだった。

「それにしても病院から抜け出してくれて助かりましたよ。あそこは色々と目をつけられてますからね、こうやってゆっくりと話すことも出来ません。いやいや、重ねてお礼を申し上げますよ」

「なんなんですか」

饒舌な吉田に対して、三島は一言だけつぶやいた。効果はあったようで、吉田は口を動かすのをやめた。

「やりたいことがあるんですよね？ だったらさっさと済ましたらどうなんですか？」

「おや、何をですか？」

三島の絞り出すような言葉にも動じずに、吉田は皮肉っぽい笑みを浮かべた。

「別に私のクライアントはあなたの想像されているような解決法は特に望んでいませんよ。まあそれも否定はしませんが」吉田は足を

組み直した。「もつとも、私はそんなことはやりませんよ。警察やら探偵やらに餌を投げてやる趣味はありませんから」

三島は黙って吉田を睨みつけた。吉田はそれを無視してソファーから立ち上がった。

「まあそういうわけですので、思う存分ゆっくりしていつてかまいませんよ」

吉田はドアを開けて外に出て行った。ドアの向こうには監視役らしい屈強な男が立っていた。屈強な男にうなずく吉田を見ながら、三島の頭の中ではとりとめのない考えが渦巻いていた。

須田は三島から連絡があったファミレスのあたりで聞き込みをしていた。三山から借りた連中には、三島の特徴を伝えて、とにかく歩き回らせている。そして、聞き込みは予想よりも順調に進んでいた。

ファミレスの店員は三島と前田らしき男が居たのを覚えていて、前田らしき男が先に会計を済ませて出て行ったということだった。三島が姿を消したのはそのすぐ後のようだったが、その店員はそれを見ていなかった。前田がこれに関わっているかどうかが非常に気になったが、須田はとりあえずその問題は置いて、今の目の前に集中した。

店員から大体の時間を聞き出せたので、そこに絞って、さらに怪しい車や人に関して集中的に聞き込みをした。時間は着実に過ぎていったが、須田に焦った様子は全くなかった。落ち着いて穏やかな雰囲気ですらドアをノックしたり道行く人を呼び止めたりしていた。

三山から借りている連中はからはこまめに報告が来たが、あまり芳しいものではなかった。しかし、須田のほうにはしっかりと収穫があった。三島らしき女が、長身で頭の薄い男とファミレスを出るのを目撃した人物が見つかった。

須田の脳裏には一度顔を合わせた吉田の顔が浮かんた。すぐに三山に連絡を入れた。

「どうだ？ 収穫はあったか？」

「ああ、おそらく吉田が動いてる。奴の本拠地はどこだ」

「ああ、やっぱりなあ。あの野郎最初っから怪しいと思ってたんだよ」三山は大して驚いてないようだった。「それであいつの事務所はだな、近いぞ、そこから歩いて5分くらいのところだ」

須田は三山が読み上げた住所を手帳に書き込んだ。

「しかしな、一人で乗り込むのはまずい選択だぞ」

「わかってる。それでも向こうには一人だと思わせないたほうがいい」

「そうだな、まあ無理はするなよ。俺もすぐにそっちに行く」

「頼む」

須田は電話を切ってから、すぐに石村に連絡を入れた。

「三島の居所の見当がついた」須田は吉田の事務所の住所を読み上げた。「すぐに来てくれ。お膳立てはしておく」

「了解。話は後で聞かせてもらうぜ」

石村は簡潔な返事をした。須田はポケットに突っ込んできたグローブをつけて、吉田の事務所に足を向けた。

須田は吉田の事務所が入ってる雑居ビルの入り口に到着していた。事務所のある3階の窓を見上げると、明るい時間にもかかわらずカーテンがしつかりと閉まっていた。すぐに踏み込むことはせずに、向かい側の道から様子を見ることにした。

「なんかおもしろいものでも見えてるのか？ 俺には趣味の悪いカーテンが閉まつてる怪しい事務所しか見えんがね」
いつも通り気楽な服装の三山が声をかけてきた。

「これからおもしろくなるだろ」

須田の答えに三山は苦笑いともとれる表情を浮かべた。

「あんまり注目はされたくないんだけどな。まあ大立ち回りにならないことを祈ろうじゃないか」

三山は須田の肩を叩いて雑居ビルに向かった。須田は黙ってその後についていった。3階に到着すると、吉田の事務所の前には屈強そうな男が立っていた。三山はそれを見ると、鼻で笑って男に近づいていった。

「よう、元気にやつてるかい？」

男は三山を認めると、気の毒なくらいにうろたえた。

「あの、いや、どうも、ええなんとかやってます」

「そうかそうか」三山は男の方を叩いた。「そりゃうれしいことだが、今日はどんな仕事をしてるんだ？ まさか俺に言えないようなことはやってないよな」

「いえ、それは、その」

「やってないならよ」三山は笑顔で男にぐつと顔を近づけた。「さつさと失せろ」

男はあっという間に青ざめて、背中を向けた。三山はその背中にさつきまでよりも優しい声をかけることにした。

「やる気があるなら、後で俺のところ来いよ。堅気の仕事を世話

してやるから」

男は返事をせずに階段に消えた。須田はそれを眺めながらつぶやいた。

「堅気のやりかたとは言えないな」

「平和的だろうが。いいから入るぞ」

三山はゆつくりと事務所のドアを開けた。

喫茶店に入った前田は明らかにいらついていた。基本的に思うように物事が進んでいない。関わる人間全てが、自分勝手に動いている。ついコーヒークップを勢いよくテーブルに置いて、中身を飛び散らせた。

「いけませんね、そういう態度は」

人を小馬鹿にしたような声に前田が振り返ると、サンドイッチとコーヒーを乗せたトレーを持った吉田が立っていた。

「少し、御一緒させてもらいますよ」

吉田は前田の返事を聞かずに腰を下ろした。前田は吉田を睨みつけた。

「前の話なら、まだ返事をする気はありませんが」

「ああ、それなら少し状況が変わりましてね。まあ単刀直入に言いますと、犠牲を出したくないなら、色々自重していただいきたいということにして」

「何の話です」

「さてねえ。あなたは今まで、できるだけ周りの人間の安全を考えてきたんじゃないですか？ここにきてそれがどうでもよくなつた、というんでしょうかね？」

前田は吉田の嫌な笑顔を見て、すぐに思い当たった。

「彼女をどうした」

「別に無事ですすよ、今は。問題は深く関わりすぎてるといふことなんですすよねえ」

「彼女は何も知らないぞ」前田は低く押さえつけた声を出した。「無理やり巻き込んだだけだ」

「なるほど」吉田はますます笑顔になっていった。「それなら、本人の前で確認しましょうか？幸い時間はたっぷりありますからね」前田は黙って吉田を睨みつけながら立ち上がった。

「ふざけたことをやるのは、いい加減にしてもらおう。もう昔のようなことにはさせない」

「おもしろくなってきましたね」

2人は一緒に店を出た。その表情は対照的だった。

事務所に入った須田が最初に目にしたのは、虚ろな表情をして立ちずくんでいる三島だった。

「三島さん」

須田の声に三島はゆっくりと顔の向きを変えて、須田の顔をぼんやりと見た。しばらくの間そのままの状態が続いた。三山がそれを破った。

「おいおい、あんまり時間がないかもしれないんだから、ぼけつとしてんなよ2人とも」

三島はその声に我に返って、須田にたいして遠慮がちに口を開いた。

「あの、その人は」

「こういった状況では、このあたりで一番頼りになる人間ですよ。安心してください。ここにこれだけ早く来ることができたのも、こいつのおかげです」

「そうなんですか」三島はそうつぶやいて、三山の顔をまっすぐ見て頭を下げた。「ありがとうございました」

「礼を言うのはまだ早いぜ、お嬢さん。これからどうするかが微妙で大きな問題なんだからな」

三山は須田に問いかけるような視線を投げかけた。須田はそれにならずいた。

「まず三島さんには安全な場所に移ってもらいます。状況を考えれば警察も喜んで保護するでしょうから、安心してください」須田は一呼吸おいてから、厳しい表情で続けた。「三島さん、あなたがどんな理由でこの件に関わったのかは知りません。しかし、今あなたが危険な状況なのは間違いありません」

三島は黙ってうなずいた。それと同時に、事務所のドアが勢いよく開いた。

「警察だ」

石村が踏み込んできたが、室内の様子を見ると、拍子抜けしたように溜息をついた。

「もうちょっと緊迫した雰囲気を想像してたんだけどな」

「大丈夫、警察ですよ」須田は驚いて腰が引けている三島に優しく声をかけてから、石村に向き直った。「ちょうどいいところに来てくれたな、彼女の保護を頼む」

「ああ、わかったよ。それで、またここに戻ってこいって言うんだろ」

「さすが刑事さん、よくわかってらっしゃる」三山は笑いながら、石村の肩を叩いた。「警察が居ると誰でも口が重くなるからな。まあ、おいしい場面に戻ってこられるようにしといてくれよ」

「そういうことだ」

三山と須田の言葉に石村はまた溜息をついて、あきらめたような表情を浮かべた。

「後は頼んだ」石村は三島に一步步み寄った。「それじゃ、三島さん行きましようか。この2人にまかせておけば安心ですよ」

三山は吉田のものと思われる机に乗ってくつろいでいた。

「さて、どうするんだ？ 何か名案があるんだろ」

「いや、別がない」須田はカーテンの隙間から外を見ながら答えた。
「出たところ勝負だな。何も確信が持てない以上、じっくり圧力をかけるしかない」

「そういうのはやめろよ、心臓に悪い」

「冗談を言ってる暇はないな」

須田の一言に、三山は嫌々ながらも真顔になって、机の上から降りた。

「わかったよ。まあここまできたら、俺にも関係がないわけじゃないからな、真面目にやってやるよ。で、俺の役はなんだ？」

「まあ怖いおじさんでところだ。ここぞというところまで出てきてもらう。お前が居ると吉田が何もしゃべらないかもしれないからな」

「なるほどね、それはそうだ。それじゃ、あのハゲが来るまで隠れることにするか」三山はドアノブに手をかけると、振り向いた。「ヘマすんなよ」

三山はそれだけ言って、部屋から出て行った。残された須田は、とにかく書類を漁ることにした。用心深い人間であれば、不特定多数が出入りする事務所のような場所に、人目に触れてはまずいものを置いておくことはないはずだが、普通の書類に紛れさせている、という可能性も排除はできなかった。

それに、吉田に関して何も知らないといえる須田にしてみれば、やっておくべきことだった。そして、それはどうやらいい結果にながった。

5年前のファイルに、須田がかつて関わった事件、前田武志の兄弟が殺された事件に関する資料が納められていた。知らない人間が見ればただの資料だが、須田にはそれこそが、吉田が今回の件に深

く関わって動いている証拠だった。

一部の人間、つまり当時の依頼人と須田、そして前田と当時のドラッグの売人。それ以外にあの件の真相に近いことを知っている、知ろうとする理由がある人間は居そうになかった。前田がすでに自分のところに来ていて、それ以外には三山にしか接触していないと思われる以上、吉田が情報を仕入れたのは、消去法でドラッグのルートしか考えられなかった。

飛躍した発想ではあったが、須田は今回の件のイメージをかなり作り上げることができた。

前田は吉田の後を歩いていった。吉田が向かっている先は街外れの工場地帯らしかった。普通に考えれば危険なのだが、前田は不思議と危険を感じていなかった。備えをしているからかもしれない。

「どこに向かっているのか、教えてもらいたいですね」

「あなたが今一番たどり着きたいところですよ。いや、一番会いたい人物のところでしょうか？」

憎たらしいほどの余裕を見せながら、吉田は笑った。

「あの女だったら、別に会いたくはないですよ」

前田はわざととぼけた。

「残念ですが違いますよ。彼女は別の場所に居ましてね。ああ、安全な場所ですから安心してください」

あまり信じられるものではないが、とりあえず、三島にはまだ危害が加えられていないようなので、前田は表情には出さずに安堵した。

「それなら、誰が待っているんですか？」

「着けばわかりますよ」

それから3分ほどの間、2人は黙って歩いた。そして、吉田は小規模な倉庫の前で立ち止まった。一見したところ、何の変哲もないただの2階建ての倉庫だった。

「着きましたよ。さあ、中にどうぞ」

吉田は脇によってそう言った。前田はそれを見て怪訝な顔をした。「入らないんですか？」

「私はこれから他に用があるものでしてね。あなたにもそのほうが都合がいいと思いますよ」

「お気遣いどうも」前田は吉田に蔑むような視線を向けると、倉庫を見上げた。「あんたの言う通り、大いに都合がいい」

「ご健闘をお祈りしてますよ」

吉田の嘲るような言葉を背中に受けながら、前田は倉庫のドアに手をかけた。

倉庫の中は明かりがついていないせいで薄暗かった。前田は目が慣れるまで入口から動かなかった。目が慣れてくると、頑丈なそうな2段の棚に寄りかかって立っている人影が見えてきた。

「私に用があるのはあなたでしょうね」

前田がそう言うと、人影はゆっくりと前田に近づいてきた。どうやら初老の男のようだった。前田はどこかで会ったことがあるような気がした。

「そうだ、よく来てくれた」

その声で、前田は驚きのあまり一歩踏み出して、男の顔をまじまじと見た。

「あなたは、大平さん、ですね」

「覚えていてくれたようだね、うれしいよ」

「ええ、この状況でなければ、うれしいですね」

2人はしばらくの間、互いを見ることも、言葉を交わすこともなく、ただ立ちつくしていた。前田はなんとか一歩下がって、絞り出すように声を出した。

「今回も、5年前も、あなたは関わっていたんですか。真実を、隠そうとしてたんですか」

「君の言う真実というのはわからないのだが、私が関わっていたのは間違いのないことだ」大平は前田の肩に両手を置いた。「先生は、君の父親は知らないことだ。私が独断でやったんだよ」

「それは嘘でしょ」前田は大平の手を振り払った。「自分の支援者の娘に対して、妾の息子がヒモをやってて、さらにその妾との間の実の息子がその娘と恋人気取りだったなんて、そんな外聞の悪いことを漏らしたくなかっただけでしょ」

「違う」

「違う。そもそも誰が兄を殺したんでしょうかね？」

「それはわからない」

「わからない？ そんなわけないでしょう、ドラッグの売人に決まってる。それを握りつぶしたのはあんた達だろ」

前田はかなり興奮してきていた。大平は対照的に冷静だった。

「確証は何もなかったんだよ。多くの人を守るためには、とにかく無かったことにする以外のことはできなかったんだ」

「本当のところは違うでしょ。息子の女にヒモがついてて、しかもそれが妾の連れ子なんていったら、スキャンダルとしては最高ですからね。売人を使って兄を消して、そして事件があったことは権力で握りつぶした。違いますか？」

前田の激しい言葉に、大平は何も言わなかった。

「止めても無駄ですよ、あんたがたの欺瞞もこれまでだ。何があっても、必ず全て明らかにしてみせる」

そう吐き捨てて、前田は倉庫から勢いよく出て行った。一人取り残された大平は溜息をついて、携帯を取り出した。ダイヤル音がかすかに響いた。

「残念ながら落ち着いた解決は望めそうにありません。本当に残念ですが」

一通り家捜しを終えた須田は、カーテンの隙間から外を監視していた。今回の件に関わる誰かが、確実にここに来るはずだという確信があった。

結果はすぐに出た。三島の父親と称していた男、清水裕仁が道路を渡って、このビルに向かってくるのが見えた。

そして、ノックの音が響いた。須田は黙ってドアを開けて、驚きの表情を浮かべた清水を、黙って部屋に引きずり込んだ。

「妙なところで会いますね」

須田の言葉に、清水は目を泳がせて、どう答えたものかと頭をひねっているようだった。

「余計な心配は必要ありませんよ、あなたのことはある程度わかっていますから」

「そうですね」清水は安心したようなあきらめてような様子になった。「いろいろお調べになったんでしょうね」

「ええ、あなたと三島さんが親子でないことはすぐにわかりました。三島さんは最初から私に偽名を名乗ってなかったのです」

「ええ、あの時からいずればれるとは思ってました。まさかこういう形で、またあなたと会うことになるとは思っていませんでしたが」清水は清々した表情になっていた。須田は清水に応接用のソファにすすめて、自分も向かい側に腰を下ろした。

「詳しい話を聞かせて頂けると期待してもかまいませんか？」

「ええ、わかっている範囲でお話します。でもその前に一つ確認しておきたいことがあります」

「三島さんでしたら、安全な場所に居ます。これ以上危険な目にあうことはありません」

「そうですね」清水は安堵の溜息をついた。「実はここに来たのは、彼女を預かっていると連絡を受けたからなんです」

須田はうなずいた。清水はその反応を見て、続けた。

「もうご存知でしょうが、私と彼女は親子でもなんでもありません。まあ遠い親戚なんです。それで、突然連絡があつて、どうしても力を貸して欲しいことがあると言われたんです」

「それが親子と偽って家を借りて欲しいという、ということだったんですか」

「それは頼みごとの一部でした。もちろんいきなりそんなことを頼まれても、はいそうですかとは言えません。詳しい事情を話してくれるように言いました」

誰かが鍵のかかっているドアを開けようとしている音で、清水の話は中断された。須田は立ち上がって、ドアの陰になるような場所に移動した。清水には動かないように身振りで指示をした。

鍵が鍵穴に挿し込まれて、鍵が開けられる音が部屋に響いた。須田は厚手のグローブをはめて、すぐに行動を起こせるようにしていた。

ドアが開けられて、一人の男が部屋に入ってきた。須田はすぐに行動を起こさずに、よく観察をした。男は吉田だった。吉田は部屋に三島が居ないのに気づくとドアを勢いよく閉めた。

「清水さん、なぜあなた一人なんです？」

須田はその背後でゆっくり動いて、ドアに背中を預けた。そして、おもむろに口を開いた。

「あなたのゲストは、本来居るべき場所に居ますよ」

吉田は驚きのあまり声も出ず、振り返るのがやっとだった。

「いつかのバーの事務所以来ですね、吉田さん。まあ色々あったようですが、どうですか、調子は？」

「なんでここに？」

やっとの思いで声を出した吉田は、今にも倒れそうなくらい顔色が変わっていた。とてもまともな話ができるような状態には見えなかった。それはさらに悪化することになった。

「おい、ハゲの腐れ弁護士が来たんだろ、入るぞ」

ドアをノックする音と同時に、三山の声が響いた。須田はドアから離れて、三山を迎え入れた。吉田は気の毒なくらいひどい状態になっていた。

「なあ安心しろよ、俺が興味を持つてるのは、お前みたいな雑魚の外道じゃない。親玉だよ、お前さんのボスだ」

三山は、よりひどい状態になっている吉田の肩に手を置いて、笑顔になった。

「知ってることを全部吐いたら、俺の前から消えてくれるだけでいい。簡単だし、いい条件だろ？ ああ、刑務所に行くんでもいいぜ、

そのほうが安全かもな」

「そんなんじゃ、話せるものも話せなくなるぞ」

須田はそう言って、三山の手を吉田の肩の上からどけた。そして、吉田をソファアのほうに誘導してやった。

「まあ、とにかく座って落ち着きましようか」

吉田はなんとかうなずいて、崩れるように清水の向かい側のソファアに沈み込んだ。三山はその様子を見て、軽く舌打ちをした。

「まったく、手のかかる奴だな、おとなしく三流弁護士やってればよかったのによ。話が終わるまで倒れたりするんじゃないぞ」

三山は腕を組んで、吉田を監視するようにソファアの傍らに立った。須田は清水の隣に腰を下ろして、手帳とボールペンを取り出した。

「さて、とりあえず事実の確認から始めましようか」

三山がいきなり出しゃばってきたのは須田にとっては誤算だったが、どうやら結果的には悪くなかったようだった。吉田はすっかり縮み上がったいて、今ならゴキブリにも平身低頭して何でも吐きだしそうだった。

「それではまず、吉田さんが今回の件に関わることになった本当の理由を話してもらいましょうか」

「それはその、大得意になつてくれそうなところから依頼があつたので」

「その依頼主は誰です？」

「いえ、それはちよつと勘弁してもらえませんか」

三山が吉田のソファアの背中を思い切り殴りつけた。

「この後に及んでまだそれが、お前は」

須田はそれを手で制して、吉田に穏やかに話しかけた。

「では、依頼主は置いておくとして、なぜあなたが三島さんをここに連れ込んでいたのか、教えてもらいましょう」

吉田は普通の人間なら気の毒に感じて顔を背けたくなるような様子だったが、須田と三山はそんなことには全く無頓着だった。清水だけが気の毒そうにしていた。

「あの、口封じです」

「殺すつもりだった？」

「まさか、いや私は何も知りませんよ。ただ指示された通りにしただけなんです」

「それくらい想像つくだろ、このバカが」

三山の一言に、吉田は絶句してうつむいた。

「とりあえずあなたにはその気も、そういったことになるとも考えていなかったとしましょう。さて、次の質問ですが」須田は言葉を切つて、吉田を正面から見すえた。「前田武志という人物はご存知

ですよね」

吉田は無言で首を縦に振った。

「どうやって知ったかは、まあ別にいいです。あなたがその人物に
関してどういった情報を聞かされていたか、それを教えてもらいま
しょうか」

「危険、危険でうるさい奴だと、そう聞かされてました。やらなく
てもいいことばかりやる男だと」

「なるほど。ところで、この部屋から私が5年前に関わった事件の
ファイルが見つかったんです。あの事件はごく少数の人間しか知ら
ないはずなんですが、どこから情報を手に入れたんでしょう」

「そ、それは」

須田はいきなり立ち上がると、テーブルを引っくり返した。そし
て足を外して、そこに作られていた隙間に隠されていた錠剤を取り
出して見せた。

「これの入手先と同じじゃありませんか？」

前田はとにかく歩いていった。そうしていないと頭がどうにかしてしまいそうだった。大平のことはよく知っていて、かなり信頼していた相手だったので、シヨックは大きかった。そして、当初考えていたよりも、はるかに困難なことになってきていることがわかった。そうして、どれくらい歩きまわったのかわからなかったが、いくらか落ち着いてきたところで、前田は病院に足を向けた。三島は病院に戻っているだろうが、今となつてはそれだけでは不安だった。病院に到着して受付に行つてみると、何か妙な雰囲気があった。「すいません、何かあつたんですか？」

前田の言葉に、受付の人間はうさんくさげな目を向けた。しかし、よほど色々溜め込んでいたのか、おもむろに口を開いた。

「患者が行方不明でしてね。警察関連らしくて、色んな人が来すぎてまいつてるところですよ」

「それは大変ですね。それで、その患者さんはまだ戻ってないんですか？」

「さあ、戻ってないんじゃないですか？ 少なくとも私は見てませんけど」

前田は受付から離れて、待合の椅子に腰を下ろした。あまりにもつかつな自分の対応を悔いていたが、背後から突然声をかけられた。「三島さんのお知り合いですか？」

前田が振り返ると、スーツを着た場違いな女が立っていた。

「あなたは？」

「なるほど、知り合いですね。それなら、少しあつちで話をしましょうか」

女はタバコを取り出しながら外を指した。

「ああ、それから、私は木村っていう探偵です」女は前田がついてくるのを確信しているかのように、体の向きを変えた。「先に行つ

てますから」

前田は木村の後姿を見送ってから、しばらくの間、座ったままで動かなかった。いきなり声をかけられて混乱していた。しかし、結局は立ち上がった。今この状況では、どんな情報でも欲しかった。外では木村が盛大にタバコをふかしていた。

「さて、それじゃ、あの娘とどんな関係なのか聞かせてもらえる？」

吉田はあまりにも動揺したせい、何を話すべきなのかもわからなくなっているようだった。放っておくと見苦しい弁明ばかりをいつまでも繰り返していそうだった。

須田は三山にその場をまかせて、清水を連れて事務所の外に出た。「どうやら簡単にはいきそうにありませんから、清水さんは三島さんのところに行つてあげてください」

「ええ、わかりました。場所は、どこでしょう？」

「警察署ですよ。私が連絡しておきますから、石村という刑事を呼び出してもらえれば大丈夫です」

清水は少し返事をするのを躊躇した。須田はそれを見逃さなかったが、見なかつたふりをした。

「話のわかる男ですから、何も心配はいりませんよ」

「わかりました」

清水は力強くうなずいた。

「警察署の場所はわかりますか？」

「ええ、大丈夫です」

須田は歩きだした清水の後ろ姿を見送ると、石村に電話をかけた。

「よお、何か進展はあったのか？」

「まあ、あつただけだな、なかなか難しい」

「そうか。それで、まさか用件はそれだけじゃないだろうな」

「ああ、今そつちに三島の父親だということになつた人物が向かつてる。歓迎してやつてくれ」

「それは面白いな。逃げる心配はないのか？」

「逃げるのなら、とつくにやつてははずだ。それなりの覚悟があるだろうから、うまく背中を押してやれば、いい話が聞けるだろう」

「大事なお役目、感謝するぜ。そつちも早いとこいいニュースを持つてこれるようにしろよ」

石村は皮肉っぽい調子でそう言つて電話を切ろうとした。須田はそれを遮るように口を開いた。

「いいニュースはないが、嫌なニュースならある」

「なんだ？」

「吉田がドラッグの不法所持をしている。確証はないんだが、出来心でそこらへんで買ったというわけじゃないような気がする」

「弱いな、物があるならそいつは押さえられるだろうが、そこから先はどうなるかわからんぞ」

「それがそうでもなさそうだな。詳細は不明なんだが、どうやら吉田は3年前に奥と関わりを持っていたらしい。その時は興信所止まりで、何もわからなかったようなんだが」

「なるほど、それで絞つてるわけか」石村は少しの間黙っていた。

須田には受話器の向こうでにやりと笑う石村の顔が想像できた。「それじゃ、そっちのほうは頼んだ。それより注意しろよ、黒幕をやつてる奴はどんな手段をとってくるかわかったもんじゃないからな」

「ああ、そっちも気をつけてくれ」

須田は電話を切つて、再び吉田の事務所の中に戻つていった。

事務所の中では、三山が乱雑に家捜しをしていた。吉田はうつむいて、ひたすら小さくなっていた。須田は放り投げられた書類を適当に拾い上げた。

「こんなものを漁ってどうするんだ」

ファイルキャビネットに収まっているものを漁っていた三山は、ファイルを2冊ほどわしづかみにしながら、振り返った。

「いや、この野郎が何もしゃべらないんでな。それなら部屋に聞いてみようってことだ」

須田は特に何も言わずに、三山が散らかしたものをいくつか拾い読みした。

「どれもただの通常業務の書類だな」

「そりやそうだろうよ。大事なものは隠してるんだ。そうじゃなきゃ探しがいがないもんな」

そう言いながら、三山は手に取ったファイルを放り投げた。何かを探しているというより、単純に散らかして遊んでいるようにしか見えなかった。

「あんまり散らかしてると、見つかるものも見つからなくなるぞ」

「そうなたら知ってる奴が吐きたくなるようにするまでだ」三山は吉田に笑顔を向けた。「そういうことだから、その時は頼んだぜ」

「本当に、本当に勘弁してください」吉田はいきなり立ち上がると、三山に向かって頭を下げた。そして、須田の方にも頭を下げた。「須田さん、お願いします。知ってることは話しますから。だからなんとか、穏便に済ませてください」

須田は困ったような表情を浮かながら、吉田の肩に手を置いた。

「わかりました。と言いたところなんです、あいにく状況が許してくれそうにありません。もちろん、努力はしてみますが」

「優しいことだ」三山は電話を机の上から叩き落した。「こいつは

やりすぎたんだよ。あんまり調子に乗らなきゃよかったんだけどな。ここまでやったんなら、相応の代償は払うべきだろうが」

「それは今決めることじゃない。まあ、判断できる材料がないとどうにもならないのも確かだ」

「だとさ」

三山は吉田の椅子に腰を下ろして、机の上に足を投げ出した。

「お前に選択肢なんてないんだよ。悪いことは早めに済ませたほうがいいぜ」チョコバーをポケットから取り出して一口かじった。「サツじゃ望めないような柔軟な対応とやらが期待できるかもしれないしな」

木村と前田は病院の玄関の前に並んで立っていた。木村はタバコの箱を取り出して、前田の前に差し出した。

「いえ、けっこうです」

前田に拒否されると、木村はつまらなそうな顔をしながら、タバコをくわえて火をつけた。そのまま黙ってタバコを吸い続けた。

「あの」前田はじれてマヌケな声を出した。「話があるんじゃないんですか？」

「あなたから話を聞きたいと言ったと思うんだけど。話すつもりがあつたから、ここまで来たわけでしょう？」

前田は言葉に詰まった。

「どうぞ、遠慮しないで話してください」

木村の態度の大きさに、前田は腹を立ててここから立ち去ることもできたが、それはやめておいた。相手がどれだけ知ってるかも確かめないのはまずいことだと思えた。

「ああ、最初に言っておきますけど」前田が口を開こうとすると、木村がそれを遮るように言った。「私はこの件について詳しくは知らないので、できるだけわかりやすく説明してください」

木村のとぼけた一言に、前田は心の中で舌打ちをした。

「じゃあ、どこから話しましょうか？」

「好きなところからどうぞ。わからないところがあれば、後で補足してもらいますから」

前田は木村を睨みつけた。

「そもそも、あなたに話をして何か意味があるんですかね？」

「意味があるかどうかはこちらで決めますから、心配はいりませんよ」タバコの煙が前田に吹きかけられた。「まあ、話しておくのが賢い選択でしょうね。一人で抱えるっていうのは、リスクも大きいし」

2人はしばらくの間黙っていた。木村の目的がわからない前田の判断は混乱していた。この女は何者なのか？ 探偵と自称しているということは、須田と関係があるのかもしれない。そうだったら、逆に相手がどれだけ知っているのかを探る、いい機会なのかもしれない。

「そうですね。彼女は僕の恋人で、何か事件に巻き込まれて怪我をしたというので、そのお見舞いに来たんです」

「その事件というのは？」

「よくは知りません。彼女が巻き込まれた理由もわかりませんし」

「なるほどね」木村は吸っていたタバコを地面でもみ消して、新しいタバコを取り出した。「その調子で続きもどうぞ」

須田の携帯電話が鳴った。相手を確認めると、木村だった。

「ちよつと出てくる」

「ああ、こつちは好きにやつとくから、ゆつくりしてこいよ」

「やりすぎるなよ」

須田は事務所から出て、すぐに電話にでた。

「何かあつたのか？」

「大あり。今あんたの依頼人とやらに会ってるんだけど、あれ、だ
いぶ手強いでしょ」

「ああ、手強いな」

「そういうわけだから、すぐにこつちに来てもらいたんだけど」

「こつちも今取り込み中なんだけどな。いや、もちろんすぐに行く」

「それなら上出来。まあしばらくは引き止めておくけど、できるだ
け早くお願いね。例の三島って子が入院してた病院の玄関前に居る
から」

「ああ、わかったよ」

「それと、後で詳しい話を聞かせてもらうから。いい店の予約よろ
しく」

須田は返事をせずに電話を切った。そして吉田の事務所に戻った。
三山は退屈そうに手持ちのお菓子を机の上に並べていた。吉田はま
だふるえていた。

「何だつたんださっきの電話は？」

三山は顔を上げずに言った。

「トラブルを持ち込む電話だ。ちよつと時間がかかりそうだから、
ここは任せる」

「そうか」三山は顔を上げて吉田に嫌な笑顔を向けた。「吉田君よ、
そういうことだから、2人でじっくりと語り合おうじゃないか。」
「やりすぎるなよ。話の内容にもよるが、公なことになるかもしれ

ないからな」

「わかったよ。そういうわけだから吉田君よ、後で吐くより今吐いたほうが得だぜ、やっぱり。世間様に比べたら、俺はかなりやさしいんだ」

須田は吉田を一瞥してから、無言で事務所から出て行った。三山はそれを見送ると、机に並べたお菓子の一つを手にとって、袋を開けた。

「さてと、俺を退屈させないでくれよ」

タクシーを拾ってもよかったのだが、須田はあえて歩いて病院に向かっていた。20分程度の時間ができるし、それが須田のスタイルだった。それに、木村はその程度の時間なら、楽に対象を確保しておけるはずだった。

まず大事なことは2つ。前田の行動をしつかり把握しておくこと。そして、奥を表に引きずり出すこと。そうすると余計なものまで色々出てきそうな気がしていたが、今回の件を片づけたいのなら、選択の余地はなさそうだった。

もちろんそうするためには、三島の目的と知っていること。吉田がどう関わっているのかと、その知っていることも必要不可欠なはずで、須田一人ではどうにもできそうにないのも事実だった。

しかし、前田を警察に渡したくはなかった。自由にさせておいてこそ意味がある。今まで事態を動かしてきたのは三島だったが、それを解決する鍵は前田だろうと、須田は考えていた。

そうして考え事をしているうちに、須田は病院の前に到着していた。玄関の前には何人かの喫煙者と木村がいた。木村はすぐに須田に気づいた。

「ずいぶんと優雅な到着だったみたいだけど、そんなに余裕があったの」

「むしろ余裕がなかったんだ」

木村のトゲのある言葉を、須田は無表情でかわした。

「そう。商売繁盛でけっこうなこと」木村はタバコを持った手で病院の中を指した。「あんたの依頼人なら中にいるから」

「予約はいつもの店で、来週の土曜日に2人で入れておくからな。連れてく奴を確保しといたほうがいいんじゃないか」

「ああ、今回はあんたでいいから。それより早いとこ行って、話しのタネを作ってきてもらえる？」

「そうできるといいな」須田は玄関の扉に手をかけてから振り返った。「すっきりしたシンプルな話にはなりそうにない」

木村は須田が病院の中に入っていくのを見送ると、地面でタバコをのみ消した。隣でタバコを吸っていた入院患者が携帯灰皿を差し出した。

「なんか難しいことを話してたみたいだけどよ、あれ旦那かい？」

「元ね。腐れ縁でつきあいがあるけど、まあそれだけ」

須田は病院の中に足を踏み入れると、受付と待合の椅子が見渡せるところまで移動した。前田は見当たらなかった。須田はそのまま、前田が戻ってくるのを待つことにした。

数分後、須田の考え通り前田が戻ってきて、待合の椅子に座った。須田はゆっくりと近づいていった。

「前田さん」

あまり響かない小声に、前田は最初どこから声をかけられたかわからなかったようだ。あたりを見回すと、すぐに須田に気づいた。「少し踏み込んだ話をしに来ました」

「それは楽しみですね」前田は立ち上がって、何気ない様子で体を伸ばした。「場所を変えますか？」

「それはそうですが、その前に一つお願いがあります」

「何です？」

「私はあなたが誰であるかは大体わかっています。今回の件に関わっている動機も大体わかっています。もちろんわかっていないことは山ほどあります。」

前田は無言で、特に何の反応も示さずに聞いていた。

「それは、時間をかければわかるだろうと思います。ただし、満足できる結果を得るためには、あまり時間はかけられないと、私は考えています」

「だから協力しろと、そういうことですか？ できませんね」

前田は須田に背を向けて歩き出そうとした。その肩に須田の手が置かれて、予想外の力で前田をつかんだ。

「三島さんは、おそらくあなたが相手にしている奴らに捕まっていました。しかし今は安全なところに居ます。そして、おそらくあなたの邪魔をしていた吉田という男は、身動きができない状況にしておきました。これは蛇足ですが、2回三島さんを襲った男はすでに

警察に拘束されています」

「何が言いたいんですか」

「あなたにはどうにもできなかったことです。私に依頼をしていなければ、もっと悪いことが起きていた可能性が大きかったはずですよ。その点であなたは正しい選択をしました」

須田は前田を振り向かせて、前田の肩から手を離れた。

「もう一度言います。私はあまり時間があるとは思ってはいません。そして、私にわかっていることだけでは、おそらく間に合わないでしょう。それはあなたの利害にも直結することだと思いますが、違いますか」

前田はあきらめたように目をつぶって、再び須田に背を向けると、ゆっくりと歩き出した。今度は須田も止めずに、一緒に歩き出した。「あなたの言う通り、早く動かないとダメになりそうです。相手はそれだけの力がある連中ですから」

2人は並んで病院を出た。木村の姿はすでに無かった。

「話せるだけ話します。須田さんには知っておいてもらったほうがよさそうですから」

須田と前田は電車で30分ほど乗って、隣の県の有料の公園に入場した。平日の昼間なので人も少なく、話をするには理想的な環境だった。

「確かに、いいところですね」

前田はあたりを見回しながら言った。

「ええ、内密の話をするのには最適の場所です」

そう言って、須田は近くのベンチに腰を下ろした。前田が同じベンチに座ろうとすると、須田はそれを止めた。

「あなたは座らないほうが目立ちません」

「逃げ出すかもしれませんよ？ 座っていたら追いつけないでしょう」

「そうしたいのであれば、どうぞ。もっとも、私はあなたがここまで来て逃げ出すとは思っていませんが」

「そうですね、それは考えていません」

前田は座っている須田と少し距離をとった場所に立った。須田は前田のほうを見ずに口を開いた。

「単刀直入に言いますが、あなたと三島さんと清水さんは、奥になにかしらの恨みがあると考えていいんでしょうか？」

「恨みですか、まあ間違いではないでしょうね」

「いつ頃から協力関係にあったんでしょうか」

「こつちに来てからですよ、偶然知り合ったんです」

「あちらにとってはそうでも、あなたは違うんじゃないでしょうか。永いこと、奥を追いかけていたんでしょうから」

「思い出したのなら、いまさら隠してもしょうがありませんね。そう、昔あなたが手がけた事件、兄が殺された事件の頃から追っつてますから」前田は笑顔を浮かべた。「彼女には1年くらい前から目をつけてましたよ」

「なぜ彼女に目をつけたんです？」

「奥にドラッグの倉庫代わりに使われてたんですよ。そこから抜け出したがってたので、有益な協力者になるだろうと思ひましてね」

「清水さんはどうなんでしょう」

「あの人は子供を亡くしたらいいんですが、詳しいことは知りません。直接話したことはほとんどないので」

「なるほど。三島さんから詳しいことは聞いてないわけですか」

「ええ、彼女は非常に信頼しているようでしたけどね」

須田は饒舌な前田の言葉を聞きながら、頭の中を整理していた。

この話には、どれだけの嘘が混じっているのか。それをうまく判断できるかが大事なことだった。

「なるほど。ところで、三島さんのことはどうやって知ったんでしょうか」

「それはまあ、自然とわかったことですよ。ああいったことをやれば、色々なところから恨みをかいますから」

「たしかにそうでしょうが、明確な目的を持って探さなければ見つかるものではありません。あなたの目的に適う人は三島さんだけではなかったはずですよ。その中でなぜ、彼女を選んだんですか？」

「偶然ですよ」

前田は何気ない様子で即答した。須田は特に表情を変えずに質問を続けた。

「三島さんは半年ほど前からこの街に来ていたらいいんですが、それはご存知でしたか？」

「ええ、知ってましたよ」

「こつちに来てから協力関係になったということですが、それはあなたが来てからですか？ それとも三島さん達が来てからのことですか？」

「ああ、それは私が来てからという意味で言っただけです。3ヶ月前の話です」

「接触したのはいつ頃でしょう」

「2週間くらいしてからですね」

「その時三島さんは何をしていたんでしょうか？」

須田の言葉に、前田は少し首をひねった。

「どういう意味ですか？」

「あなたが最初に私の事務所に来た時には、彼女は何かの目的、お

そらくは奥との関係を断ち切るために、死んだヒモと関係をもっていましたよね」

「そのことですか。それはあの人がこっちに来て、最初からやっていたことですよ。そもそも私が彼女のことを知ったのもそのおかげでしたね」

「そのあたりの経緯を詳しく聞かせてもらえますか」

「そんなに面白い話でもありませんよ」前田は一つ咳をした。「私はずっと奥を追っていたんですが、正直言って、あいつを捕らえるための手がかりを見つけるのは、中々うまくいかなかったんです。そんな時に彼女のことを見つけたんです」

「奥との関係があつて、そこから抜け出したがつてる人物ということですね」

「そうですね。期待できるかもしれないと思って、ずっと気にしてましたが、半年前に突然姿を消した時には驚きました。行き先を探すのは苦労しましたよ」

「それで追いついたのが3ヶ月前ですか。そして、彼女が現在やっていることを調べるのに2週間、ですね」

「その通り。彼女は大したもんですよ、この街で奥のドラッグを捌いてる男を見つけて、そこに乗り込んでいったんですから」

「三島さんは自分の持っている奥とのルートを使わないで、なぜそんなまわりくどいことをしたんでしょうか」

「彼女は末端だったんです。奥と直接の取引があるわけではなかった」

「例のヒモはもつと上のほうだったんですね」

前田はうなずいた。

「そこに食い込んで、重要な情報何かを探っていたんです」

「あなたはそこで接触したわけですね」

「ええ、目的が一致したようなので、協力することになったんです。しばらくはそれでうまくいってました」

「それが、事態が急変したということですか」

「彼女の素性がバレたような雰囲気があったんですよ。それであな
たに依頼としてこの件を持ち込んだわけです」

「なるほど。それなら、最初から教えて頂きたかったですね」須田
は立ち上がった。「とりあえずお礼は言っておきます。私もあの事
件の終わり方は不本意でしたから」

須田は前田に向かって軽く頭を下げた。

「もう一度チャンスを頂いて、ありがとうございます」

須田は前田と連絡先を交換して別れた。後をつけることも考えたが、今更やることもなかった。

それよりも問題が山積している場所に帰るために、電車に乗った。まだ電車は空いている時間だったが、須田は立ったまま頭を働かしていた。

まず街に戻ったら、吉田の事務所に戻るべきか、それとも三島と清水に会って話を聞くべきか。悩みながら電車を降りた須田だったが、電話がそれを解決してくれた。

「おい、今は平気か？」

石村からだった。

「大丈夫だ」

「お前の言ってた清水って男が来たんでな、まあその連絡なんだが。そっちはどうなってる？」

「今回の件の震源地の一つから話が聞けた。有益かどうかは、確認の必要がありそうだ」

「なるほど、こっちで預かってるお客さん2人か」

「そっちで何か聞き出せたか？」

「どの程度の話なのかは、お前の話とつき合わせてみないとわからないな。まあ、あの女は大したもんだよ、今回の件がなんとかかなりそうな気がしてきたくらいだ」

「お前がそこまで言うとは珍しいな」

「まあ面白そうな話だからな。もうちょっと証拠をかためて上に持つてけば、大喜びで食いついてくるだろうよ」

「そうになると、こちらとしてはあまり嬉しくないな」

「こっちだってそれは嬉しいかない。面倒な部分はお前のほうで先に処理しておいてもらいたいな。それで、どこからも文句が出ない部分だけこっちにまわしてくれよ」

「色々知ってそうないかただな」

「いや、知らないぜ。まあ、お前が熱心にやってることは、簡単じゃないことが多いからな。それに、今の状況で何もないと考えられるほうがどうかしてるだろうが」

「わかった。話はそっちで聞く」

須田はそう言って電話を切った。そして、すぐに三山に電話をした。

「よう、密会はどうだった？」

「これからそれを確認しにいくところだ。悪いが、そっちのほうは頼む」

「ああ、わかったよ。このクソ野郎は俺の店で接待しておく」

須田は警察署まで、珍しくタクシーを使った。到着すると、石村が手配しておいたようで、すぐに応接室まで行き着くことができた。中に入ると、三島と清水だけ椅子に座っていた。

「お手数をおかけして申し訳ありません」

須田はそう言って、いきなり頭を下げた。三島と清水は多少驚いたような様子だった。

「しかし、今回の件を解決するためには、絶対に協力していただくなくてはけません」

「顔を上げてください」三島が立ち上がって静かに言った。「協力して欲しいのは私達も一緒ですから」

須田は頭を上げて、三島の表情をよく見た。吉田の事務所での虚ろな表情は影も形もなかった。それだけでなく、今までとは雰囲気違って見えるように見えた。何が違うと言われても、答えられるものでもなかったが。

「ありがとうございます。ところで、1人見当たらないうのですが」
一瞬、三島は何を言われてるのかわからないという表情を浮かべたが、すぐに理解した。

「石村さんなら、さつき用事があると言って出て行きました」

「そうですか、まあすぐに戻るでしょう」

須田は三島に座るように身振りで示してから、その向かい側の椅子に座った。

「しばらくゆつくりしましょう、と言いたいところですが、それも退屈でしょう。せっかくの機会ですから、何か私に聞きたいことがあつたら遠慮せずにどうぞ」

三島と清水は少し顔を見合わせた。清水は無言で軽くうなずいた。三島は須田の顔を正面から見据えた。

「須田さんから見て、私はどうなんでしょうか？ うまくできてる

んでしょうか？」

「それは今回の件に関してですね？」須田は目で三島に確認してから続けた。「うまくやっているとというのはちよつと違いますが、あなたがいなければ、この件はここまで進展していなかったでしょう。社交辞令でもなんでもなく、あなたが事態を動かしてきたんです」「そうですか。でも、須田さんがいなかったら、ここにこうしていることもできなかったんですよ」

「狙われている人がいた場合、それを実行させないのが最善です。実行させてしまうのは次悪ですね、次善とも言えません。結果だけ見れば、今回はうまくいきましたが、最悪といえることがあってもおかしくはありませんでした。偶然ですよ、三島さんを助けられたのは」

「それでも、やっぱり須田さんのおかげです」

三島は深々と頭を下げた。そして頭を上げてから、微笑を浮かべた。

「私の知ってることは全てお話します」

須田は三島の目を数秒覗き込んだ。なんとも言えない間がその場を支配したが、ドアの開けられる音がそれを終わらせた。

「面子は揃ったな。それじゃ、始めよう」

「最初に言っておくことが一つ。これは公式な取調べではないので、まあ気楽にしてもらってけっこうです」

石村はできるだけ偉そうな口調でそう言った。しかし、たいして身なりがよくない、だらけた感じの石村では、威厳とはほど遠かった。

「わかったが、一体誰を連れてきたんだ？ いや、言わなくていい」
須田は笑いながら、石村の後ろの人影に声をかけた。「芸術家だな」
「そんな風に言ってくれるのは須田さんだけです」

石村の後ろにいた人影は前に出てきて、須田に笑顔を見せた。それから、三島と清水のほうに向いて頭を下げた。

「警察で絵描きをやってる山中です。よろしくお願いします」

体は大きくても繊細な雰囲気を持つ山中に、三島と清水は少し意表をつかれて、声を出さずに会釈だけを返した。石村は咳払いをして口を開いた

「この男は腕のいい似顔絵描きで、非常に役にたちます」

石村はそう言って三島に目を向けた。しかし三島は不安そうな表情を浮かべた。

「でも、思い出せるんでしょうか？」

石村が答えようとしたが、須田がそれに割り込んだ。

「似顔絵描きというのは、記憶を呼び起こす名人でもあるんです。大体的場合、自分で考えているよりも多くのことを覚えているものです」
須田は石村に鋭い視線を向けた。「似顔絵を作るほど、価値がある情報があるわけだな」

「それは、絵が完成してからのお楽しみだ」

石村は山中を手招きして、須田の隣に座らせた。山中はスケッチブックをテーブルの上に置いて、部屋をぐるっと見回した。

「記憶を正確にイメージするには、リラックスすることが必要にな

ります。部屋から出る必要はありませんが、三島さん以外の方では
きるだけ下がっててください」

椅子に座っていた須田と清水は立ち上がって、2人からできるだ
け離れた。

「それでは始めます。あなたの目の前には、2人の男が椅子に座っ
ています。まずはそれを頭の中で映像としてイメージしてください。
目を閉じたほうがやりやすいかもしれません」

三島は言われた通り目を閉じて、うなずいた。

「イメージできましたね？ 次は2人の男の年齢をイメージしまし
よう。大体でかまいません。何歳くらいでしょうか？」

「1人は老けてます。たぶん60歳は越えるてると思います。も
う1人は、40歳を過ぎてそうです」

「なるほど。どうしてそう見えたんでしょう？」

「60の人は落ち着いた雰囲気で、人が良さそうでした。体が小さ
かったので、たぶん年をとってる人なんだろうかと、そう思ったん
です。もう1人の人は、今日私を監禁した人です。頭が薄かったの
で、それくらいの年齢に見えました」

「その調子です。40のほうはすでにわかっているということなの
で、もう1人に絞りましょう」

石村は2人のやりとりを見ながら、須田に小声で耳打ちした。

「俺は立ち会ったことがないからわからないんだが、どれくらいか
かるもんなんだ？」

「人による。まあ、1時間はみといたほうがいい」

須田と石村は、1時間も立っているだけというのは無駄だということ、石村の課に移動していた。清水は気になることがあったように、部屋に残った。

「似顔絵ってあんな面倒なもんだったんだな」

「現役が知ってなくてどうする」

「そりゃそうだが、いつもは丸投げして終わりなんだよ。頼んでおくと、いつの間にかできてる。大体なんでお前は知ってるんだよ」

「私的に頼みごとをすることがある」

「ああ、副業かよ」

「違うな、あの男の本業は絵を描くことだ」

「ならなんで、こんなところに居るんだろっな？」

「一番人間を描けるのがこなんだそう。それに、聞いた情報だけで描くというのも好きらしい」

「なるほどねえ」石村はマグカップからコーヒーを一口飲んだ。「

まあ、それはそうと、どんな似顔絵ができるんだろっな。目星はつくか？」

「いや、わからないな。初老の男なんて、今まで影も形もなかった」

「そうだよな。なんなんだろっなそのクソツタレ爺は？」

「意外な大物かもしれないな」

「それなら、お前に活躍してもらわないとな。ろくに証拠もないのに動き出しちゃったら、どう引っくり返されるかわかったもんじゃない。色々しがらみのある組織っていうのは、面倒が多いんだよな」

「確かに。それくらいの覚悟はしておいたほうがいいのかもかもしれない」

石村は天井を見上げて、溜息をついた。

「めんどくせえなあ。お前みたいに1人でやってりゃ、こういふことはないんだよな」

「そうでもない。ただ、最終的な決定権が自分にあるというだけだ」
「いいじゃないかよ、その決定権とやらが、辞めなくちゃ手に入らないわけじゃないんだから」

「色々辞めたからこそ、それが手元にあるんだよ」

須田は微笑とも自虐ともとれないような顔をした。石村はそれを見て、多少気まずいような気分になった。

「そうだったな」

それだけ言った石村は、次の言葉に詰まった。須田はそれを特に気にするような様子はなかった。

「終わるまでは、まだ時間がありそうだな。ちよつと野暮用を済ませてくる」

「そうか。それなら、終わったら連絡する。すぐに戻って来られる範囲にしとけよ」

「心配するな」

須田は足早にその場をあとにした。

石村は溜まっていた事務仕事を片付けていた。あまり集中せずに、時間を気にしながらだったので、大してはかどらなかった。まだ30分程度しか経っていなかったが、応接室の様子を見に行こうと立ち上がった。しかし、携帯電話が石村を引き止めた。須田からだつた。

「どうした、何かあったのか？」

「いや、そっちの様子が気になったんだ」

「俺もそうだな、これから様子を見に行こうと思ってたところだ。それで、まさかそんなことだけで電話してきたわけじゃないよな」

「どうだろうな。ちよつと戻るのが遅くなるかもしれないから、その連絡だ」

「お前が戻らなくても、話は進めておくからな」

「ああ、そうしてくれ、できるだけ戻れるようにはするつもりだ」

須田はそれだけ言うと言話を切った。石村は何も言わずに首を振った。それを見咎めた課長が石村に声をかけた。

「どうした？ 事務仕事が嫌になったか？」

「それは昔からですよ。これは事務よりやつかいなことですよ」

「須田君の仕事絡みか。だとすると、厄介な案件なんだろうな」

「ええ、面倒くさくてしょうがないですよ。でもあいつはでかい話を持ってきたりしますからね」

「わかってるよ、うちで働いてもらいたいくらいだ」

石村はドアに向かって歩き始めながら、課長に答えた。

「こっち側の人間じゃないことが最大の価値なんじゃないですか？ あいつは今のままのほうがいいでしょうね」

答えは聞かずに廊下に出た。何も考えないようにして応接室を指して歩いた。しかし、考えることをやめることはできなかった。

三島は吉田という弁護士他に、初老の男を見たと言った。少な

くとも石村の知る範囲では、このあたりで、それくらいの年齢でドラッグに関わっている人間はいないはずだった。須田の言う通り、5年前の話せない事情とやらがある事件と関係がある可能性があった。

その事件はろくに捜査もされずに、未解決のファイルに放り込まれて、当時の担当も何も話さない。それを考えれば、警察としておっぴらに動くことは控えるべきなのはわかっていた。

須田のことは信頼していても、石村は歯がゆかった。

須田は自分の事務所に戻っていた。おとなしく似顔絵の完成を待つのが賢いやりかたと言えるかもしれないが、悠長にしている余裕はなさそうな気がしていた。

三島が言っていた、60歳くらいの男。それを前田に確認して見る必要があった。もちろん、警察に近づけるわけにはいかなかった。そのための事務所だ。

前田が到着するのには、あと30分くらいはかかるようだった。その時間でできることもある。須田は電話の受話器を取り上げた。

「はいもしもし、セールスならお断りだ」

三山がやる気がなさそうに電話に出てきた。

「売り込みじゃない」

「それはもつとお断りしたい」

三山はおおげさにうんざりしたような調子で言った。須田は特に何の反応もしなかった。

「わかったよ、何の用だ？ 例の客ならおとなしくしてるぞ」

「それとはまた別なんだが、このあたりで60を越えてて、ドラッグに関わってる人間に心当たりはあるか？」

「そんなイカレタおっさんは聞いたことないぞ。何なんだそりゃ？」

「こつちもわからない。ただ、お前の所の客なら何か知ってるかもしれない」

「あのハゲにも使い道があったんだな。そりやめでたい話だ」三山はそう言ってから、少し改まった調子になった。「お前には、心当たりはあるのか？」

「無いな」

「よく考えてみる。少しでも可能性がありそうな奴はいないのか？」
「いないということもないだろう」

「なら、そいつのことを気にしておけよ。このゴタゴタが一筋縄で

「いかないののはわかってるだろ」

「そうだな」

「いい連絡を待ってるぜ」

三山は電話を切った。須田は受話器を戻してから、天井を見上げた。とりあえず、何が起こっても動じないようにと、自分に言い聞かせた。

山中は石村がドアを開けても、全く反応せずに絵を描いていた。三島はその様子を熱心に見ていて、時折、山中の質問に答えていた。清水は特に退屈な様子を見せずに、2人を見ていた。

石村はこういう雰囲気が苦手だった。自分が能動的に動けない状態というのは実にストレスが溜まった。あえてこの状況を壊すことにした。

「まだできあがらないのか？」

「ええ、もうちょっとかかりますね」

山中は絵を描くことをやめずに答えた。石村が絵を覗き込んでみると、人物は輪郭だけで、背景ばかりが描きこまれていた。

「似顔絵を描いてるはずだよな、風景画じゃなくて」

「こうしたほうが正確に仕上がるんです、いつもやってますよ。出すぶんは顔しか書かないんで知られてないんですけど」

「なるほどね」

石村は黙って絵をじつと見た。薄暗い雰囲気、椅子やテーブル、厨房設備等が整理されて置かれているのが描かれていた。

「三島さんはどこで例の2人と会ったかはわからないんでしたね」

「はい。その時は目隠しされて車に乗せられていたので」

三島の返事に、石村はしばらくの間、首をかしげて考え込んでいた。そして、独り言のようにつぶやいた。

「この絵を見る限り、どうやら貸し倉庫か」

「でしょうね。でも、あまり詳しくは描けそうにないんで、特定は難しいと思いますよ」

「いや、倉庫だということがわかれば十分だ」石村は山中の椅子を軽く叩いた。「謎のおっさんのほうも頼んだぞ」

「了解」

返事は良かったが、結局、山中は一度も石村を見なかった。石村

には、なぜ山中が警察にいるのか、さっぱりわからなかった。そうして首をひねっている石村に、通りがかった課長が声をかけた。

「どうだ、お客さんの様子は？」

「どうでしょうね。おもしろいものが出てくるんじゃないかと思っ
てますが」

「ここまで許可してるんだ。何もなしというのは勘弁してくれよ」

「そいつは須田に言ってやってください。あいつ次第ですから」

前田はまだ来なかった。つまり、考える時間と行動する時間があった。須田は木村の事務所に電話をかけた。

「はい、木村興信所です」

「須田だが。木村は戻ってるかな」

「ええ、戻ってますよ。替わります」

しばらく保留音が鳴っていた。

「今度は何の用」

機嫌の悪そうな木村が出てきた。

「調べてもらいことがあるんだが」

「あー、はいはいわかりました。わかったけど、それなりの手続きつてもんがあるんじゃないの？」

「それはあとでやる。もちろん清算もあとでやる」

「口約束で現金前払いじゃないってのは気に入らないんだけど」

「心配ない。今までだって書類は作ってるし、しっかり払ってるだろ」

「ああそうですね、弊社としましては申し分のないお客様でございますよ」木村はあきらめたように息を吐き出した。「今回は割り増しでお願いね」

「それじゃ本題だ」

「はいはい」

「最近半年くらいの期間で、60代の人の良さそうな男が不穏な動き、具体的に言うドラッグにからむようなことがあったのか。それを調べてもらいたい」

「爺さんがドラッグ？ それはまた、ずいぶん変わった趣向だと」

「これなら雲をつかむような話でもないはずだ。急ぎで頼む」

「いや、珍しいとは思っけどね。まあ、期待しないでくれてほうが

いいんじゃないの」

「いいや、期待してる」

須田はそう言って電話を切った。受話器を置くと、ちょうどいいタイミングで電話がかかってきた。

「はい、須田探偵事務所です」

「前田です」

多少硬い感じがする前田の声に、須田は嫌な予感がした。

「どうしました？」

「すこし、都合が悪くなったので、すぐには事務所に行けなくなりました」

「そうですか。それでは、都合が良くなったら連絡をください。いつでもかまいませんから」

「ええ、その時はお願いします」

前田が電話を切ったあとも、須田はしばらくの間受話器を放さなかった。

苦しい状況なのは間違いなかったが、そんなことは珍しいことでもない。須田は受話器を静かに置くと、勢いよく立ち上がって事務所を後にした。

須田は警察署に戻ってきた。まずは応接室ではなく、石村の課に向かった。石村は自分の机から離れて、コーヒーを飲みながら室内を歩き回っていた。

「たいくつそうだな」

須田がその声をかけると、石村は機嫌の悪そうな表情で見返した。

「あいつが芸術家だって意味がよくわかったよ」

「つまり、まだ完成してないのか」

須田は声を出さずに笑った。

「わかってたんだろ、お前は」

「ああ、あてになるだろ。それで、どんな絵を描いてるんだ」

「背景をやたらと描いてる。どこかの倉庫らしいんだが、俺にはわからんね」

「倉庫か。置いてある荷物がわかれば、特定できるかもしれないな」

「なるほど、それじゃあ大いに期待して覗きに行ってみようじゃないか」

石村はコーヒークップを持ったまま、足早に応接室に向かった。

須田は急がずに、ゆっくりとその後を歩いた。

「まだできてないのか」

須田が応接室に入ると、石村のうんざりした声が聞こえた。須田は黙ったまま、山中が持っている絵を覗き込んだ。大体完成しているように見えた。

「ほとんど完成してるな」

「どこがだよ」石村は絵を指差した。「肝心の男ができてないだろうが」

石村の言う通り、かなり詳細に描かれた倉庫の情景とは対照的に、人物は相変わらず輪郭だけだった。

「いや、これだけ描けてれば、どこの倉庫かは特定できるかもしれない」

ない。何枚かコピーしてくれ」

「まあそうかもな」石村はうなずいた。「山中、ちょっと休憩だ。50枚くらいコピーをとってきてくれ」

「ええ、わかりました。」

山中は絵をひざの上に置いて、体を伸ばした。石村はふと何かを思い出して口を開いた。

「そういえば、倉庫は詳しく描けないと言っ てなかったか？」

「いや、人間の記憶っていうのは侮れないんですよ。彼女が、思っていたよりもずっとよく覚えていたんです。おかげでかなり描けましたね」

「なるほど。まあとにかくコピーを頼む」

「ええ、行つてきます」

山中は立ち上がった、のんびりと部屋から出て行った。須田は山中の座つていた椅子に腰を下ろした。

「三島さん、まだ大丈夫そうですか？」

「ええ、大丈夫です」三島は明るい笑顔を見せた。「こんなに覚えているとは思つてませんでした」

須田は穏やかな表情でうなずいた。

「とにかく今は休んで、引き続きお願いします。大変だとは思いますが」

2人ともしばらくの間、黙っていた。しばらくしてから、須田はゆつくりと立ち上がった。三島は少し慌てたような声を出した。

「あの、本当に場所がわかるんでしょうか。それに私が見た男のことも、わかるんでしょうか？」

「それは私の本業ですから、心配は要りません」

須田は軽く笑ってから、ドアノブに手をかけた。

「三島さん、今はとにかくできることをやりましょう」

すでに夕方といつていい時間になっていた。

山中からコピーを受け取った須田は、とりあえず知っている倉庫屋と運送屋をリストアップした。最近、絵に描かれているような荷物を預かっていたかどうか、まずはそれを確認することをしなければならなかった。

面倒な作業だが、1人でできる仕事なので、手と口を動かしていれば終わらせることができる。とりあえず工場地帯にある倉庫を中心に片っ端から電話をかけることにした。三島によると、男を見たのは2週間前。絵を見ると、置いてあった荷物は業務用のオーブンや冷蔵庫、イベント用だと思われるテーブルや椅子等が主要なものらしかった。

それからしばらくの間、須田は黙々と作業に没頭した。色々な物が集まる倉庫は須田のような探偵にとつては貴重な情報源だけに日頃の人脈が効いて、作業はスムーズに進んだ。

そして、倉庫は3つまで絞り込めた。須田は貰ってきた絵のコピー110部を鞆に突っ込んでから、タクシーを呼んだ。経費よりもスピードが大事な状況だった。

まず最初は、住宅地にある運送屋の倉庫だった。事務所に入るといかにもな雰囲気の前社長がいた。

「どうも、さつき電話した件なんですが」

「ああ、あれね。そこにファイル出しといたから適当に見といてくれよ」

須田は言われるがままにファイルを手にとつて、絵に描かれていた通りのものが2週間前に倉庫にあったかどうかを調べた。どうやら空振りのようだった。

社長は何か話したそうにしていたが、須田は礼を言って、待たせていたタクシーに戻った。残りの2つは工場地帯にあった。

そして、1つめが当たりだった。

「ああ、この絵はうちだね」その倉庫の専務は絵を見ながらうなずいた。「何か2週間前と、それから今日、変なおっさんが来たよ。ちよつと倉庫を貸してくれて、現金払いで」

「年齢はどれくらいでしたか」

「まあ60はいつてたな。いきなり倉庫を貸せなんて怪しいとは思ったけどさ、まあ気前のいい現金払いだったし、うちも今苦しいから」

「その男の他には誰が来たかわかりますか？」

「いや、事務所にいたからなんともなあ。2週間前も今日も、誰かと会ってるようだったけど、詮索すると言われてたし、わからないねそれは」

「そうですか」須田はそう言って立ち上がった。「あとで似顔絵を見てもらうことになると思います。もちろん専務の不利になるようなことにはしませんから、見ていただけますね？」

「ああ、いいよ」

「ご協力ありがとうございます」

須田は頭を下げてから、急いでタクシーに戻った。そして、三山のバーの名前を運転手に告げた。

須田がバーに足を踏み入れると、すぐにバーテンダーが気づいた。「いらつしやいませ。どうですか？ 一杯」

「悪いが仕事なんだ」 須田は残念そうに首を振った。「オーナーは奥かな」

「ええ、誰か連れてきたみたいですけど、正直言つと、ああいうのにこの店を使うのはやめてもらいたいんですけどね。須田さんから言つといてくださいよ」

「そのための事務所くらい借りとくように言っておくよ」

須田はそう言つて、事務所に通じるドアを開けた。最初に目に入つてきたのは、椅子に押し込められた吉田だった。三山はちょうど吉田の向かい側の壁際に立っていた。

「何か新しいネタがあるんだろ」

三山は吉田から目を離さずにそう言った。須田はうなずいて、鞆から山中の絵のコピーを取り出した。

「そりやなんだ？」

「その椅子の連中が使つてた倉庫の絵だ」

三山は須田から絵を受け取つて、しばらくの間、絵をじつと見ていた。

「特に何てことはない倉庫だな。それで、この輪郭は何者だ？」

「60くらいの男らしい。まだ誰かはわかつてない」

須田と三山は吉田に視線を向けた。

「場所はわかつてるのか？」

「ああ、工場地帯にある倉庫だ」

「だそうだ」三山は吉田に近づいていつて、絵のコピーを膝の上に放り投げた。「どうせわかることだ、さっさと吐いちまえよ」

「できません。それはできません」

「お仲間が怖いってか。お前な、どうせわかることだつて言つただ

る。吐こうが吐くまいがお前は疑われるんだよ。それなら、積極的に吐いて、保護してくださいと泣きついたほうが賢いだろう？」

「吉田さん、あなたが付き合ってた連中はかなり性質が悪いはずす。どんなに義理立てしたところで、無駄でしょうね。全てを話していただけるなら、何か手がうつるかもしれませんか」

吉田はまだ決心がつかないようで、須田と三山の顔を交互に見ていた。三山は吉田から絵のコピーを取り上げると、なんともいえない笑顔になった。

「お前がこうして連絡もとれないような状況でも、何の助けもよこさないような連中と、金にならないような人間を助けるような物好きの探偵のどっちが信頼できると思うんだ？ 実際に見たんだからよくわかってんだろ」

その後は、長い沈黙があった。吉田だけが迷いと不安で落ち着きがなかった。

前田は決心がつかなかった。須田にどれだけのことを話すべきか、そして、父親に連絡をとるべきかどうか、ということに關してだった。考えれば考えるほど、どちらの行動も取りたくなってきた。さびれた喫茶店で、時間だけが無駄に過ぎていった。

あてもなかったが立ち上がろうとした。しかし、後ろから肩に手を置かれて、立ち上がれないように強く押さえつけられた。そのまま無言で、その人間は前田の向かい側にまわった。

「はじめまして、というべきか」

若そうに見える地味な男だった。前田は男の顔をよく見てみたが、見たことのない顔だった。前の筋肉男のような使い走りだろうか、そう思った。

「まあ、こつちからすればあんたはおなじみの相手なんだがね。なにしろ5年前から俺のことを嗅ぎまわってるわけだから」

前田は頭に血が昇っていくと同時に、全身から血の気が引いていくような、なんとも言えない感覚に襲われた。今、目の前にいる男は、自分がずっと追っていた人間かもしれない。そう思うと、興奮してもいいような気がしたが、実際のところは、何をすればいいのかわからないだけだった。

「俺は、いや。まあ、その様子だと言わなくてもわかってそうだな。当ててみな」

男はそう言うってから、店員を呼んでホットミルクを注文した。前田はまだ黙っていた。

「どうした、遠慮なく言ってみたらどうだ？ 別にはずしたって、なんてことはない」

それでも前田は黙っていた。ホットミルクが運ばれてきて、男はそれをうまそうに飲んだ。前田はやっとのことで口を開いた。

「あんたの口から聞きたい」

男はうなずいて、ポケットから名刺入れを取り出した。そして、一枚名刺を抜き出すと、前田の前に放り投げた。名刺には、ただ”奥”という名前と、連絡先の携帯番号とメールアドレスが書かれていた。

「それじゃ、次は目的だ。わかるか？」

前田は黙って首を振った。

「そうかい」奥はにやりと笑って、ホットミルクを一気に飲み干した。「簡単なことだ。あんたは俺の提案した通りに動く。そして、俺はあんたにベターな結末を用意してやる。欲を出さなきゃそれなりに満足できる、お互いにだ」

「知りたいのは5年前の事件の真実だ。それができるなら、考えてもいい」

「オーケー、賢い判断だ。条件さえ飲めば、教えてやるよ」

前田は唾を飲み込んで、奥を正面から見すえた。奥は全く動揺していないように見えたが、前田は体の震えを止めることができなかった。

「条件を教えてくれ」

吉田はなかなか口を割らなかった。しかし、三山も須田も、表面上はいらついた様子はなかった。

「意外とねばるな、立派なもんだ」

三山はからかうような調子ではなく、比較的眞面目にそう言った。須田も無表情だがうなずいた。

「ただ吐けつてのもよくないよな。今からいくつか大事な話をしてやるから、よく聞けよ」

三山の言葉に、吉田はぼんやりと顔を上げた。

「俺だって鬼じゃない。お前が自発的に吐けば、それなりの配慮はしてやるつもりだ。そうだな、例えば、これからこの街で商売ができるように配慮してやるよ」

「あなたが許せば、なんだってできるっていうんですか」

吉田はそう言って嘲ろうとしたのかもしれないが、うまく表情を作れなかった。三山は特にそれを気にすることはなかった。

「違うな。お前さんは善意の一般市民になるだけさ。サツにしてみれば、重要なのはどつかの小者弁護士なんかじゃない。話題になりそうな大物だ」

「その通りです」須田は三山の言葉に同意した。「警察は小手先のことで終わるのなら、むしろ動きません。つまり、一見黙っていればいいような状況に見えますが、今回は明らかに違います。時間の問題で、警察は重要な情報をつかむでしょう」

「それで、成果の大きそうなことっていうのは、黙っているのは難しいわな。新聞やらなんやらがにぎやかになりそうだ」

「そして、時間こそが問題になります。早く動ければ、それだけ解決できる可能性も高くなりますが、もし始動が遅れば、黒幕であろう人間の性質を考えると、それだけ解決の可能性は低くなります」須田は吉田の顔をじつと凝視した。「拳は振り上げられています」

そうだった以上は、とにかくどこかに振り下ろさなければいけません。しかし、振り下ろす相手がいなかったら、その腕はどこにいくでしょうか？」

黙りこむ吉田の代わりに、三山が笑いながら答えた。

「面白みと話題性がある人間だな。例えば、弁護士とか」

「十分に考えられることです。黒なのは明白で、一般的には警察が成功したと思われることでしょう。実際のターゲットは逃しているとしても」

吉田はまだ黙っていた。三山は吉田の肩に手を置いた。

「これだけ言ってもわからないか？ それならはつきり言ってる。このまま黙ってれば、お前は誰にとっても都合のいい生贄だ。警察はそれなりの成果を手に行けるし、お前のバックのクソツタレは、とりあえず逃げる事ができる」三山は吉田の肩をグツと押した。

「それで、お前はどなる？ 商売はできなくなるぞ、もつと悪いことに刑務所行きは確定だ。出てきたところで、今のお仲間が助けてくれないぜ、とっくにお前のことは切ってるんだからな」

吉田はうつむいて考え込んでいた。数分後、意を決したように頭を上げると、小さいが力強い声を発した。

「書くものをください」

「まず、はっきりさせておこう。あんたには自分がどうするか、選択する権利がある。ただし、その結果はあんたが引き受けるもんだ、わかるよな？」

前田は黙ってうなずいた。

「上出来だ。でもな、一つ例外がある。あんたが俺の言う通りの行動をした場合は、それなりの結果を約束してやってもいい」

「それだけのことができるという保証が、どこにあると？」

「そりゃ不思議だよな」奥は軽く笑った。「でもな、あんたなら知ってるんじゃないか？」

前田は体を硬くした。奥はそれを見て、声を低くして続けた。

「わかるな」奥は前田のことはほとんど見ずに、話を続けた。「あんと俺は同じ結果のために行動することになる」

前田は一瞬迷うような様子を見せたが、すぐに奥をしつかりと見すえた。

「ああ、信頼はできないが、他に選択の余地もなさそうだ」

奥は当然といった顔で、前田の言葉にうなずいた。

「それじゃ、本題に入るとしよう。まずはこれからの行動だが、とりあえず警察の連中に目をつけられないようにしろ。逃げ回る必要はないがな、特別に注意を引く必要もない。手遅れじゃないよな？」

「それは大丈夫なはずだ。今のところ警察からの接触はない」

「上出来だ。次はあんたがやるべきことだが、これは簡単だ」

「証拠になりそうなドラッグを回収しろとでも？」

前田の一言に、奥は大笑いした。

「そんなもんは欲しがってる奴にくれてやればいい。こつちにはいくらでも在庫があるし、販路だって簡単に作れる」

「それで、何なんだ？」

「あんたの雇ってる探偵に、これから話すことを聞かせてやればいい

「い」

「つまらない嘘ならお断りだ」

「いいや、ほとんど本当の話だ。クソ探偵野郎にやる気があるなら、これで事件を終わらせたくないぜ」

「面白そうな話だな。聞かせてもらおうじゃないか」

須田は驚きを顔に出すのを押さえながら、吉田のメモを読んでいた。考えていたよりも、ずっと悪い事態だというのが嫌になるほどよくわかった。三山は須田の後ろからメモを覗き込んで、楽しそうにしていた。

「お前、その大平ってのは知ってるんだろ」

「ああ、以前は色々世話になった」

「何かわけありか？」

「そうだな。わけありだろうな」

「それじゃあ、しばらく席を外させてもらうぜ。じっくり考えるよ」

三山は吉田を連れて事務所から出て行った。一人残された須田は、吉田のメモを持って、事務所の中を落ち着きなく歩き回り始めた。

吉田のメモに書かれていることをもう一度よく読んだ。

まず、吉田が今回の件に関わるようになったのは、前田が須田に依頼を持ち込む少し前。大平が吉田に接触したのが最初だったということだった。なぜ大平が接触したのかはわからないが、おそらく吉田が清廉潔白な弁護士ではなかったからだろう。

大平が関わっているというのも重大な事実だったが、もっと大事なのはその後の流れだった。まずは、あの三島を狙った筋肉男は大平の依頼を受けた吉田が紹介して、指示は大平が出していた、ということだった。三島が2回襲われたのも、須田の前に筋肉男が姿を現したのも、大平からの指示だったということだった。

仮にその通りだとして、そこまでして大平は何を守りたかったのか？ メモには書かれていないが、須田の脳裏には一つの考えが浮かんだ。5年前のあの事件と、今回の件はつながっていて、あの名士にとって重大なことが隠されているのかもしれない。だとすると、大平が守りたいものは、名士という偶像を支えるための偽りなのだろう。

ドラッグは資金源としてか、それとも人脈のために使われたのか、あるいはその両方かはわからなかったが、どちらにせよ、おおっぴらにするわけにはいかないものであるのは間違いないかった。

だからといって、殺しまでするのだろうか？ 明らかに三島は命を狙われていた。あのヒモの男も他殺の可能性がある。しかし、それを大平と結びつけるということは、可能性が低いことのように思えた。そこまで馬鹿である可能性は少ない。

しかし、奥とつながっているなら、そうとも言い切れない。もし、奥を利用してあるつもりだったのが、逆に利用されるようになってしまっていたとしたら？ ああいうのと関係が一度でもできると、なかなか切れなくなるものだ。

大平が筋肉男に指示を出していたというのは表向きのこと、実際は奥が大平をコントロールして、一連の事をさせていたのかもしれない。

須田はそこまで考えてから、メモを胸のポケットに突っ込んで事務所のドアに手をかけた。とにかく、動かなければどうにもならない。

須田は再び警察署に戻っていた。そろそろ山中の絵が完成していてもよさそうだった。応接室に入ると、石村と山中の姿はなく、三島と清水だけがいた。

「例の絵はもう完成しましたか」

須田がその声をかけると、三島は須田に顔を向けた。すっきりしたような笑顔だった。

「はい、これから仕上げだそうです。別室で仕上げると言っていました」

「そうですか。私はちよつと様子を見て来ますので、すみませんが、三島さんと清水さんはもう少し待っていてください」

「わかりました」

須田はその一言を聞いて部屋から出て行こうとした。

「須田さん、今は待つのが苦痛じゃないんです。だから、大丈夫です」

三島の言葉に、須田は振り返ってうなずいてから部屋を出た。三島ほど明るい展望を持っていない須田は、自然と早足になっていた。山中は予想通り資料室にいた。本来は資料を閲覧するための机を占領して作業をしていた。須田が口を開く前に、山中は振り返った。「もうすぐ完成です。なかなかいい絵になりそうですよ」

「そうか。まあ、さっきの状態でも役に立ったよ。どこの倉庫かは特定できた」

「そうですか。三島さんでしたっけ？ 彼女はすごいですね。ここまで描かせてくれるなんて、ホントうれしいですよ」

「それは、こちらとしても助かる。まあ、満足のいくように仕上げてくれ」

山中はにやりと笑った。

「さすがに須田さんはわかってますね」

須田も軽く笑って、山中の肩を叩いてから資料室を出た。しかし、すぐに立ち止まると、何かを考え込むように正面の壁をじっと睨みつけた。

芸術家肌の山中が満足できるほどの絵を描かせる三島という女は何者なのだろうか？

前田は悩んでいた。奥の話はそれだけインパクトがあった。その話は、大平に全ての罪を負わせるような内容だった。

しかし、それだけでは、完全には満足できそうになかった。奥が無事だからではない。さっき、父親に連絡をしなかったのが正解だったからだ。

十分予想はついたことだが、信じなくなかったので考えようとしなかったこと。けっきょく、5年前の事件がうやむやになったのは、奥によると、前田の父親がドラッグに関わっていたから、ということだった。

建前としては、前田とその母親を守るため。しかし実態は、ドラッグに関わっていた前田の兄の死の真相を葬り、その兄と、支援者の娘の関係を警察や世間の目の届かないように隠し、支援者の面子を守った。つまり、自分の名士としての評判を守っただけだった。しかし、本当にそれだけだったのか？

奥は悩んでいる前田の様子を、喫茶店の外から眺めていた。特に愉快でもなんでもない眺めだった。ああいった奴は脅威にはならない。奥はそう思いながら、携帯電話を取り出した。

「よお、じいさん。今、噂の青年とやらに会ったぜ」

「勝手なことをしてもらっては困る」

大平は極めて不機嫌そうだった。

「そうかい？ あんたがやったことに比べれば、大したこともない。俺の言うことを聞いたのは、あんたが事前にあいごとご対面してたからだ。それにな、混乱してる奴は都合がいいもんだ」

「誰にとつてだね？」

「誰にとつてもだ」

大平と奥はしばらくの間、無言になった。先に口を開いたのは大平だった。

「私のことは別にいい。とにかく、先生を守るんだ」

「ああ、わかったよ」奥は一方的に電話を切った。「都合がよけりや、考えてやってもいいぜ」

石村は浮かない表情で、ブラックの缶コーヒーを須田に放り投げた。

「どいつもこいつも、仕事ってのがわかってんのかね」

須田は缶コーヒーを受け取って、一口飲んでから顔を上げた。

「そもそも仕事として関わってない人間のほうが多いな」

「そうかもしれないけどな。どいつもこいつも好き勝手にやってるようにしか見えないんだよ」

「それをどうにかしようとしてるんだろ」

「ああ、そうだ。でもな、現実には俺は派手に動くことはできない。つまり仕事になってないわけだ」

「私的なスタントプレイだな」

「不本意ながらな」石村は缶コーヒーを飲んで顔をしかめた。「それをどうにかすれば、得する奴だって多いはずだろ」

「損する人間のほうが多いんだろ」

須田は軽く言ったが、石村は暗い表情になった。

「ああ、そうなんだろうな。うんざりするぜ、まったく。こんなことで手をだせないなんてイライラする」

「それはわかるが、先走るのはやめてくれよ。せつかくここまで出てきてくれるんだから、今公的な連中がでしゃばるのはまずい。」

引きずり出すまで、もう少し待つ必要があるだろうな」

「わかってる、わかってるよ。お前の言う通りだ。だからさっさとこっちが動けるようにしてくれ」石村は壁の時計を見た。「こんな時間だ、そろそろ絵だって完成してるだろ」

「それだけで、解決までは行かないだろうな」

「それでも、近づきはするだろ。いいから働けよ」

「そうだな」

須田はコーヒーを飲み干して、空き缶を石村に手渡した。立ち上

がってドアノブを握ってから振り返った。
「鍵は三島だ。何者か調べなきゃならない」

須田は山中が完成させた絵のコピーを持って、三島と清水と一緒にタクシーに乗っていた。さすがに警察にずっと置いておくわけにもいかなかった。

「最近是不景気で参りますよねえ。お客さん、ご商売は何をなさってるんです？」

「コンサルタントですよ」

タクシーの運転手の話に適当に話を合わせながら、助手席に座った須田は夜の街を眺めていた。同乗している2人は、須田の親戚の親子ということにしてある。

「景気はどうです？」

「いいとは言えませんが」

「まあ、客商売なんてどこもそうですよね」

その通り。だが、仕事があればあったで、苦しいこともある。そう思いながら、須田は後部座席の2人を見た。商売と頭痛の種の2人は、特に何かを話すわけでもなく、静かに座っていた。

今この状況で話を聞くわけにもいかず、かと言って、今向かっているホテルでのんびりと聞くといい気分もなかった。

客観的に見て、すでに十分後手を踏んでいる状況で焦りがあるのは事実だが、それ以上に、三島の話を聞いても、おそらく事態の解決には役に立たない。個人的な動機やいきさつを聞いたところで、それが今、役に立つとは考えられなかった。

もちろん今回の件の全貌を明らかにする、ということであれば重要なはずだが、それは後でやるべきことだし、自己満足に過ぎないことだった。さし当たって、今の仕事には必要ない。

そうして、とりとめのない考え事をしているうちに、タクシーはホテルに到着した。この街では一番高級なホテルで、須田の得意先でもあった。多少の無理はいつでも聞いてくれる。

例えば、わけありの人間を事情を聞かずに泊めてくれるという
とだ。

2人をホテルに置いてきた須田は、木村の事務所に電話をかけた。

「はい、木村興信所です」

「お仕事ご苦労様だな」

「おかげさまで。それで、また厄介ごとを追加してくれるわけ？」

「大したことじゃない。ただの張り込みだ」

木村はあからさまに溜息をついた。

「今誰もいないんだけど、これがどういうことかわかる？」

「商売繁盛だろ。けっこうなことじゃないか」

「正解。それなら、そういうときに面倒なだけの電話がきたらどう思つかもわかると思うんだけど」

「面倒だけってこともない。今回の件には、裏では警察もご執心だ」

「だから警察にいい顔ができてるわけ？」

「俺からだってちゃんと支払いはするさ。おまけもつけてるだろ」

「会社の利益にはならないおまけだけだ」

「経営者のためになつてれば、会社にもいい影響はあるんじゃないか」

「ためになつてれば、ね」

須田と木村はしばらくの間、黙っていた。先に口を開いたのは須田だった。

「まあ部外者にはわからないことだな」

「部外者どころか誰もわかってないと思うけど」木村はあきらめたように声の調子を変えた。「それじゃ、内容を聞かせてもらいましょうか」

「簡単なことだ。ホテルに泊まつてる2人に張り付いてくれればそれでいい。ここらで一番のホテルだ」

「それはまた楽しそうな仕事なこと」

「警察に頼むわけにもいかないからな」

「その上、孤高の探偵様は他のことで忙しいと」

「色々な人間の努力を無駄にしないためだ。残念だが、現状でまともに動けるのは、その孤高の探偵様だけなんだよ」

「その探偵様の働きは、当然支払いにもいい影響を及ぼすわけね」
「たぶんな」

「たぶん？ いや、おおいに期待しておくところにするから」

「それじゃ、ホテルのほうは頼む。話は通しておく」

「はいはい。せいぜいうまくやってね」

須田は電話を切った。まずここは大丈夫。

須田は次に三山の店に電話をいれてからからタクシーを拾った。

三山はちよつと前に店に戻って来ているとのことだった。

タクシーから見ると、どうということはない。田舎にも都会になれない、中途半端なところだった。何の価値もないような、どこにでもあるような街。

だが、須田にとっては、今この街でこの件を扱えるというのが重要なことだった。一応ホームと言って、色々な協力も得られる。以前に比べれば、格段に状況は明るかった。

そうしてとりとめのない考え事をしていくうちに、タクシーは目的の場所に到着していた。店内に入ると、それなりに繁盛しているようで、店内はにぎやかだった。須田はバーテンダーに軽く手を上げてから、事務所に続くドアを開けた。

三山は机に向かいながら眠そうにしていた。須田が入ってきたのを見ると、多少目が覚めたような顔をした。

「お前か。何か進展はあったのか？」

「進展があるのはこれからだ。今はその準備だな」

「なるほどな。先に言っとくが、吉田は自宅に帰したぜ。今更逃げようって気力もないだろうからな」

「そうか。それなら安心だな」

「ああ、そうだ。一応人も付けといたからな、狙われてたとしても何とかなるだろ」

三山はそう言って、机の上に脚を投げ出した。須田は黙って山中の絵のコピーを差し出した。

「完成したのか」

三山はそう言って絵を受け取る、しばらくの間、絵をじっと見た。「こりゃいい絵だ。これで解決しないんなら驚きだな」

「吉田にも見せといてくれ。背中を押すのには役に立つはずだ」

「このおっさんが吉田が書いてた大平って奴か」

「そうだ」

「そしてこのおっさんは鍵を握る人物、というわけだ。この絵の倉庫の場所もわかってる、このおっさんも誰だかわかってる。なかなかいい兆候じゃないか、ええ？」

「つめを誤らなければな」

「まあそうだな、だからこそお前がこうして駆けずりまわってるわけだ。ヘマはするなよ、葬儀屋と坊さんを喜ばしてやる必要はないからな」

「肝に銘じておくさ」

前田は悩むのをやめた。奥に協力して、知ることを知ったら奴を捨てる。そう決意して喫茶店を出た。

しかし、その決意はすぐに揺らぐことになった。

「前田君、少し話したいことがある」

おそらく前田を待ち構えていた大平が声をかけてきた。

「今更、何ですか」

「君は全てを明らかにして見せると言ったが、今でもその気持ちに変わりはないかな？」

前田は少し言葉に詰まった。大平はそれに気づかず続けた。

「もし、そうなら、言っておきたいことがある」

大平は前田の目を覗き込んで深呼吸をした。

「私はね、もうこんなことは終わらせてもいいと思ってる部分もあるんだ」

「どういことですか？」

「言葉通りの意味とってくれればいい。昔の繰り返しにはしたくないということだよ」

「つまり、今回はうやむやにしないで決着をつけるわけですか」

「そうだ。しかし、先生は守る。それだけでできればいい」

「虫がいい話ですね」

前田の皮肉に大平は首を横に振った。

「そんなことはない」

「なにがそんなことはないんですか！」前田は大平の胸元をつかんで声を荒げた。「守るっていうのは、前みたいに都合のいいところだけ切り捨てて奥みたいなのを野放しにするってことでしょう！それが繰り返しじゃなくてなんだって言うんですか！」

人通りの少ない道では、二人に注目する者はいなかった。大平は前田の手をゆつくりと自分の胸元からどけさせて、一歩下がった。

「私が生贄になればいい。先生に被害がないわけじゃないが、それほどのことじゃない」

「つまり、太平さん。あなたがそうしなければ、親父は無実のような顔はしてられないわけですね？」

須田は吉田の自宅に向かっていた。吉田からはまだ聞き出すべきことがあるように思えた。吉田の住むマンションの前に到着すると、見覚えのある車が止まっていた。須田は車に近づいていつて、窓をノックした。

「何か変わったことはあったかい」

窓が開いて、三山のところで色々な雑用をやっている若い男が顔を出した。

「どうも須田さん。こっちは特に変わったことはありませんよ」

「好都合だ。あまり長い間は続かないことだろうから、辛抱してくれ」

「ええ、わかってますよ。うちのボスからもたつぷり釘を刺されたんで」

「それなら安心だ」

須田は笑みを浮かべて、一步下がった。

「今度は何をしてるんです？ 面白いことなら教えてくださいよ」
「いつになるかはわからないな。まあ、そのうち話せるはずだ」

須田は手を振りながら、マンションの玄関に向かった。吉田の自宅は5階だったが、須田は階段を使った。部屋の前に着くと、一呼吸おいてからドアホンを押した。

「はい」

少し震えた声の吉田がでた。

「須田です。少しお話したことがあるので、開けてもらえますか」
ドアホンが切れる音がしてから、1分ほどで鍵が開けられる音がした。ひどく憔悴した表情の吉田が顔を出した。

「どうぞ、入ってください」

須田は黙って部屋に入った。室内はよく整理されていてすっきりとしていた。居間にはせいぜい2人ぶんくらいの広さの背の低いテ

ーブルがあつた。吉田は黙つて来客用と思われる椅子を引つ張つてきた。

「狭くてすみません」

「よく整理されて、いい部屋じゃありませんか」

須田はそう言いながら椅子に腰を下ろした。

「それで、ご用件は」

吉田は須田の言葉を無視して、精一杯強がつているように見えた。「たいしたことではありませんよ」須田は絵を取り出して、テーブルの上に置いた。「絵が完成したので、見ていただきたいだけです」吉田は絵をみてから沈黙した。数分経つた後、吉田は立ち上がった、奥の部屋に行った。そして、戻ってきた吉田の手には一枚の紙が握られていた。それを黙つて須田に差し出した。

「これは？」

その紙には携帯電話の番号らしきものがかかれていた。

「連絡先として教えられていた電話番号です。今、できることはそれだけです」

そう言つた吉田は、疲れた表情で首を振ってから椅子に沈み込んだ。須田はその紙をポケットにしまつてから立ち上がった。

「ご協力、感謝します」

まさか吉田から受け取った電話番号がまだ使えるとは思っていなかった。そして、公衆電話からの着信に大平がでてくるというのは、もつと予想できないことだった。

「こういうかたちでまた話をすることになるのは、残念です」

「私もそう思うよ。まさか君から電話が入るとは思っていなかった」

「同感ですね。私も大平さんにこうして電話をすることになるとは思っていませんでした」

電話越しだが、睨み合いのような沈黙があった。

「君に言うことがあるとすれば、手を引いてもらいたい、ということだけだよ」

「それは残念です。今更手を引くというのは考えられません。それなりに労力をかけてますから」

「そうか」大平は何か考え込んで、少し間が空いた。「それなら君は敵だな」

「それなら、どうしますか？ 私としては、必ずしも敵だとは思っていませんが」

「そう言ってくれるのは嬉しいことだがね、たぶん無理だろう」

大平のため息には、演技ではない残念だという感情が表れているように聞こえた。須田はそれを信じなかった。

「協力していただけない、ということですね」

「残念だが、その通りだ」

電話はそこで切れた。須田はすぐに石村に電話をかけた。

「どうした、進展があったのか？」

須田は石村の携帯番号と、話をしていた時間を石村に告げた。

「場所が知りたい。この情報があれば、それなりに絞り込めるだろう」

「そうだな、刑事が個人的にやるスタンドプレイだが。いいぜ、やつておく」

「頼む。お膳立てはしつかりやってるつもりだ」

「ああ、俺のボスにも楽しいことがあるって言うておくよ」石村は少し改まった調子になった。「わかってるだろうが、くれぐれも気をつけるよ。甘い相手じゃないんだからな」

「ああ、わかってる。まあ、あちらさんもこっちが甘い相手じゃないとわかっててくれてるだろう」

「その期待には答えたいもんだな。ああいった連中をのさばらせておくのは、こっちとしてもちよつと都合が悪い。本当に頼むぜ」
「できるだけのことにはやるさ」

前田には悩みが生まれていた。大平には威勢のいいことを言ったが、どうすればいいのかわからなかった。ずっとこんな状況が続いてることに、苛立ちもつのつていった。

いっそのこと、あの探偵が警察にでも全部ぶちまけたい。そういう考えも頭をよぎったが、なんとかこらえた。これは俺の復讐なんだと、自分に言い聞かせた。

そのために必要なことはなにか？ 奥と大平は、もうすぐ決着がつくようなことを言っていた。つまり、それを阻止できれば、連中の思い通りにはならないはずだと、前田はそう考えた。

もし、須田という探偵に奥に教えられた通りの嘘を言ったらどうなるだろうか？ おそらくあの探偵は納得もあきらめもしないだろう。ここまで入れ込んでるような変わり者なら当然そうなる。

動こうにも、どうしようもなかった。

一方奥は、そんな前田とは対照的だった。今はまだ自分のところまでは手が伸びてきていない。うまくやれば何も傷つけずに丸くおさめられるだろう。生贄を差し出すことができれば。

奥は5階建ての雑居ビルの中に入っていた。3階まで階段を上がると、明かりのついてる部屋のドアを軽くノックした。

「俺だ」

ドアが少し開けられ、中の男は奥の顔を確認してから、奥を室内に迎え入れた。室内は綺麗に整理された普通の小規模な事務所にか見えなかった。奥を迎えた男も、ごく普通のサラリーマンにしか見えなかった。

奥は適当な椅子を引っ張って腰を下ろした。サラリーマン風の男も、黙ってそれにならった。

「何か動きはあったか？」

「いくつかあります。すでにご存知なことも多いと思いますが」

奥は自分の顔の前で軽く手を振った。

「とりあえず全部聞かせろ」

男はデスクの上のファイルを手にとって開いた。

「例の探偵ですが、今日はかなり動きまわっていたようです。用心深い男で、あまり足取りはつかめてません。ただ、あの前田という男と接触しました。隣の街の公園に行ったようですが、そこで何があったのかはわかりません。その後は吉田の事務所に行ったようです」

「やってくれるな。それで？」

「そこから三島を別の場所に移して、吉田を拘束したようです。警察には引き渡していません。ただ、その後は警察署に何回か出入りしています」

「警察から出てどこに行つてたんだ？」

「すみません。かなり尾行しにくかったので、詳しくはわかりません。工場の多い地域に行っていたようですが」

「なるほど」奥はにやりと笑った。「奴が何をしていたかは大体わかった。それで、その後は」

「三島と清水の2人をホテルに送っていたようです。それ以降の足取りはつかめていません」

「手強いじゃないか」

奥は立ち上がった、ゆっくりと歩き回った。立ち止まり、おもむろにデスクの上の置き時計を手にとって、思いきり壁に投げつけた。「イライラさせてくれるな」

須田はいよいよ面倒なことに取り組み始めた。本当にこの件を決するには、大平を生贄にするようなことは避けなければならない。その背後にいる人間、おそらく奥、を引きずりだすことこそが重要なことだ。

そのためには、丁寧にその連中のつながりをたどっていかなければならない。拙速に大平に手を出すようなことをしてはいけない。大平は貴重な案内人にもなる。

ただし、大平の身に危険が及ぶようなことは避けなければならぬ。そのためにもいつでも行動を把握しておく必要があったが、これは石村頼みだ。三島や清水の安全は木村に任せてある。吉田は三山が見ているから心配はない。

残る問題は前田だった。居所はわからない、どこまで知っているのかわからない、どう行動しているのかわからない。わかっているのは身元と動機だが、今の段階では役に立たない。

須田はあきらめと焦りを押さえ込んで、事務所に戻ることにした。前田とコンタクトができる可能性が一番高いのはそこだった。須田は早速で事務所に向かった。

須田が事務所の前に到着すると、そこには意外な人物が立っていた。

「前田さん。どうしました、こんな時間に」

「どうしても、解決できない問題があるんです」前田はそこではらくうつむいてから、ゆっくりと顔を上げた。「アドバイスをもらえますか？」

「わかりました」

須田はドアの鍵を開けて、前田を先に部屋に入れた。室内に入った前田は、落ち着きなく、あたりを見回した。

須田はそれを気にする様子は見せず、前田に椅子を勧めた。前田

はとりあえず腰を下ろした。須田は自分の椅子に座らず、机に寄りかかって前田の様子をじっと観察した。

「それで、どんなアドバイスを求めようか」

「そうですね」

前田はそこで言葉につまった。何を言うべきか？ 混乱した。

「例えば、ドラッグの売人への対処法でしょうか」

須田は前田の顔をじっと見た。前田はかたい表情でうつむいた。

「いいですか。あなたがこの件を解決したいと思っているのなら、間違いなく協力する人間が必要です」

前田は須田の言葉になんとか笑みを浮かべて反論のために口を開いた。

「なんで協力者がいないと思うんです？」

「そうではありません。もちろんあなたにも協力する人間はいたでしょう。例えば、三島さんです。しかし、それだけではどうにもならないと思ったから、こうして私のところに来たのでしょうか」

前田はうつむいて何も言わなかった。須田はそれにはかまわなかった。机の上に無造作に置いてある紙を手にとって、それを前田の目の前に差し出した。

「あなたに出した見積書です」それには軽い気持ちでは払えないような金額が記載されていた。「安くはありませんし、すでに一部は前金として頂いてます。飛び込みで、なんとなく払うようなものではない」

「金の使いみちに困ってる、ただの資産家かもしれませんよ」

「道楽なら、あなたは今ここに来ているはずがない。どこかでふんぞり返って報告書を待ってればいい。だが、あなたはここにいる」

須田は見積書を机の上に戻した。そして、机に寄りかかるのをやめて、自分の椅子に腰を下ろした。

「私にどうしても言いたいことがあったのでしょうか。どうぞ、何を話すかはあなたが決めることです」

前田は観念した。しかし、覚悟を決めたのではなかった。それだけに、まだ迷いがあった。

「最初に確認させてください」須田は黙ってうなずいた。「依頼人の利益は守ってくれますよね？」

「社会的に極端に逸脱したものでなければ、可能な限り守ります」

前田はしばらくの間黙って、須田の表情を慎重に観察した。しかし、須田は感情も何もない表情で前田のことを見ているだけで、何も読み取ることができなかった。

「知らせておきたいことがあります」

「あなたが追っている連中が使っている倉庫のことでしょうか」

前田が口を開くと、間髪入れずに須田がそれをさえぎった。前田は驚愕の表情で凍りついた。

「それならすでにわかっています。残念ですが、現状ではそれほど役に立つものでもありません」

「さすがに、プロですね」

須田は相変わらず感情のない表情で、前田の顔をじっと見た。そして、おもむろに口を開いた。

「誰があなたに、そう言わせようとしたんですか」

「なんのことでしょうか？」

「とぼけるのは、そろそろやめにしてはいかがでしょうか。必要なのは駆け引きではありません、あなたの、協力です。全てを話せとは言いません、このことだけでも話してください」

二人はしばらくの間、無言で向かい合っていた。そして、前田が耐えられなくなった。

「わかりました」前田はがつくりと肩を落としてうつむいた。「倉庫の話はある人物、いや、今更隠す必要もないですね。奥から聞いた話です。あなたに教えてやれって言うてましたよ」

「なるほど」須田は腕を組んで天井を見上げた。「そのルートでは、根っこまでたどりつけないわけですか」

「そう、偽者をつかまされるだけです」

「しかし、それ以外の道はありません。あの男は用心深く、狡猾です。残念ですが、ボロを出すのを期待するくらいしかありません」

「それじゃあ、私はどうすればいいんです？」

「奥と接触できるなら、そのまま続けてください。注意深く慎重にあの男を観察して、私に知らせてくれると助かります」須田は机の引き出しを開けて、小型のレコーダーとマイクを取り出した。「できればこれで奥の話を録音してください」

前田はレコーダーを受け取ってポケットにしまった。そして、右手を須田に差し出した。須田はその手を軽く握り返した。

「頼みます」

前田がいなくなった事務所で、須田はぼんやりと椅子に座っていた。もちろんただ何もしていないわけではなく、頭は働いていた。

これからすべきことの優先順位。前田の行動を監視するというのは重要だが、それ以上に奥の動きを警戒しなければならない。体が二つ欲しいところだった。だが、前田のことを他人に頼むことはできない、あの男が表に出してしまうと、話がややこしくなるだけ、ということになりそうだからだ。

それに、何より危険なのは奥だった。今までの行動を考えると、殺しもやりかねない男というのはわかつている。そんな男のことを他人に任せるのは気が進まない。

奥の足取りはつかめていないが、行動を起こせばそこから捕まえることも不可能ではないだろう。おそらく前田も目的は同じだろうから、うまくいけば同時に捕捉することもできるかもしれない。

須田は机の引き出しを開けて、小さな瓶を二つ取り出した。瓶の中身はカフェイン入りの錠剤と自衛用の特別にホットな唐辛子の粉末だった。錠剤を一つ飲み込んでから、両方の瓶を上着のポケットに入れて、須田は立ち上がった。慎重に、大胆に行動しなければならない。

前田は須田が事務所を出て行くのを、建物の陰から見ていた。意味がないことなのはわかっていたが、自分を後押しするものがなかった。須田が行動を起こした様子を見て、なんとか自分が動き出す気力がわいてきた。

もう一度、いや、何度でも奥と接触する。そして、その全てをこのレコーダーに収める。危険があるのはわかっていたが、それくらいは当然のリスクだと、そう考えられるほど気持ちが落ち着いてきた。

そうして前田はその場を立ち去ったが、須田は角を曲がる振りを

して、その様子を観察していた。前田を放っておくのはあまり得策
とは言えないが、今は仕方がない。それに、この男をマークしてな
いという事実は、奥を油断させるのに役立つかもしれない。危
険はあるが、なにしろ思い切った行動が必要だった。

須田は石村に電話をかけた。

「俺だ。あの電話について何かあったか」

「ああ、そろそろこつちから連絡しようと思ってたところだ。場所が大体わかったんでな」

「近いかな？」

「たぶんちよつと街はずれにあるホテルだな」

「街はずれ」須田は少し考えて、すぐに思い当たったようだった。

「あの小さなホテルか。高くて誰も使わないし、さびれた場所にあるから、隠れるには好都合な場所だ」

「なるほど。それで、どうするんだ？」

「とりあえず、行ってみるさ」

「そうか、頼むぜ」

石村が電話を切ったのを確認してから、須田は電話を切った。そして、教えられた場所に向かうためにタクシーをつかまえた。

そして、件のホテルに到着した。安くもなく、駅から遠いホテルはさびれた雰囲気だった。須田は躊躇することなくホテルに入っていた。ホテルのロビーには、大平がいた。須田は黙ったまま大平に近づいた。

「大平さん、どうですか？ 調子は」

大平はゆつくりと顔を上げて須田の顔を見つめた。

「君か。あまり良くないよ、少々悩みが多すぎてね」

「悩みがある時は、他人に話すのが簡単な解決方ですよ。仕事として秘密を守るような人間なら、もっと都合がいい」

「それができたら、どれだけ楽だろう」大平は力のない微笑を浮かべて須田の顔を見た。「今更後には退けないんだよ。失う可能性のあるものが多すぎる。そうだな、例えば私の人生だ。無駄になっしまうよ、全部」

二人はしばらくの間睨み合った。

「失われはしませんよ。無駄になったとしても、良くも悪くも、あなたのやったことはしばらくの間は忘れられません」須田はポケットから手帳を取り出した。「少なくとも、私は記録しています。それでは不足ですか？」

「不名誉な記録でなければいいがね」

大平は自嘲気味に笑った。須田は表情を変えなかった。

「不名誉なことでしょう。しかし、私はそうは思いません。あなたは今まで多くのものを人に捧げすぎたのではないでしょうか。そろそろ、何も気にせずに自分に正直になってもいいかもしれませんよ」「なぜそこまで言えるんだね？」

「あなたは私と会わないこともできたし、さっきの電話にだって出なくてよかったはずです。今だって、こんな風に話す必要はありません」

須田はそこで言葉を切って天井を見上げた。それとは対照的に、大平はうつむいて床を見ていた。二人はしばらくそうしていたが、どちらからということもなく、目を合わせて、うなずいた。

前田は須田が立ち去るのを見届けてから、あてもなく街をさまよっていた。奥の連絡先がわからないのだから、そっちからの連絡を待つしかなかった。そうして時間の感覚を失って街をさまよっていた。気がつく、滞在しているホテルの前に着いていた。

部屋に戻ってドアを開けると、ドアにはさまれていたらしい紙が床に落ちた。それを手に取ってみて、ドアをきっちり閉めてから見てみると、どうやら奥からのメッセージらしかった。

須田の動きを知らせるということ、遠まわしな脅しのような文句が書かれていた。連絡先は書いていなかった。その紙をしばらく見つめていると、電話が鳴った。フロントからの電話の取次ぎだった。偽名であったが、前田にはすぐに奥だと察しがついた。

「なんでしょう？　なにか動きでもありましたか？」

前田の一言に、奥は声を出さずに笑っているような雰囲気沈黙を返した。

「おいおい、あの探偵に会ってただろ。そこで何を話してたのか、ちよつと教えてもらいたいだけだよ」

どこから見えていたのか、前田はそれを考えたが、すぐにやめた。見られていたということだけわかればそれでいい、どうせ監視している人間を割り出したところで、重要なことは何ひとつわからないだろうから。

「別に、大したことは話してない。あんたに言われた通りのことを話しておいただけだ」

「ほう。で、反応はどうだったんだ？」

「薄かった。倉庫のことくらいはすでにつかんでたらしい。無駄足だったようだな」

「無駄かどうかは俺が判断することだ。あんたは言われた通りにしてりゃいい。余計なことは考えるな」

「ああ、わかったよ」

「おとなしくしとけよ、悪いようにはしない」

奥は勢いよく電話を切った。前田は受話器を置いて、ベッドに大の字になって天井を見上げた。

これからどうすべきか？ 奥の言う通りにしていれば、大平くらいには報いを受けさせることができるのだろう。しかし、それでは奥を野放しにすることになる。昔の事件の清算も、奥が保身できるのなら無理だろう。

それは許容しがたいことだった。例え大きな犠牲を払ったとしても、過去のあの事件にけりをつけたかった。そのためには、絶対に奥を表舞台に引きずり出す必要がある。

前田は目を閉じて、大きなため息をついた。今はまだ動くべき時ではない。あの探偵がどれだけの情報を集められるかを待ってから決めればいい。何もできないようなら、奥の話に乗って、とりあえず大平をターゲットにするのも悪くない。

須田は大平を連れて、呼んだタクシーをホテルの前で待っていた。ホテルを出てからずっと無言だった大平が口を開いた。

「君には感謝している」

「そうですか。それはまだ早いかもしれませんよ」

「本当に感謝しているよ。もしかすると、今のまずい循環から抜け出せるかもしれない」

「その循環を教えてもらえるのでしょうか？」

大平は首を振った。

「それはできない。だが、君が自分で見つけたすなら話は別だ。私としては、それを止めることはしないよ」

「ありがとうございます」

そこでちょうどタクシーが到着して、会話はとぎれた。二人はタクシーに無言で乗り込んだ。須田は三山の店の名前を告げてから、腕を組んで目をつぶった。

ホテルの向かい側の駐車場の車の中からタクシーを見送ったサラリーマン風の男が、ゆっくりと車を出した。

須田は少し目を開けて、サイドミラーに車が映っているのを確認したが、特に何も言わずに再び目を閉じた。大平は須田の行動には気づかなかったが、後ろを気にしてそっちにふり向こうとした。

「気にしないほうがいいですよ」

大平は動きを止めて、須田の表情をうかがおうとしたが、目をつぶって落ち着いているだけのように見えた。

「確認しないのは、まずいことじゃないかね？」

「確認もないのに気にしても仕方ありません。もちろん、対策は考えているのでご心配は要りません」

「わかった、君にまかせよう」

しばらくしてから、タクシーが目的地に着いた。須田は支払いを

済ませてから自分が先に降りて、周囲をさつと見回した。大平も続いて降りた。須田のように周囲を見回さずに、目の前のバーを怪訝な顔で眺めた。

「須田君、ここは？」

「安全なところです。さ、早く入りましょう」

バーの中はそれなりににぎわっていた。バーテンダーは目ざとく須田を見つけて、軽く手を上げて声をかけてきた。

「今日もお仕事ですか？」

「そんなところだ」

須田はカウンターの前まで来たが、ストूलには腰かけずに、奥の事務所を指差した。

「今はいるかい？」

「ええ、いますよ。呼んできましたよか？」

「いや、こっちから行くよ」須田は背後の太平をちらつと見た。「内密の話があるからな」

バーテンダーは微笑を浮かべてうなずいて、他の客の注文に対応しにいった。須田は太平に振り向いて、奥の部屋に続くドアを目で指し示した。

「行きましようか」

太平は黙って須田に続いた。ドアの向こうには、何の変哲もない事務所があつた。そこにいる男は多少派手だったが、それほど変わった人間にも見えなかった。須田は黙って応接用のソファに腰を下ろした。太平もそれにならつた。

「ちよつと待つてろよ。もうすぐキリがいいところだからな」

三山は書類から顔を上げずにそう言った。太平はその態度に多少驚いたようだった。

「ちよつと、無用心じゃないかと思つてるでしょう」

相変わらず顔は上げずに、三山は太平に声をかけた。

「その男が連れてくるのは、わけありであつても、危険な人間じゃない。まあその程度の信頼はあるっていうことだね」

やっと顔を上げた三山は、二人の向かい側のソファに移動した。「それで」三山はあごで太平を指した。「どちらさんだ？」

「今回の件で重要な人だ」

「で、俺にどうしろって言っただ？」

「身の安全を確保してくれ。しばらくの間でいい」

三山と須田はしばらくの間、無言でにらみあった。三山は視線を外して、大平を見た。

「何も聞かなくていいんだな」

「ああ」須田はうなずいて、大平のほうに向き直った。「大平さん、そういうことから、しばらくここにいてもえますか？」

大平はとまどいながらも首を縦に振った。

「しかし、私に何も聞かなくていいのかね？」

「話したくなったら話してください」須田はそう言って立ち上がった。「私はこれで失礼します。仕事がありますので」

奥は相変わらず雑居ビルの一室で、デスクの上に足を投げ出していた。スナック菓子の袋が足元と机の上に投げ捨てられていた。

あの探偵はどれほどのものか？　なめてかかると痛い目にあうだろう、ということは予想できた。新しいスナック菓子を開けると、それに答えるかのようにデスクの上の電話が鳴った。

「なんだ、何かあったか？」

「例の探偵ですが、大平をホテルから連れ出しました」

「ほう」奥はスナック菓子をわしづかみにして口に放り込んだ。それをせわしなく噛んで飲み込んだ。「それで、どこに行ったんだ？」にぎやかな場所にあるバーです。入ってから1時間は経っていませんが、出てくる様子はありません」

「なるほど、いいところを選びやがったな」

「ええ、昼も夜も人目があります。何か仕掛けるのは難しいでしょう」

「こいつは真面目にやらないと駄目だな」

奥はさらにスナック菓子を口に放り込んで、しばらくもぐもぐやっていた。

「よし、とりあえずそのバーに張り付いてろ。動きがあったらフォロ―しておけ」

「わかりました」

「わかってるだろうが、用心しておけ。いや、後手にまわってるくらいのもりでな」

返事は聞かずに、奥は受話器を無造作に投げた。受話器はきれいに本体に収まった。電話の相手には慎重な物言いをしたが、奥自身はそれほど心配しているような様子はなかった。

「お手並み拝見だ、探偵。俺を出し抜いてみるよ」

大きな声でわざとらしくそう言った。そして勢いよく椅子から立

ち上がり、自分が散らかしたゴミを片付けることもなくなっさと出て行った。

須田はとにかくホテルを調べていた。特に成果を期待しているわけでもなかったが、奥でも前田でも、とにかく今回の件で手がかりになる可能性があるなら、なんでも拾ってみるつもりだった。

今はとにかくホテルに電話をかけ続けるのが最優先なことだ。

しかし、何件あっても、具体的な成果は何もなかった。須田は手帳に目を落として、線が引かれたホテルの名前をざっと見た。

めばしいホテルはつぶした。それでも全く手がかりがないということは、奥はホテルのような一時的な滞在先ではなく、アジトのようなものを持っている。そう考えたほうがよさそうだった。

須田は受話器に手を置いてしばらく考えてから、おもむろに受話器を取り上げて、ある場所に電話をかけた。

「もしもし」

「ああ、須田さん。こんな時間に電話をしてくるってことは、商売繁盛ってことですか？」

受話器からは親しげな若い女性の声が聞こえてきた。ちょうどよく地元の不動産屋の営業やその他の実務をこなしている、山崎慧だった。

「それはぼちぼちな。それより頼みたいことがあるんだが」

「仕事ならありますけど。不法占拠の件なんかどうです？」

「それだ」須田はするどく言った。「不法占拠されてる物件のリストが欲しい」

「まあ、いいですけど。ファックスで送りましょうか」

「頼む。ああ、そっちの仕事も請けておくよ」

「当然です。その資料も送っておきますよ」

「わかった」

須田はそう言って受話器を置いた。しばらくすると、ファックスが動いて書類がはき出された。須田はそれを手にとってざっと目を

通した。

明日は忙しくなりそうだと、須田はため息をついた。

翌日、須田は事務所で目を覚ました。昨日山崎から送られてきたファックスを手にとつて、地図で場所を確認した。

目的の場所と、押し付けられた仕事の場所は大体同じだった。義理をはたすためには、向こうの仕事を先に済ませるべきだったが、須田は自分のことを優先することにして、事務所を出る準備を始めた。しかし、ドアをノックする音にそれは中断させられた。

「須田さん、いますか？」

前田だった。須田は一呼吸おいてからそれに反応した。

「どうぞ、開いてます」

ドアを開けて入ってきた前田の表情を見た須田は、ほんの一瞬顔をしかめた。前田は硬い表情で、お世辞にも友好的でも協力的でもなさそうだった。須田は直感的にまずいと思ったが、その感情はすぐに押し隠した。

「どうしました、何かありましたか？」

須田は椅子を勧めた。前田は黙って座つて、一呼吸間を置いてから口を開いた。

「今日はお願いがあつて来ました」

須田は黙つてうなずいた。

「今回の件から、手を引いてください」

微動だにしない須田と、硬い表情のままの前田はしばらくにらみ合うようなかたちになった。その状況を動かしたのは須田だった。

「それはつまり、依頼をキャンセルすると、そういうことですね」

「そうです。そしてこの件は忘れてください」

「忘れる、ですか」須田は笑顔を浮かべて前田の目をじつと見た。

「ま、商売にならなければ事実上それと同じことになりますよ。それでは、料金の精算をしましょうか」

須田は立ち上がつてファイルを棚から取り出すと、前田に出した

見積書のコピーを取り出して机の上に置いた。

「もうしわけありませんが、前金として頂いたぶんはお返しできません。それ以外は必要経費だけ請求させてもらいます」

前田はうなずいて、須田が電卓をたたくのを黙って見つめた。しばらくして、須田が金額を弾きだした。それなりの金額であったが、前田はそれを現金で払った。

「どうも、ありがとうございます。それで、前田さん。あなたはこの件から手を引くんですか？」

須田の問いには何も返ってこなかったが、それは雄弁な沈黙だった。

「あなたが突然態度を変えたのは、事情があるのでしょうか。しかしこれだけは言っておきます。チャンスがあるのなら、それは今です。時間をかけるのは得策ではありません」

前田は何も言わずに事務所を出て行った。

須田は前田との話は頭から追い出して、山崎からもらった情報で動き始めた。まずは一番手近な物件から片付けていくことに決めた。とにかく総当りで、手当たり次第にドアをノックしていくしかない。最初のマンションでは奥の写真を見せてまわっても、日本語がわからない不法占拠の住人達の反応はまるでなかった。不法占拠でない住人の反応も駄目だった。須田は事務的に不法占拠者の状況を手帳にメモすると、次のマンションに向かった。

その頃、前田は朝食のために喫茶店に入っていた。ちょうど朝食セットが来ると、携帯電話が鳴った。確認すると、奥からかかってきていた番号だった。

「奥か」

「いいえ、違います」

前田は勢いよく出たが、受話器の向こうから聞こえてきた声は奥のものではなかった。

「まあ、代理人と思ってもらえますか」

「その代理人がなんの用だ」

「あなたに少し話がありますので、そのままその店を出てください」そこで電話は切れた。前田は店内を見回したが、それらしき人物は見当たらなかった。前田は多少いらついたようにコーヒーを飲み干して立ち上がった。

店を出ると、いつの間にか一人の目立たない感じの男が並んで歩いていた。

「とりあえず、あなたにやってもらいたいことがあります」

「なにを？」

「宿を変えてもらいます。滞在費も、足がつくのも、比較的心配ないところがありますから」

「それと、あんたらにとって行動が把握しやすいところか」

前田は自嘲とも嘲りともとれるような表情を浮かべた。男はそれを意に介さず、無表情で口を開いた。

「我々は協力者ですから。連絡はしっかりとれるようにしておかないといけません」

男は住所と簡単な地図が書かれた紙を前田に差し出した。前田は黙ってそれを受け取った。

「すぐに行ってみてください。場所を確認したら、移るのは今日中にしてもらいたいですね」

かすかに命令調でそう言っ、男は足早に立ち去った。前田は後をつけようかとも思ったが、今は相手に従っておくことにした。これから接触することも多いはずだと自分に言い聞かせていた。

須田は黙々とドアをノックしてまわっていた。相変わらず空振りばかりだが、そもそもそんなもので気にもならなかった。

そして、やっと情報と言えるものに遭遇できた。ある不法占拠者でない住人から、怪しい人物の話を聞くことができた。その人物は中年の男で、あきらかに居住者ではない様子なので印象に残っているということだった。好都合なことに、どの部屋かの情報も得られた。

須田は教えられた部屋の前まで来た。どことなく生活感のないような雰囲気があるように感じられた。もちろんただの感覚なのであてになるものではない。とりあえずチャイムを鳴らしてみたが、誰も出ては来なかった。須田は部屋の前を離れ、山崎に連絡をした。

「ああ、須田だ。ちょっと中に入って確認したい部屋が出てきたんだが」

「仕事熱心ですね。建物と部屋はどこです？」

須田はリストで確認しながら、山崎の質問に答えた。

「ああ、そこですか。それじゃ、管理会社に連絡しておくんで、そのマンションの前で待っていてください」

「近いんなら、こっちから行ってもかまわないけどな」

「駄目ですよ、一応部外者なんですから。おとなしく待っていてください。時間がわかったらまた連絡しますから」

山崎はそう言って電話を切った。須田はしかたなく階段で下まで降りて、管理会社の人間を待とうかと思ったが、ドアをノックしに行ったらぼうがよさそうだった。山崎からの電話を待ちながら、そうして時間を潰すことにした。

新しい情報はなかったが、さっき聞いたのおなじような情報は得られた。そうしているうちに、山崎から連絡が入った。

「管理会社のほうは、あと30分くらいで到着するそうです」

「そうか、わかった」

須田は電話を切ると、下に降りて、建物全体がよく見渡せるところを探して陣取った。何かが起こることを期待しているわけではないが、機会があれば確実につかまなければいけない。

前田は黙って歩いていた。男は最初はついてこないようなことを言っていたが、何が気になったのか、結局前田を案内することにしたようだった。

しばらくすると、男は前方に見えたマンションを指差して口を開いた。

「あそこです。まあ、いいところですよ」

前田は黙って男の後についていった。

そうしてマンションに来た2人と、須田は鉢合せしそうになった。前田と男がマンションのエントランスに入っていくのを、須田はなんとか身を隠して見送った。

2人がエレベーターに乗ったのを確認すると、すぐにエレベーターが何階に止まるかを確認した。さつき山崎に連絡をした部屋の階に止まった。須田は自分も上に行って確認したい衝動にかられたが、リスクを考えてそれは思いとどまった。ここに張り込んで、前田と一緒に男が出てくるのを待つことにした。

あの男は初めて見た人物であつたし、奥に近い人物だろうと直感したからだ。須田はすぐに山崎に連絡をした。

「もしもし、須田だ」

「ああ、なんですか？」

「さつきの部屋の件なんだが、どうも思い違いだったらしい。鍵は必要なくなった」

「ああ、まったく。そういうのはちゃんと確認してくれなきゃ困りますよ」

「よろしく頼む」

「さばらないで仕事してくださいよ」

須田は返事をしないで電話を切った。そして、マンションの出入り口が見渡せて、目立たない張り込み場所を探すためにあたりを見

回した。あいにく、そのあたりには適当な場所がなかった。エレベーターホールの入口から目を離さないように気をつけながら、張り込み場所を探すことにした。

そして、なんとか場所を確保してからしばらくして、さっきの男が1人でマンションから出てきた。須田はカメラを取り出して、慎重に男の後をつけ始めた。

幸いにも男は徒歩で、あせる様子も尾行に気づく様子もなくゆつくりと歩いていった。その調子でしばらく歩き、ちいさな雑居ビルの前に到着した。男がそこに入っていくのを確認すると、須田はその雑居ビルの名前を書きとめた。

カメラを確認すると、多少遠いが、男の顔がしっかり撮れている写真もあった。まずまずの成果と言えた。

須田は、まず石村と連絡をとった。

「俺だ。ちよつと調べて欲しいことが出てきたんだが」

「なんだ、例の件の絡みか？」

「そうだ。似顔絵も頼みたいんだが。今から大丈夫か？」

「今からか、そうだな、すぐには無理だが、2時間後くらいなら大丈夫だ」

「それなら先に下調べをしてから行くことにする」

「ああ、楽しみにしてるぜ」

須田は電話を切ると、すぐに木村に連絡をした。

「はい、木村興信所です」

木村が出てきた。

「挨拶は抜きにして、ちよつと聞きたいことがあるんだが」

「はいはい、今度は何」

「電話じゃ無理だな。これからそっちに行く」

「ああそう」

木村はそれだけ言って、さつさと電話を切った。須田は急いで木村の事務所に向かうことにした。

少し経ってから、木村と須田は机を挟んで向かい合って座っていた。木村は須田から渡されたカメラの画像を確認していた。

「つまり、こいつの身元が知りたいわけね」

「ああ、俺達と似たような仕事をしてる奴なんじゃないかと思ったんだ」

「俺達じゃなくて、あんたと似たような仕事をしてる奴ね。で、名前は何？」

「それが知りたい」

「なるほど」木村はこれみよがしなためいきをついて立ち上がった。「うちの誰かが見たことあるかもね」

木村は部屋を立ち上がった、社員に画像を見せてまわった。どうやら、何か反応があったようで、須田とも顔なじみのそれなりにベテランの社員としばらく話し込んで戻ってきた。

「わかった。やっぱりあんたの同類だったわ」

「名前は」

「森川透。昔はまともにやってたらしいけど、最近は話を聞かなかつたらしくてね。まあ、やばいことをやってたんでしょ」

「今の事務所はわかるのか」

「それは無理。昔の情報ならあるけど」

木村は名刺を須田に手渡した。須田はその名刺の内容をメモして、すぐに返した。

「助かる。たぶん役に立つはずだ」

「それはどうも。慈善じゃないから、そっちのほうはよろしくね」

「ああ、わかってる」

前田はホテルをひきはらった。少ない荷物をまとめて、さっきのマンションに拠点を移した。少し落ち着くと、早速奥から連絡が入った。

「どうだ、その居心地は？ タダで使わせてやるのはもったいないくらいだろう」

「そうかもしれないな。それより、なにか話はないのか？ あるんだろ」

「あせるなよ。話はじっくりすすめるもんだ。まずは、そうだな。お前においしい話がある」

前田は黙って奥が先を続けるのを待った。

「俺の仕事を手伝わせてやろうってことだ。いい話だと思うぜ」

「なんのつもりだ」

「仕事を世話してやろうって言うてるんだよ」

「どんなメリットがあるんだ」

「金ならやるぜ」

「違う。あんたにとってだ」

「いいか」奥は受話器の向こうで含み笑いをしたようだった。「うるさい奴はこっち側にしてやる方針なんだよ俺は。俺を売ったりするよりも得なことをさせてやってな」

「それで、あんたに何の得がある」

「面倒が減るだろうが」

「なるほど」

そう言って前田は考え込んだ。同意すれば奥と同じような立場になる。つまり、裏の世界で動くことになる。だが、そうしなければどうにもなりそうもないというのは覚悟していた。

「わかった、あんたの話に乗ろう。それで、何をすればいいんだ？」

「クローゼットを開けて、一番下の段の板を外してみろ。見つかつ

たものをしつかり管理しておけよ」

奥は電話を切った。前田は言われた通りにクローゼットを開け、一番下の段の板を外してみた。板の裏側には巧妙に錠剤が隠されていた。前田はそれを無造作にポケットに入れた。これを警察に持ち込んだところで、奥は自分の身を守るために、しつかり手をうつているだろう。それでもかすり傷くらいにはなるだろうが、そんな結果は求めていない。

今は我慢の時だろう。

須田は警察署で石村のデスクの隣に座っていた。

「その森川っていうのが突破口になりそうなのか？」

「ああ、今のところ一番有力だ」

「そうか、聞いたことでもあればよかったんだけどな。残念だが、その男のことは初耳だ」

「一応写真もある」

須田は森川の写真を石村に手渡した。石村は首をひねりながらその写真を見ていたが、すぐに首を横に振った。

「やっぱり知らんな。ちよつと他の連中に聞いてくる」

石村は写真を持ったまま立ち上がって、その辺りの人間を捕まえて写真を見せてまわった。しかし、結果はよくないようだった。

「駄目だ。もつと広い範囲にばら撒いて調べたほうがいいだろうな」
「それは絵描きに似顔絵を頼む。まあ、それ以外にも心当たりがあるにはある」

「それは頼もしいな。頼んだぜ」

山中に似顔絵を頼んでから警察署を後にした須田は、吉田のところに向かった。

「吉田さん、須田です」

吉田は恐る恐るといった感じでドアを開けた。須田はそれを気にすることなく部屋に入った。

「今日は見てもらいたい写真があります」部屋に入るなり、須田は森川の写真を吉田に差し出した。「この男をご存知ですか？」

吉田の顔色が変わったのを須田は見逃さなかった。

「ご存知なんですね。今回の件を解決するためにはどうしてもこの男の情報が必要です。協力してもらえますね」

吉田は黙ってうなずいた。

「この男と会ったことはありますか」

「ええ、何度か」

「では、その場所を教えてください。」

少しためらいを見せたが、すぐにあきらめたような表情になり、吉田は口を開いた。

「わかりました。大したことではないでしょうが」

恐る恐る語りだした吉田の話を、須田は手帳を取り出して熱心に聞いた。

吉田から話を聞いた須田は三山の店に向かっていた。森川が出てきた場所がわかったので、とりあえずそこは押さえておくべきだった。三山ならそれができる。

今の時間では表は開いていないので、須田は裏から店の事務所に入った。中では三山が帳簿と格闘していた。須田が事務所に入ると、三山は顔を上げた。

「例の件で進展でもあったか？」

「ああ、それで手を借りにきた」

「俺は忙しいんだから、ほどほどにしてもらいたいね」

三山はそう言いながら、帳簿を置いて須田の方に向き直った。須田は手近な椅子を引っ張って腰を下ろしてから、森川の写真を取り出した。

「こいつを見たことがあるか」

三山は写真を受け取って、しばらくの間じっと見ていたが、難しい表情で顔を上げた。

「いや、知らない。何者だ？」

「森川っていう探偵らしい男だ。どうも今回の件で色々と動いている」

「お前さんと似たようなことをやってるってわけか。ずっとここらで仕事をしてるなら、知っててもおかしくなさそうなもんだが」

「昔はまともな仕事をやってたらしいが、最近は裏に潜ってたのか、それとも飛びまわってたのか、こいつを知ってる人間も名前を聞くこともなかったらしい」

「そりゃ厄介だな。それで、どうしようっていうんだ？」

「最近森川が現われた場所がわかってる。人手さえあればなんとか捉えることができるかもしれない」

「そういうことか」三山は立ち上がった。「若い連中にバイトをさ

せてやりやいいんだろ、わかったよ。で、場所はどこだ？」

須田は黙って吉田から聞き出した場所のメモを三山に渡した。

「俺は他に調べたいことがあるから、そっちはまかせろ。なにかあったら連絡をくれ」

「まったく、こんな面倒くさいことはさっさと片付けてくれよ」

「そのつもりだ」

そう言って須田は三山の事務所を出て、前田と森川を見たマンシヨンに向かった。森川はともかく、前田は出入するだろう。それをたどれば、なにか収穫が得られるかもしれない。現実とは言えない方法だったが、今できることではこれが最善だった。

マンシヨンに到着してみると、見た目からわかるものでもないが、特に何かあった様子もなさそうだった。とりあえず張り込み場所を探すことにした。

前田は室内でうろうろと歩きまわっていた。あれから奥からの連絡はなく、特にやるべきことも思いつかなかった。だからといって、この部屋にずっといてもしょうがない。前田はあてもないまま外に出ることにした。

ファミレスに入った前田は、今までのこととこれからのことを考え始めた。

まず、これから奥とどう関係していくのか。ドラッグの隠し場所に住んでいるだけでは、何かを探りだすことはまず無理だろう。だからといって、この程度の材料で警察などに行くことも考えられない。奥につまらないちよっかいを出すのが目的ではないのだ。二度と立ち直れないような打撃をあたえなければいけない。

そして、5年前の件の真実を知ることだ。

須田は外からその前田の様子を見ていた。前田には、今監視がついている様子がない。少々危険だが、須田は動いてみることにした。携帯電話を取り出した。

「須田です。今は大丈夫ですか、太平さん」

「君か、問題はないよ。店の人もよくしてくれている。それで、なにかな？」

「ちよつと話をしてもらいたい人物がいます」

「それは」

「5年前の件に関わりがある、あなたがよく知っている人物です」「そうか」太平は相手が誰か気づいたようで、しばらくの間沈黙してから落ち着いた声で続けた。「彼とはちゃんと話をしておきたいと思っていたよ。どこに行けばいいのかね？」

「では、そのオーナーにこう伝えてください」

須田はファミレスの名前と場所を伝えた。

それからしばらくして、タクシーで太平が到着した。須田はタク

シーに近寄って大平に声をかけた。

「早かったですね」

「そうかね。タクシーの乗換なんて初めての経験だったよ」

「つけられるのは都合がよくありませんから、多少面倒でも用心しなければいけません。それより、会ってみたい人物はあの店内です」

須田はファミレスを指差した。大平はその指の先を見てうなずいた。

「ありがとう。彼とはきちんと話をしておきたいと思っていたんだよ」

「ちょっと待つてください」

ファミレスに向かおうとした大平を須田は呼び止めて、レコーダーを取り出した。

「気がすすまないかもしれませんが、これを持って行って下さい」

大平はレコーダーと須田を交互に見てから、ゆっくりと手を伸ばしてそれを受け取った。

「前田君」

声をかけられた前田は顔を上げたが、なにも言えなかった。

「相席しても、かまわないかな」

前田はしばらくの間うつむいて黙っていたが、なんとか気分を落ちつけた。

「どうぞ」

「ありがとう」

大平はそう言って椅子に座った。

「それで、なんの話です。こちらからは特になにもありませんが」

「そう言わずに私ときちんと話して欲しい」

「それはどういった風のふきまわしです？」

「色々あったんだ。君とはどうしても話をしておかなければいけない」

明らかに前回会った時とは違う様子の大平に、前田は多少気圧されていた。

「私はね、君と話してから考えたよ。今までずっと先生、君の父親のために私は働いてきた。君のやりたいことに協力したら、それは無駄になってしまっんじゃないかと、そう思っていた」

大平は薄く笑った。

「しかし、無駄にならないということは、本当に私が望むものではないんだよ。たまには正直に行動してみたくもなるんだ」

「つまり、どういうことです？」

「君の聞きたいことをなんでも聞くといい」

「5年前のことでもですか」

「知っていることなら答えられるよ。残念だが、私はそれほど知っているわけではないのだけどね」

「いえ」前田は首を横に振った。「聞きたいのは現在のことです。」

あなたがこれからどうするのか」

「これからは、そうだね。今世話になっている人がいるから、その人に協力していこうと思っているよ。おそらく、君にもいい結果がでるだろうね」

「どういうことです？」

「今回はきつちりやる決心がついたんだよ。もちろん信じてくれなくてもかまわない、これは私が決めたことだからね。君とは関係なしに最後までやるつもりだよ」

大平は立ち上がった店を出て行こうとした。前田は思わずつられて立ち上がった大平を制止した。

「待ってください。話しておきたいことがあります」

「話とは、なになな？」

大平は立ち止まって前田に尋ねた。前田は少しためらってから口を開いた。

「私は今、奥の手元にいます」

大平は黙って再び椅子に座った。

「奥というのが何者かはわかってますよね」

「ああ、わかつているよ。しかし、ずいぶん危険なことをしているね。その危険に見合うものがあるかどうか分からないのに」

「危険は承知のうえです。すぐに成果がでることもないでしょう」

「そこまでわかつていて、やめようと気はないのかね？」

「リスクも時間も、いくらでもかけるつもりですよ」

「それは違うよ前田君」大平は前田の顔をじっと見た。「遅くてうまくやるなんてことはない。まずくても速くやらなければいけない」「どういうことですか？」

「行動を起こすならすぐに、ということだよ。待っていても好機などとは決して来ない。多少無茶と思っても、動いてみるのだね」大平は立ち上がって、連絡先を書いた紙をテーブルの上に置いた。「何かあったら、いつでも連絡してもらいたい、相談に乗るよ」

今度は前田は大平を制止せずに、黙って見送った。ファミレスを出た大平はすぐに須田と合流した。

「どうでした、と聞きたいところですが、とりあえず場所を変えましょうか」

須田はタクシーをつかまえて、周りの様子をよくうかがってから大平と一緒に乗り込んだ。タクシーの中で、大平はレコーダーを須田に渡そうとしたが、須田はそれを受け取らなかった。

「まあ、それは後にしましょう。それより、太平さんの印象が聞きたいですね。どうでした、前田さんは」

「そうだね、思ったより落ち着いていたよ。ただ、少々慎重になりすぎてるように見えた。あれでは何かチャンスを作り出すことは難しい」

「なるほど。では、太平さんはどうします？」

「助言はしたよ。どうするかは前田君次第だ」

須田はそれを聞いて軽く笑った。

「人が悪いですね」

「政治の世界で生きてきたからね、そう見えるのはよくわかってい
るよ。別にそうしているつもりはないんだけどね」

「おっしゃる通りだといいですね、あなたが悪人だと私も困ります
から」

「むしろ私が悪人なほうが都合がいいと思うよ」

大平はそう言って薄く笑った。

「そうでしょうか」

「私が悪人でなかったら、情報は手に入らないからね。なにか書くものをもらえるかな？」

須田はメモ用紙とボールペンを大平に渡した。大平はそれに一つの住所と電話番号を書いて須田に差し出した。

「君の手間を省ける情報だ」

「いいんですか？」

「ああ、かまわないよ」

須田はメモ用紙を受け取って、それを胸のポケットに納めた。そうしているうちにタクシーは三山の店の前に到着した。2人はタクシーからは一緒に降りて、店内に声をかけてから一緒に店に入った。奥で続きを話そうか」

大平はそう言ったが、須田は首を横に振った。

「いえ、少し考えたいので、先に行っていて下さい」

須田の言葉に大平は黙ってうなずいて事務所のほうに消えていった。開店時間にはまだまだある店内は、見張り役の人間以外の姿はなかった。須田はカウンターのストウールに腰かけた。

須田は大平から教えられた奥の連絡先を書いたメモ用紙を見ながら、じっと考え込んだ。今ここで奥と接触するべきか。うまくいけば事態を一気に解決することもできるかもしれない。もちろんリスクも大きい。

しかし、今はリスクを考えている段階だろうか。できることが増えたということは素直に歓迎すべきことのはずだ。相手にプレッシャーをかけなければ行き詰る可能性が高い。

そこまで考えると、須田は立ち上がって事務所に入ってしまった。

事務所の中には大平と三山が座っていた。須田は黙って大平からレコーダーを受け取って、椅子に座るとイヤホンを耳につけた。それを聞き終わってから、須田はあごを手でさすった。

「前田さんはすぐに行動を起こしますかね」

「さあ、どうだろうね」

「大平さんの考えではどうですか」

「彼はやるんじゃないだろうか。ぐずぐずしているタイプではないはずだよ」

「そうですか」須田はそう言って立ち上がった。「こちらもぐずぐずしているわけにはいきませんね」

前田は大平と別れた後、ファミレスを出てマンションに戻ろうと
していた。行動しようにも、どうすればいいかわからなかった。と
にかく、いったんマンションに戻ることにした。

マンションに戻った前田は、再び室内にあるかもしれない何かを
探した。しかし、前に見つけた以上のものは何も見つかりはしな
かった。しばらくぼんやりとしていたが、何かに気づいて前田はドア
を開けて外に出た。

まずは隣の部屋のチャイムを鳴らした。そこは不在か居留守だっ
た。同じようにその隣のチャイムも鳴らした。

「はい」

「あの3号室に越してきた者ですが、ご挨拶にうかがいました」

「少々お待ちください」

インターホンが切られた。前田は自分の手を見て、手ぶらなこと
に気づいた。失敗したと思ったがすぐに部屋の住人が出てきてしま
った。とにかく頭を下げた。

「どうも、奥といいます。よろしくお願いします」

「ご丁寧にどうも、こちらこそよろしくお願いします」

住人はそれだけ言っただけでドアを閉めた。前田は奥の名前に住人が反
応するかどうかわ見ていたが、特に変わった反応は何もなかった。気
を取り直して、違う部屋のチャイムを鳴らすことにした。

しかし、一通り周っても、期待していたような反応は得られな
かった。留守か普通の住人しか居ないようだった。違う階にも行こう
かとエレベーターの前に行くと、ちょうどそのドアが開いた。

「よお、お出かけか」

奥は笑顔で前田の肩をたたいた。

「ええ、邪魔をしないでもらえるとありがたいんですが」

「そう言うな。あんたにいいものを持ってきてやったんだ。ほら、

客が来たんだから部屋に案内しろよ」

前田は奥に押されて仕方なくあてがわれた部屋に向かった。部屋に入ると、奥はすぐに封筒を前田に差し出した。前田が黙って受け取り中を確かめてみると、少ないとは言えない現金が入っていた。

「これは、なんです？」

「見りゃわかるだろ。お前さんを働かせるんだから、その見返りだ」

「まだ何もやっていないと思いますが」

「これからのぶんだ、よろしく頼むぜ」

大平から受け取った住所は、森川が入っていった雑居ビルだった。裏がとれたのは幸いだった。近くに張り込んで見張ろうかとも思ったが、とりあえずビルの中を見てみることにした。

中は特に特徴のない3階建ての古びた雑居ビルでしかなかった。顔を覚えられることは避けたかったので、ドアをノックすることはしなかった。森川の事務所は1階。今は不在のようだった。

再びビルの前に戻ってきた須田は、どう行動すべきかを考えた。おそらく森川にも奥にも面が割れているはずなので、張り込みなら木村にでも頼むべきかもしれない。しかし、これは自分がやらなければいけない気がした。ただ、それ以外でも木村に頼むことはある。

「はい、木村興信所です」

「ちよつと調べてもらいたいことがあるんだが」

「さっきの森川って奴のことでしょ」

「そうだ、奴の事務所の住所がわかった」

須田は大平から聞いた雑居ビルの住所を伝えた。

「なるほど。それだけわかってれば何か出てくるかもね」

「今その目の前にいるから、できるだけ早く頼む」

「はいはい、特急料金ね」

電話を切った須田は張り込むのに適当な店でもないかと周囲を見回したが、あいにく適当な店はなかった。仕方なく、そのあたりをうろつきながらビルを見張ることにした。

そうしてしばらくすると、森川がどこから帰ってきた。直接事務所に乗り込んでいくのもなかなか面白そうなことではあったが、それは自制した。今はそれだけのことをする材料がない。

もちろん、いずれはあの連中と直接対峙する必要があるだろう。できれば近いうちにそうできるといい。そのためには、今はあせってはいけない。

そうして須田はさらに待った。待ち続けていると、木村からの連絡が入った。

「とりあえず、わかったことだけ手短かに伝える。さっきの住所の契約者は森川じゃなくて、たぶん関係のない人間が代表の会社。契約は1年前で、今まで特に問題を起こしたようなことはなし。あんたが関わり始めたのは、大家にとってはいいいニュースになりそうにないんじゃない」

「派手にやるつもりはない」

「ああそうですか」

木村は派手な音をたてて電話を切った。

前田は奥から渡された封筒を落ち着かない様子でもてあそんでいた。奥は金だけ渡して、具体的なことは何も言っていない。まさか本気で自分を懐柔できると考えているとも思えず、意図がわからないだけに不気味だった。

前田は立ち上がり、ドラッグの隠し場所の前まで歩いていった。なぜ奥はこんなところに自分を置くことにしたのか。利用するためか、単純に目が届くようにしておこうということなのか？

考えれば考えるほどわけがわからなくなっていった。前田は落ち着きなく室内を歩きまわった。なにか行動を起こさなければならぬいが、何をすればいいのかわからない。頭を冷やす必要がある。前田はドラッグを隠し場所から引きずり出して、それをポケットに入れた。そしてドアを開けてとにかく外に出て行った。

マンションから出て行く前田をじっと見る人影があった。前田はそれには気づかない。人影は前田の姿が見えなくなるまでその場に立っていた。

「せいぜいそうやって悩んでいてくれよ、ぼうや」

人影、奥はそうつぶやいて前田とは別の方向に歩き出した。

一方須田は、相変わらず雑居ビルの前でうろろしていた。森川が戻ってきてから、特に動きはない。だが、須田はここで張り込んでいなければならぬと考えていた。

奥がここに来る可能性。それは十分に考えられることだった。もしそうなれば、今までもろくに捉えることができなかった奥を追いつめるようなものをつかめるかもしれない。

そう考えながら須田はさらに待った。一人の男が手ぶらでビルに向かってくるのが見えた。とっさに相手から見えない位置に移動し、その顔をよく観察した。間違いなく写真で見た奥の顔だった。奥はまっすぐ雑居ビルに入っていた。

須田は若干電話を握る手に力を入れて、石村に電話をかけた。

「俺だ。今ちよつと面白いものを見た」

「例の件絡みか？」

「ああ、奥が出入りしている場所がわかった。さっき言った森川っていう男の事務所だ」

「そこから奴を捕まえられそうなのか？」

「そうできるようにやってみるさ。それで、一つ頼みがある」

「なんだ？」

須田は雑居ビルの住所を告げた。

「このあたりのパトロールを増やしてくれ。ひよつとしたら何かひつかかる可能性もある」

「やってみよう。まあ期待するなよ」

「ああ、頼む」

奥はスナック菓子を食べながら、椅子にふんぞりかえっていた。

「で、例の探偵の動きは何かわかったか」

「何か動きまわっているようですが、今のところは詳細は不明です」
「もうこのあたりを嗅ぎまわってるかもな。なかなか鼻がいい奴なんだろう？」

奥はにやりと笑って森川を見た。

「情報を集めてみましたが、これといったものはありません。一人で仕事をしていて、それほど繁盛していない。扱う案件はこの街の中の小さなものが多く、特に目立ったようなことはなし。ただ、色々なところに多少顔がきくようです」

「例えばどこだ」

「警察や地元の政治家に話をするくらいはできるようです。それ以上のことをやった形跡はありません」

「できないのかやらないのか。どっちだ？」

「それほど影響力があるという証拠はありませんので、できないのでしょう」

「なるほどな。それで、お前はこの探偵をどう思う？」

「そこまで警戒する必要があるとは思えませんが」

「そいつはたぶん過小評価だぜ」奥はスナック菓子を口に放り込んで、飲み込んだ。「この探偵は確実にこつちに近づいてきてる。今までがどうだったかなんてことは知らんが、今回は働きとしちゃあ悪くない。面白いじゃないか」

「そうですね。さえない個人探偵という評判と今回の件での動きは一致しない部分があります」

「この探偵のことをもっと探っておけ。なにかあったらすぐに知らせろ」

「わかりました。あの前田というのはどうするんですか？」

「あつちは放っておけばいい。俺がたまに相手をしてやるよ」

「そうですか」森川は立ち上がった。「では仕事に戻ります」

「準備と根回しはしっかりな。あの探偵のこともある程度おさえておけ」

「わかりました」

森川は事務所を出て行った。残された奥はスナック菓子をつまみながら天井を見上げていた。

「ここじゃ、もうちょっと商売ができそうだと思ってたんだがな」

前田はいつの間にか須田の事務所に向かっていた。事務所の前に到着したが、入る決心もつかず、周りをうろろろしていた。数分間そうしていたが、なんとか事務所の前まで来た。しかし、ドアには外出中という須田の連絡先が書かれた紙が張られていた。前田はその連絡先をメモした。

それから須田に連絡すべきかどうか、さらに迷った。だが、結局連絡することにした。

「もしもし、前田です」

「どうしました、なにかありましたか」

「ええ、ちよつと相談したいことがありまして」

「どうぞ、と言いたいところですが、あなたはすでに依頼をキャンセルしているはずですよ。改めて仕事を依頼するということでもいいのですか？」

前田はしばらくの間黙った。大いに迷っていた。

「もし改めて依頼をされるということなら、引き受けましょう。料金はお返した金額と同額払っていただくことになります」

「はい」須田の言葉に前田は背中を押された。「依頼をします」

「そうですね、ありがとうございます。では依頼内容を聞かせていただけますか」

「今、電話でですか？」

「大雑把でかまいませんよ」

「そうですね、では質問があるんですが、何もできることがなさそうな状況の時、どうしますか？」

「できることを考えますよ」

「それでも何も考えつかなかったら、どうするんですか？」

「自分の行動をしつかり点検してみることでですね。必ずやってないことが見つかります」

やっていないこと。前田は考えたが、すぐに浮かんでくるものはなかった。

「何も思い浮かびませんね」

「そうでしょうね。あなたは今、自分がやっていなかったことをやったばかりですから」

「それは、何を」

「私に依頼をすることですよ。ごまかしではない依頼を。後は、依頼内容を教えていただけるといいですね」

一瞬前田は迷ったが、再び須田に依頼をした以上、答えは一つしかなかった。

「奥という男がいます。その男の目的としようとしていること、それを調べてください。できるだけ早く」

「わかりました。ちょうど私もそれを調べていたところです。できれば、前田さんの知っていることも聞かせていただきたいですね」

「それは、すぐにはできそうにありません」

須田は前田と会うことにした。とは言っても、正面から会うのではなく、例のマンションで待つつもりだった。前田の情報がそれほど役にたつとも思えなかったが、今の前田のインサイダーとしての立場は利用できそうだった。

前田を役に立たせるためには、奥と接触することができなければいけなかった。せっかく情報源とゆさぶりをかける相手が見つかったても、対象に直接働きかけることができなければ意味がない。

奥にどう接触するか。直接あの雑居ビルに乗り込むか。それとも奥が来そうな場所で張り込んで捉まえるか。須田はどちらにするか迷いながら、前田のいるマンションに向かっていた。

マンションの前まで到着した須田は、辺りを一回りして何も異常がないのを確認した。前田に対する見張りでもいるかと想像していたが、そういった人間はいないようだった。前田が出て行ってそれについていったのか、それともそもそも監視がついていないのかは現時点では判断できないことだった。

外から見た限りでは前田が戻っている様子はなかったが、部屋まで行くつもりはなかった。奥や森川と鉢合わせになるわけにもいかない。

前田が出て行くか戻ってくるか、それまでじつくりと待つことにした。

それからしばらくして、前田が戻ってきた。須田はそれを注意深く観察して、誰にもつけられていないのを確認してから、前田が呼んだエレベーターのドアが閉まる直前に駆け込んだ。

「須田さん」

前田は驚いてそれだけしか言えないようだった。須田は特に表情を変えなかった。

「特に監視もないようだったのでお邪魔しました」

「そうですか、それで何でしょうか」

「それはあなたの部屋で話し合いましたか」

2人は無言で部屋に入っていた。須田は部屋に入ると、無言で一通りのチェックをした。特に何も見つからなかったようで、すぐに戻ってきた。

「何もないところですね」

「ええまあ、私物はほとんどありませんから」

「他に何かありませんでしたか？ 例えばどこかに隠されたものがあつたとか」

「隠されたもの、ですか」

前田はポケットに手を入れて、そこに入れておいた錠剤に手を触れた。

「まあそれはいいです。それよりもこれからのことを相談しましょうか」

「まず、私のほうからいくつか質問させてもらいます。前田さんがこのマンションに移ったのは奥の手引きですね」

「ええ、そうです」

「それは、なぜだと思います」

「なぜというのは？」

「あなたをここに移した理由です」

「監視のためでしょうか」

「あなたの滞在先さえわかっているれば監視はできます。あなたを利用しようという場合でも同じです。なにもこんなところを用意する必要はありません」

「つまり、どういうことです？」

「簡単に考えれば、あなたの時間を無駄にすることが出来ます。この移動のおかげで、考えることがたくさんできたでしょう」

「考えること、ですか」

前田は思い当たることがすっかりあるようだった。須田はうなずいて続けた。

「まあ時間稼ぎです。奥はあなたを空回りさせることが目的でしょう。問題はその時間であの男が何をするつもりかということです」

「待ってください。なぜ私に対してそんな時間稼ぎを仕掛ける必要があるんですか」

「あなたはずっと奥を追っているんでしょう？ それなら奴が用心深く慎重で、なかなかしつぽをつかませない人間だというのはわかっているはずです。保険をかけるのを怠ることは、ないと思いますね」

「自分が逃げ出す準備を邪魔させないようにする保険、ですか」

「そうかもしれません。それは私よりもあなたのほうがよくわかるかもしれませんがね。あなたは奥を何年追っているんです？」

前田は口を開こうとしたが、少し躊躇した。だが、すぐに力を抜いて口を開いた。

「5年前からですよ。あなたは知ってますよね？」

「ええ、知っています。あなたも特別隠しているというわけでもないでしょう、前田武志という本名を使っているわけですから。それに私のところに来たわけですから、それを期待していたのではないですか？ それとも、私を試した、といったところでしょうか」

須田の言葉に前田はうつむいて黙り込んだ。そのまま数十秒が経って、前田はおもむろに顔を上げた。

「奴に報いを受けさせてやりたいんです。協力してください」

「それで、あなたはこれからどう行動するつもりですか」

須田は単刀直入に聞いた。前田は予想していたことと違うことを聞かれたらしく、少し虚をつかれたような表情を浮かべた。

「あなたの過去のことを聞くのは今は重要なことはありませんよ。話すのはこれからのことです」

「ええ、そうですね」前田は気を取り直した。「正直、どうすればいいのかわからないんです」

「まずは奥とのつながりを絶たないことです」

「しかしそれだけでは何も解決しませんよ」

「そこをおろそかにしたら、それこそ何も解決できません」

「何もするなつて言うんですか？」

前田は少しいらついたような声を出した。

「なんのために私がいると思っっているのですか？」

須田の言葉に前田はうつむいて自分を落ち着けるように黙り込んだ。

「もちろん、時間はあまりないと思います。奥はおそらく逃げ出す準備をしているかもしれませんから」

「逃げますか」

「慎重な男のようですから、状況が悪くなればそうするでしょう。

あなたはわかっていると思います」

「確かに、そうですね。今まで何度も逃げられたことがありますよ」

「そう、なんとか奥が逃げ出す前に決着をつけるか、逃げられないようにするしかありません」

「あてはあるんですか？」

「ないわけではありません。ですが、奥のことを追い詰める決定的な材料があるわけではありません」

須田のなんとも煮え切らない言葉に、前田は不満そうな顔をした。
「ないものは作るしかありません。そのためには多少の無理もやむを得ません」

「それならこつちからもできることがあるはずでしょう」

「依頼人を必要以上の危険にさらすことは、私としてはとりたい手段ではありません」須田はじつと前田の目を見た。「ですが、あなたが無茶をするというのであれば、多少は賭けを試みるのもいいかもしれませんね」

「賭け、というのは」

「成功すればわかります。ですから、結果が出るまでは慎重に動いてください」

しばらく前田はうつむいていたが、仕方がないといった様子で顔を上げた。

「任せます」

前田と別れた須田は三山に連絡をした。

「俺だ、ちよつと付き合ってもらいたい場所がある」

「例の件か。そろそろ終わらせられそうなのか？」

「そうしないとまずそうなことになってきたんだ」

「おおかた依頼人がしびれをきらしたとか、そんなところか」

「それもあるんだが、少し釘を刺しておかないと逃げ出しそうな奴がいるんだ」

「でっかい五寸釘でも刺すのか？ やりすぎると逆に逃げられるぞ」

「しっかり壁に固定してやらないといけないんだ。やりすぎくらいでちょうどいいかもしれない」

「なるほどな。その相手は例の奥つて野郎か？」

「そうだ。直接接触をしようと思ってる」

「なるほど。まあ、俺としてもこの街にやっかいごとを持ち込んでくれた礼をしてやりたいと思ってたところだし、協力してやるよ」

「すまん。ところで、大平さんはそっちにいるか」

「ああ、おとなしくしてるぜ」

「それじゃ、今からそっちに行く。くわしいことは着いてから話す」

須田は電話を切って、とりあえず自分の事務所に向かった。そして事務所に到着すると、金庫を開けて小さな箱を取り出した。その箱を開けて中身を確認してから、それを鞆に入れた。さらに作業用の厚手のグローブも鞆に入れた。カフェインの錠剤を一粒水で流し込んでから、須田は三山の店に向かった。

店の前ではバーテンダーが掃除をしていた。須田は一声かけてから店内に入ると、店内には掃除をしている三山がいた。

「掃除中悪いな」

「お前が遅いから暇つぶししてただけだよ。珍しく鞆なんか持ってた？」

「色々必要なものが多くてな、事務所に寄ってきたんだ。太平さんは事務所か？」

三山がうなずくのを見て、須田は事務所に入った。大平は椅子に座って何かを手帳に書いていた。須田が入ってきたのを顔を上げて確認すると、手帳をしまった。

「大平さん、これからちよつと面倒をかけるかもしれません」

「面倒というのは、なになかな？」

「あなたの本業が忙しくなるかもしれません。昔の火を消すので」

「そうか」大平は軽く笑った。「君の好きにするといい。私も久しぶりに活躍の場ができるのは楽しみだよ」

「ありがとうございます」

須田は頭を下げて事務所から出て行った。

「つまり、お前の言う5年前の事件っていうのを掘り返すのか」

三山はあきれたような声を出した。

「そうだ」

「またなんでそんな面倒くさいことをするんだよ」

「これは推測だけだな、奥の本拠地は5年前の件の町だ。あの男を叩くにはそこに追い込んでからにしないと駄目だ」

「お前、そこまで遠出する気なのか？」

「いや、それはやりたい人間にまかせる」

「なるほどな。つまり、くそ野郎をこの街から叩き出して、自分の本拠地に逃げ帰らせようってことか。しかし、そう都合よくいくのか？」

「わからない。だが、警察や政治家を動かした昔のことを考えれば、奥はそこでは影響力があつて安全だと考えていてもおかしくはない」

「本拠地だから逃げ出すわけにもいかずに、ほとぼりが冷めるまでそこで油を売ってすごすかもしれないか」

「そうだ。だからこつちでも少し派手にやってやる必要があるかもしれない」

「それで、事務所に押しかけるわけか」

三山の言葉に須田は首を横に振った。

「とりあえず連絡だけだ。あつちにも考える時間が必要だろうからな」

「本当にそんなことがうまくいくと思ってるのか？」

「ほとんど賭けだ。だが、奴が本拠地に戻って火消しをしなきゃならないような状況は作ってやるつもりだ」

「ずいぶんとでかい話になってきたな」

「そつだな、電話を借りるぞ」

須田は例の雑居ビルの電話番号をダイヤルした。

「なんだ？」

電話には奥らしき人物が出た。須田は一呼吸おいてから口を開いた。

「たぶん知ってると思いますが、私は須田という探偵です。あなたは？」

「当ててみるよ、色々嗅ぎまわってるんだろ」

「そうですか。ところで奥さん、少しあなたと話をしたいと思いましてね」

「俺のほうからは何もない」

「残念ですが、私のほうからは大いに用があります。あなたもできるだけ穩便にことを済ませたいとは思いませんか？」

「ずいぶん大きく出たな」奥は受話器の向こうで笑っているようだった。「いいだろう、会ってやる」

「それではあなたが今いる場所で会いましょう」

須田は電話を切った。三山はそれを見てためいきをついた。

「面倒くさいことになりそうだな」

「ああ、悪いが力を貸りることになる」

須田と奥は雑居ビルの一室で初めて顔を合わせていた。椅子に座った須田は無表情で、特に力の入っていない様子だった。向かい側の奥は警戒と軽いいらつきが混ざったような表情を浮かべていた。

「それで、探偵？ わざわざ俺を呼び出した言い訳でも聞かせてもらおうか」

「呼び出した覚えはありませんね。我々は偶然同じ場所に居合わせただけですよ」

須田は白々しくそう言った。奥は軽く舌打ちをした。

「ああ、そうだな。それじゃ立話でも始めるか」

「いいや」須田はゆっくりと首を横に振った。「話合いなんでしませんよ。とにかく私の話を聞いてもらいましょう」

奥は黙って須田をにらみつけた。須田は表情も声の調子も変えずに話を始めた。

「まず最初に確認しておきましょうか。私はできるだけこの件は表に出したくないと思っています。利害関係が込み入ってますからね、うまく処理するためには、そのほうが都合がいい。もちろん、それは何も追求しないということではありませんし、何も明らかにしないということでもない」

須田はそこで一度言葉を切って、奥の目をじつと見た。

「叩けばほりりがたつぷり出てくるような人間にとつては、都合がいい解決の仕方になるでしょう。最善ではないのは当然ですが、こうせざるを得ない状況というのもある。そして、こういったことをスムーズに進めるためには、関係者の協力と妥協が必要になってきます」

「俺に協力しろっていうのか」

「まあ、協力や妥協がなくてもそれなりのことはできます。幸いにも私は、それほど利害関係に縛られているわけではないので。ただ

し、あなたにも考慮すべき利害関係者というものになってもらえれば、そんなことはしなくてすむでしょうね」

奥は怒りやいらつきではなく、笑った。

「ずいぶん言ってくれるな。まるでお前が全部仕切ってみたいじゃないか」

「仕切ってなどいけませんよ。今このことをうまく治められる立場が私に巡ってきたというだけです。偶然、いいタイミングでね」

「わかった、乗ってやってもいいぜ。内容次第ではな」

「それなら、早速始めましょうか」

須田がそう言つと、ドアが勢いよく開き、三山が入ってきた。須田は振り返りもせずは無表情のままだった。三山は入ってきた時と同じようにドアを勢いよく閉めて、大股で奥の前まで来て、見下ろした。

「よおクズ野郎。お前の息の根を止めてやれないのが残念だよ」

奥は三山の顔を見上げてにやりと笑った。

「あんたはここらへんで顔がきくつていう奴だったか。今更何の用だ？」

「いらないことは言わないほうが利口だぞ。俺はその探偵ほど優しくも慎重でもないからな。それに俺はこの街のことを愛してる。

お前なんぞに荒らされて黙っているわけにはいかないんだよ」

「なら、好きにしたらどうだ」

「ああ、好きにやるさ。だがそれは今じゃあない」

三山はそう言つと、須田の後ろにまわって、その肩に手を置いた。
「とりあえずこいつに任せてからだ」

「それではまず、あなたの手に入りたいものを聞かせてもらいましょう」

須田の言葉に奥はその背後の三山をちらつと見て笑みを浮かべた。
「ここで商売するのだって、それなりに手をかけてるんだぜ。そう簡単に手放すのはごめんだ」

「危なくなったら立ち去る。それがあなたのやりかただと思いましたが」

「まあな、別に商売できるのはここだけってわけじゃない。しかしなあ、もう一度言うが、それなりに手も金もかけてるんだよ。だから俺は商売を続けたい。わかるな？ 探偵」

「それはわかりますが、それなら私としてはそうできないようにするしかありません。この街だけでとどめる気もありませんね」

「大きくでるじゃないか」

「そうすることもできるといっただけですよ。くどくなりますが、そうしたいわけではありません」

「つまりこのクソツタレな街から撤退するのが最低条件だよ」

「そういうことになりますね。もちろんそれはあなたの意思で決めればいいことです」

「大した野郎だ」奥は笑いながら首を横に振った。「探偵ってやつは強請屋と区別がつかないな」

「たまに言われているようですね。それで、どうしますか？ おとなしくこの街から出て行くか、それとも、出て行かされるか。決まりましたか」

須田の言葉と態度に奥は舌打ちをした。それを聞いても須田は全く表情を変えずに、奥の答えを待った。

「帰れ」

奥はつぶやくように言った。

「よく聞こえませんか」

「帰れと言ったんだ。貴様みたいな犬が俺をどうこうできると思っ
なよ」

「そうですか。それは残念です」

須田は立ち上がった。

「おい、いいのか」

三山は須田を止めるように声をかけたが、須田はそれを無視して
ドアに向かった。そして、ドアノブに手をかけてから振り返った。

「気が変わったら早めに言ってください。動き出したら止められま
せんから」

奥は何も答えなかった。三山は黙って須田の後を追って部屋を出
た。須田はドアの横で三山を待っていた。

「あれでいいのか？」

「いいんだ」須田はうなずいた。「焦って下手をつつてくれれば最
高だ」

「スタンドプレーは控えろよ。長生きできないぞ」

「それが出来るのが自営業のいいところなんだよ」

奥との対決を済ませた須田の行動は早かった。まずは大平に連絡をした。

「須田です」

「ああ、須田君か。何か進展があつたのかね？」

「これから進展させます。太平さんには地元に戻って準備をしておいてもらいたいんです」

「準備？」

「はい、奥のことで騒がしくなると思うので、その準備です」

「そうか」太平はどこなくうれしそうな声になった。「それはしつかりと準備をしておかないといけないね」

「奥がそちらに行く可能性もあるので、それに対する対策も必要になるかもしれません」

「腕が鳴るよ」電話の向こうで、太平は笑っているようだった。「ありがとう須田君」

「まだ決まったわけではありませんよ」

「期待しているよ」

「わかりました」

須田は電話を切ると、すぐに前田の番号をダイヤルした。

「須田です」

「はい、なんですか？」

「少々予定が変わりました。これから奥に圧力をかけます。何か行動を起こすか、それとも自分の本拠地に逃げ込むかもしれません」

「どうということなんですか」

「賭けですね。うまくいけば奥を自分の巢に追い詰めることができるでしょう」

「うまくいかなかったら？」

「反撃されるかもしれませんが、それはそれでいいでしょう。あち

らから表に出てきてくれるのなら都合がいいと言えます。ほとんどその可能性はないでしょうが」

「自分の巣ということは」

「あなたがよく知っている場所です。5年前の決着をつけるには都合がいいでしょう」

「話が違いますね」前田はいらついているようだ。 「ここで終わらせるつもりじゃなかったんですか？」

「望んでいる結果を追うより、最悪の結果を選択しないことのほうが重要です。それにあそこでなら大平さんの協力も得られます」

「それは確かですか」

前田は大平の協力という言葉に強く反応した。

「ええ、確かです」

しばらく間があった。

「わかりました」

「それでは、身の回りによく注意しておいてください。さしあつて、あなたに危険はないと思いますが何かがあるかわかりませんから何か動きがあったらこちらから連絡します」

須田は電話を切った。そして、手帳を取り出してそれに何かを書き始めた。

前田は須田からの連絡を待つてから1週間が経った。その間事態は拍子抜けするほど進展していないように見えた。だが須田からの連絡がようやく入った。

「須田ですが、お知らせしたいことがあります」

「何か進展があつたんですか？」

「これからです。とりあえず今から言う雑誌を見ていただけますか？」

須田は雑誌の名前を告げた。それなりに名の知られたゴシップ誌だった。

「それに何があるんですか？」

「読んでみればわかります。それから、あなたのいるマンションからは早めに出たほうがいいですね」

電話はそこで切られた。前田はわけがわからないまま言われた通りに近くの書店に行き、言われた雑誌を手についた。毒々しい表紙のその雑誌の目次のページを見ると、前田の顔色が変わった。素早く読んで、その雑誌を閉じると、すぐに書店を出た。

マンションに戻ると、ほとんどない荷物をまとめているところに、電話がかかってきた。

「須田です。雑誌は見ていただけましたか？」

「見ました。ずいぶんひどい記事ですね」

「そうですね。ヒモをやっていた男の疑惑の自殺にから始まって、殺人未遂、そして過去にあつた某地方政治家の黒い噂。警察の腐敗。なかなかよく書けていると思いますが。心当たりのある人間には楽しいものではないかもしれませんね」

「これで奥があのかに帰るんですか？ どこかほかのところに逃げるか、それとも、この街から動かないかもしれませんよ」

「逃げるにしても奥はあの町に一度は帰ると思います。5年前の件

を考えれば奥が一番影響力を行使できる場所、つまり本拠地はあそこでしようからね。私の印象では、奥は自分が投資した労力と金を無視できるような人間ではありません」

須田の言葉に前田は黙って考え込んでいるようだった。

「それに大平さんがすでに戻って、色々と種をまいているはずですよ。奥が戻りたくなるような、そしてそれを逃がさないようにするためものをね。同時に、あの人の雇用主の利益も守るようにするでしょう。あの人ならそれくらいはできますよ」

「わかりました」前田は意を決したようだった。「あの町に戻ります。大平さんと連絡をとってくれませんか？」

「連絡先をお教えしますよ」須田は大平の連絡先を告げた。「三島さん達のことはどうするつもりですか？」

「彼女も誘ってみます。最後まで見届けたいでしょうから」

「危険かもしれませんよ」

「お互いに承知の上です」

「それでは、ここを発つ前に私の事務所に来ていただけますか。清算と最後のご報告がありますから」

「わかりました。2時間後くらいに行きます」

須田は電話を切った。

須田は三山からの電話を受けていた。

「例のクソツタレが荷造りして出て行ったみたいだ」

「一人でか？」

「いや、例の探偵も一緒だよ」

「そうか。助かった、もう見張りはいらない」

「終わりか」

「こつちの手からは放れるんだよ」

「そりやせいせいするな」

「同感だな」

須田はそう言つて電話を切った。しかしすぐに石村から電話があった。

「お前ね、こういうことやるんじゃないよ」

須田は石村の愚痴に近い第一声を黙つて聞いた。

「一応こつちでも動いてはいたんだぜ。それがこのスタンドプレーで吹っ飛んじまったよ」

「あつちの警察に活躍の機会を譲つてやればいいじゃないか。そのほうが何かと丸く収まるだろ」

「ああそうだよ。まったく、やつてくれるな」

「問題ないよな」

「ああ、ない。ないってことにしておこう」

「それじゃあ、仕事に励めよ」

一方的に電話を切つた須田は、前田の依頼の伝票を作り始めた。それから資料の整理等をしていたらあつという間に時間が経つたように、気がついたら前田が来る予定の時刻になっていた。だが、鳴つたのは電話だった。

「はい、須田探偵事務所です」

「前田です。実はすぐにここを出ることにしたので、駅で会えませ

んか？」

「急な話ですね。どうしたんですか？」

「実はあれから太平さんから連絡があったんです。奥があの町に向かったらしいって話でした」

「そうですか。それは時間が惜しいでしょうね。では私が駅まで行きますよ」

「はい、ありがとうございます。では駅で待っています」

それから数十分後、須田と前田は駅のホームで向かい合って立っていた。すでに清算は済ませていた。

「これから大変ですよ前田さん。奥の存在が公になって色々やかましくなっていますから」

「それこそ望むところですよ」

「今度は大平さんの協力が得られるますから、2人で協力すればいい形で決着がつけられるでしょう」

「ええ、やってみます」

2人は握手をした。

「うまくいったら連絡をください」

須田はそう言って手を離れた。前田がうなずくを見ると、それに背を向けて駅のホームから去っていった。

木村の事務所に立ち寄った須田は、今回の事件が手を放れたことを話した。

「それで、お見送りは済んだわけ」

「済んだよ。あとは連中次第だ」

「解決を丸投げとは、無責任だと思わなかった？」

「俺ができるのはここまでだよ。これ以上は金を無駄に使わせるだけさ」

「出張すればいいじゃない」

「それは昔やったし、結果は散々だった」

「そう、それじゃ今回の諸々の支払いをしてもらいたいんだけど」

木村は机の中から請求書と、どこかの住所を書いた紙を須田に差し出した。

「請求書はともかく、なんだこれは」

「レストランの住所。とりあえず個人的な支払いを済ませてもらうと思うてね」

「相手はいないのかよ」

「うっさいって。予約してあるから、今日の夜7時に事務所に来なさい」

「わかったよ」須田は両方の紙をポケットに入れた。「それじゃ夜な」

「はいはい、遅れないようにね」

木村は手を振って去っていった。須田はその後姿を見送ってから、早足で歩き始めた。

「ああ、どうも」

三山のバーの前では、掃除をしているバーテンダーが須田に挨拶をした。

「三山はいるかな」

「ええ、奥にいますよ」

須田は店に入り、奥の事務所へのドアを開けた。三山は机に足を乗せて薄い本を読んでいた。

「暇そうだな」

須田の声に三山は顔だけ上げた。

「誰かさんのおかげで忙しかったけどな。まあ本業が忙しくなるとうれしいね。それで、お見送りは済んだのか？」

「ああ、元気に帰っていった。うまくやってくれるのを期待したいところだ」

「だいたいな」

須田はそれにならずくと、ドアノブに手をかけた。

「なんだ、もう帰るのか？」

「ああ、俺も仕事だ」

バーを出た須田はゆつくりと自分の事務所に戻っていった。そしてドアを開けると、ちょうど電話が鳴り始めた。須田はすぐにその電話をとった。

「はい、須田探偵事務所です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8077c/>

つまらない仕事

2010年10月8日13時31分発行